

事訴訟法第二十六條參照

(二) 事物ノ管轄 民事訴訟法ニ於テハ價額百圓以下ナルト以上ナルトニ依リテ第一審裁判所ノ管轄ヲ同ウセスト雖モ刑事訴訟法ニ於テハ第一審裁判所ノ管轄ハ金額ノ多寡ニ依ラスシテ罪ノ輕重ニ依リテ區別スルモノト去レハ私訴ヲ公訴ニ附帶セシムルトキハ其結果トシテ金額百圓以上ノ訴訟モ區裁判所ニ屬スルコトアル可ク又百圓以下ノ訴訟モ地方裁判所ニ屬スルコトアル可シ之ヲ要スルニ私訴ハ公訴ノ繫屬スル裁判所ニ之ヲ提起セサル可カラス

(三) 裁判所ノ階級 通常ノ民事訴訟法ニ在リテハ皇族ニ對スル訴訟ヲ外ニシテハ(構成法第三十八條)何レモ第一審第二審及上告審ノ三級アレトモ若シ公訴ニ附帶シテ民事訴訟ヲ提起スルトキハ必スシモ以上ノ三級審ノ裁判ヲ受クルコトヲ得ス例ハ大審院ノ特別權限ニ屬スル事件ニ附帶シテ民事訴訟ヲ提起シタルトキハ大審院ノ上ニハ上級裁判所ナク從テ特別事件ニハ上訴ノ途ナキヲ以テ之ニ附帶セル私訴モ亦第一審ヲ以テ直ニ終審トナルカ如キ又刑事訴訟法第四條ニ依レハ私訴ハ公訴ニ付キ第二審ノ判決アルマテ何時ニテモ其公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得ルヲ以テ若シ公訴ノ第二審ニ至リ始メテ私訴ヲ提起シタルトキハ控訴權ヲ喪失スルカ如キ是レナリ

第二、時効

普通民事訴訟ノ時効ハ民法ニ依リテ定マルモ私訴ノ時効ハ公訴ト其期間ヲ同ウス即チ違警罪ト其原因ヲ同ウセル私訴ハ六個月、輕罪ト其原因ヲ同ウセル私訴ハ三年、重罪ト其原因ヲ同ウセル私訴ハ十年ノ經過ヲ俟テ時効ニ罹ルモノニシテ通常民事ノ時効ニ依ルコトヲ得ス(刑事訴訟法第八條乃至第十一條)

第三、上訴並ニ故障ノ期間

通常民事ノ訴訟ニ在リテハ控訴及上告ハ一個月(民事訴訟法第四百條、第四百三十七條)抗告ハ七日(同第四百六十六條)故障ハ十四日(同第二百五十五條)ノ期間ニ於テ之ヲ爲ス可キモノナレトモ刑事訴訟ニ於ケル上訴ノ期間ハ控訴ハ五日(刑事訴訟法第二百五十二條)上告ハ三日(同第二百七十一條)抗告ハ三日(同第二百九十五條)闕席判決ニ對スル故障ハ三日(同第二百二十九條)ナリトス故ニ公訴ニ附



帶シテ私訴ヲ爲シタルトキハ此期間ニ從ハサル可カラス  
刑事訴訟法第四十二條ニ忌避ノ申請及其裁判ニ付テハ民事訴訟法第三十四條  
乃至第三十八條ノ規定ニ從フトアルニ依リ此場合ニ於ケル決定ニ對スル抗告  
ノ期間ハ或ハ民事訴訟法ニ依リ七日ナルニ似タリト雖モ尙ホ刑事訴訟法ノ規  
定ニ依リテ三日ナリト謂ハサル可カラス

第四、 訴狀ノ形式

民事訴訟法ニ依レハ地方裁判所ノ第一審ニ屬スル事件ニ付テハ判決ヲ受ク可  
キ事項ハ書面ニ依リテ之ヲ申立テサル可カラス(民事訴訟法第二百二十二條若  
シ然ラサルトキハ當初ヨリ其効ナキモノトス此規定ハ尙ホ私訴ニ於テモ之ヲ  
守ラサル可カラサル乎曰ク否刑法附則第六十一條ニ依レハ刑事裁判所ニ於テ  
ハ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲ス  
コトヲ得ヘシ現今ハ刑事裁判所ナルモノナシト雖モ此附則ハ今日尙ホ効力ヲ  
有スル法律タリ從テ舊法ノ違警罪裁判所ハ現行法ニ於ケル區裁判所トシ又輕  
罪及重罪裁判所ハ現行法ニ於ケル地方裁判所ト解スルコトヲ得ルヲ以テ私訴

ヲ公訴ニ附帶セシメタルトキハ書面ニ依ラズシテ口頭ヲ以テ之カ申立ヲ爲ス  
コトヲ得ヘシ

第五、 印紙ノ貼用

印紙ハ貼用スルコトヲ要セサルヤ否ヤ即チ第一ニ私訴ヲ提起スルトキ第二ニ  
判決ノ執行ヲ得ルトキニ印紙ヲ貼用ス可キヤ否ヤト云フニ現行ノ慣例ニ依レ  
ハ一般ニ之ヲ貼用スルニ及ハサルモノト爲セリ而シテ其理由如何ト釋ヌルニ  
何人モ之ニ明答ヲ與フルモノナシ唯タ刑法附則第六十一條ノ末文ニ其民事裁  
判所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式ニ從フ可シトアルニ依リ公訴ニ附帶シタ  
ルトキハ敢テ印紙ヲ貼用スルヲ要セスト説明スル者ナキニ非スト雖モ未タ之  
ヲ以テ十分ナル説明ト爲シ難シ左レハ此事項ハ裁判所ノ慣例ト看ルノ外ナカ  
ル可シ

第六、 消滅ノ原因

刑事訴訟法第七條ハ私訴消滅ノ原因ヲ掲ケタリ曰ク第一、拋棄又ハ和解第二、確  
定判決第三、時効ト然レトモ控訴以上ニ至リテハ取下モ亦私訴消滅ノ一原因ナ



ル可シ何トナレハ私訴ハ素ト民事ノ訴ナレハ之カ取下ヲ許サ、ルノ理ナク既ニ之ヲ取下ケタルトキハ裁判茲ニ確定スレハナリ又民事訴訟法ニ依レハ認諾モ亦拋棄又ハ和解ノ如ク訴ノ消滅ノ一原因ナレトモ刑事訴訟法ニ於テハ之ヲ掲グルコトナシ

然リ而シテ右ノ原因中第一及ヒ第二ハ茲ニ謂フ所ノ例外ニハ非サレトモ第三ノ時効ハ全ク普通民事ノ訴ニ對スル一例外ナリ而シテ其如何ナル年月ニ於テ時効ニ罹ルヤハ前ニ論述シタレハ茲ニ之ヲ贅セス

上來列擧シタル六個ノ事項ヲ除キ其他ハ凡テ民事訴訟法ヲ適用ス可キモノトス例ハ一三者ノ參加ニ關スル場合(刑事訴訟法第四條第二項)訴訟費用ニ關スル場合(同第二百一條第二項)判決執行ニ關スル場合(同第三百二十三條)及闕席裁判ニ關スル場合(同第二百二十六條第二項)ノ如キ是レナリ我刑事訴訟法ハ此等ノ場合ニ於テ特ニ民事訴訟法ヲ適用ス可キコトヲ明言スレトモ畢竟贅文字タルヲ免レサル可シ何トナレハ苟クモ例外ヲ設ケサル限リハ此等ノ場合タル素ヨリ民事訴訟法ヲ適用ス可キモノニシテ往時ハ暫ク措テ問ハス現今ノ如ク完全ナル民事訴訟法ア

ル以上ハ最早之ヲ明言スルノ必要ナケレハナリ

### 第三章 私訴裁判ノ方法

刑事訴訟法ハ治罪法ト私訴ノ裁判方法ヲ異ニシ公訴ト同時ニ辯論ヲ爲サスシテ公訴ノ辯論終リタル後始メテ私訴ノ辯論ヲ開始シ其判決ハ同時ニ之ヲ行フヲ以テ原則トス故ニ公訴ノ辯論中ハ私訴ノ當事者ハ何等ノ容喙ヲ爲スコトヲ得サルナリ從テ民事原告人ハ民事ノ辯論開始後ニ非サレハ裁判官ニ對シテ忌避ノ申請ヲ爲スコトヲ得サル可ク又證人、鑑定人及ヒ被告人ノ呼出、訊問ヲモ爲スヲ得サル可クシテ實際上大ニ不便ヲ生セサルヲ得ス余ハ寧ロ舊法ノ如ク私訴及公訴ヲ同時ニ辯論スル規定ヲ望ムモノナリ(刑事訴訟法第二百條第一項)

斯ノ如ク公訴ト私訴トハ同時ニ判決スルヲ原則ト爲セトモ茲ニ一二ノ例外アリテ存ス即チ私訴ノ判決カ公訴ニ先ツ場合及公訴ニ後ル、場合はレナリ以下之ヲ分説ス可シ

(一) 私訴ノ判決カ公訴ニ先ツ場合 刑事訴訟法第二百二十九條ニ依レハ公訴ノ闕席判決ニ對スル故障ノ期間ハ三日トスレトモ此期間ハ禁錮以上ノ刑ヲ言



渡シタル判決ト罰金以下ノ刑ヲ言渡シタル判決及私訴ノ判決トニ依リ其起算點ヲ同ウセス即チ禁錮以上ノ刑ヲ言渡シタル判決ニ付テハ故障期間ハ被告人自ラ其送達ヲ受ケ又ハ判決執行ニ因リ刑ノ言渡アリシコトヲ知リタル日ヲ以テ始マルモ罰金以下ノ刑及私訴ノ判決ニ付テハ關席判決ノ送達ヲ以テ始マルモノトス故ニ斯ル場合ニ於テハ第一審ノ判決ハ縱令同時ニ之ヲ下シタルモ禁錮刑ニ付テハ未ダ故障ナキニ拘ハラヌ私訴ハ獨立シテ進行シ遂ニ公訴ノ判決ニ先ダツノ結果ヲ生ス可シ

(二) 私訴ノ判決カ公訴ニ後ル、場合 刑事訴訟法第二百條第二項ニ依レハ私訴ニ付キ取調未ダ十分ナラサルトキハ公訴ノ判決アリタル後其判決ヲ爲スコトヲ得トアリ是レ讀ンテ字ノ如ク別ニ説明ヲ要セス

### 第八編 公訴

#### 第一章 公訴提起ノ原因

公訴ニハ刑法上ト訴訟法上トニ依リ二个ノ意義アリテ存ス即チ犯罪アレハ之ニ對シテ公訴權ヲ生ス可シ是レ實體上ノ關係ヨリ生スルモノニシテ國家ハ實體上

公訴  
ノ原因

既ニ此權ヲ有スルカ故ニ其效果ヲ保持セシカ爲メ相當官吏ニ命ジテ一定ノ人ニ對シ裁判所ニ其犯罪事實ニ付テ判決ノ請求ヲ爲サシム是レ訴訟上ノ關係ヨリ生スル公訴權ナリトス訴訟上ニ於ケル公訴ハ即チ此第二ノ意義ニ於ケル公訴ナルヲ以テ是ヨリ此意味ニ依レル公訴提起ノ原因ヲ舉ク可シ

#### (第一) 告訴、告發及自首

此三者ハ犯罪事實ヲ相當官吏ニ告知スルノ方法ナレトモ之ヲ告クル者ノ身分ニ依リ其名稱ヲ同ウセサルノミニシテ性質ニ於テハ異ナルコトナシ唯チ自首ハ刑法第八十五條ノ規定アルニ止マリ刑事訴訟法ニ何等ノ規定アルヲ見スト雖モ既ニ其性質同一ナル以上ハ告發、告訴ノ手續ニ準スルコトヲ得ヘシ

(二) 告訴 告訴權ハ被害者ニ屬ス而シテ告訴ヲ受理スル官吏ハ其犯罪ヲ管轄スル地ノ司法警察官并ニ地方裁判所又ハ區裁判所ノ檢事ナリトス(刑事訴訟法第四十九條)

告訴ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ書面ニテ告訴ヲ爲シタルトキハ告訴人自ラ署名捺印セサル可カラス又口頭ヲ以テ爲ス場合ニ告訴人署名捺



印シ能ハナルトキハ之ヲ受取リタル官吏ニ於テ其旨ヲ附記セサル可カラス又  
告訴ハ本人又ハ代理人ニテモ之ヲ爲スコトヲ得若シ代理人ナルトキハ委任狀  
ヲ添ヘサル可カラス又無能力者ノ告訴ハ法律上代理人ニ於テ有効ニ之ヲ爲ス  
コトヲ得ヘシ

告訴ハ其取下ヲ爲スハ勿論其申立ヲモ變更スルコトヲ得

書面ニテ告訴ヲ爲シタル場合ニ司法警察官ニ於テ犯罪アリト思料スルトキハ  
即決ス可キ事件ニ付テハ警察署然ラサレハ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送り若シ  
口頭ニテ告訴ヲ爲シタルトキハ調書ヲ作り之ヲ告訴人ニ讀聞セ共ニ署名捺印  
セサル可カラス

(二) 告發 告發ハ被告人及被害者以外ノ者カ犯罪アリト認知シタルトキ之ヲ相  
當官吏ニ告知スルコトヲ云フ是故ニ何人ト雖モ此權ヲ有セサルモノナシ  
告發ノ方式ハ毫モ告訴ト異ナル所ナシ故ニ余輩ハ茲ニ復々之ヲ贅セス

右ニ述ヘシ所ハ通常人ノ告發ニ關スル規定ナレトモ之ト大ニ其手續ヲ異ニス  
ル別種ノ場合アリ即チ官吏、公吏カ其職務ヲ行フニ當リ犯罪アルコトヲ認知シ

又ハ犯罪アリト思料シタルトキニ於ケル告發ノ方法はレナリ今其通常ノ場合  
ト異ナル所ヲ擧クレハ(第一)官吏、公吏ノ告發ハ書面ヲ以テ爲サ、ル可カラス而  
シテ可成證據及事實參考ト爲ル事物ヲ添フルコトヲ要ス(第二)官吏、公吏ハ告發  
ヲ爲ス可キ義務アリ通常人ハ必スシモ告發又ハ告訴ヲ爲スノ義務ナキコトハ  
前ニ述ヘタル所ナリ之ニ反シテ官吏ハ必スヤ之ヲ爲スノ義務ヲ有ス然レトモ  
右ハ勿論職務上發見シタル犯罪ニ係ルヲ以テ夫ノ散步ノ際又ハ自己ノ家ニ盜  
難アリタルコトヲ告訴スルカ如キハ普通人ノ場合ト同シ之ヲ爲スノ義務ナ  
キモノトス(第三)官吏、公吏ハ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發セサル可カラス是レ  
亦通常人ノ場合ト大ニ異ナル所ナリ而シテ法律ハ何か故ニ本場合ノ如キ區別  
ヲ設ケタルヤ余ハ其理由ヲ了解スルニ苦シマサルヲ得ス加之若シ斯ノ如ク司  
法警察官ニ告發スルコトヲ許サ、ラノカ實際上ノ不便實ニ尠ナカラサル可キ  
ナリ惟フニ修正ノ際ハ宜シク此規定ヲモ改正セシコトヲ要ス(刑事訴訟法第五  
十二條)而シテ茲ニ稍疑ノ存スルハ官吏、公吏ハ一旦爲シタル告訴、告發ヲ取下ク  
ルコトヲ得ルヤ否ヤノ問題はレナリ普通ノ場合ニ於テハ前ニ一言セルカ如ク



其取下ハ勿論申立ノ變更ヲモ爲スコトヲ得ルハ本法第五十五條ノ明示スル所ナリ然レトモ是レ告訴、告發ヲ權利ト認メ義務ト爲サ、ルヨリ生スル當然ノ結果タルニ過キサルヲ以テ余ハ官吏、公吏ニ於テ既ニ告發ヲ爲スノ義務アル以上ハ素ヨリ取下ヲ爲シ得サルモノトスルヲ以テ妥當ナリト信ス

告發ノ義務ヲ有スル官吏中ニハ檢事及司法警察官ヲモ包含スルヤ否ヤ今檢事ニ付テ之ヲ見ルニ普通ニ官吏ト云ヘハ檢事モ亦之ニ包含スルヤ論ヲ俟タス然レトモ檢事ハ起訴ノ權ヲ有スルモノナルカ故ニ若シ自ラ犯罪アリト認知シタルトキハ直チニ起訴ノ手續ヲ爲セハ足ル可ク敢テ第五十二條ノ手續ヲ履踐スルノ必要ナシ且ツ本法第六十四條ニ所謂檢事ハ被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルモノト思料シタルトキハ管轄裁判所ニ送付ス可シトノ規定ニ依ルモ檢事ハ當然本條ノ官吏中ニ包含セサルコト明カナリトス

次ニ司法警察官ハ如何今夫レ單ニ第五十二條ニ付テノミ解釋ヲ試ミンカ前ニ述ヘタルカ如ク檢事モ共ニ官吏中ニ包含セシメテ不可ナキカ如シト雖モ之ヲ第四十九條ニ對照スルトキハ自ラ其然ラサルコトヲ明カニスルヲ得ヘシ即チ

同條第二項ニハ司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ違警罪ニ付キ即決ヲ爲ス場合ヲ除ク外速ニ其書類ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シトアリ然ルニ若シ第五十二條ノ官吏、公吏ノ中ニ司法警察官ヲ包含セシムルトキハ同條ニハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シトアルニ因リ若シ司法警察官カ職務ヲ行フニ當リテ犯罪ヲ認知思料シタルトキハ二个ノ不都合ナル結果ヲ生ス可シ即チ第一ニ裁判所ノ管轄ナルヤ否ヤヲ問フニ及ハス自ラ職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發セサル可カラズ第二ニ即決ヲ爲ス可キ場合ト雖モ即決ヲ爲スコトヲ得スシテ直チニ檢事ニ告發セサル可カラサルニ至ラン司法警察官カ自ラ犯罪ヲ認知シタルト他人ニ因リテ之ヲ知り得タルトニ依リ果シテ斯ノ如キ差別アルヤ余ハ到底其理由ノ由テ存スル所ヲ了解スル能ハサルナリ抑モ司法警察官ハ檢事ノ補助官ニ非スヤ而シテ檢事ハ告發ノ義務ナキモノナルコトハ前ニ述ヘタル所ナリ然ラハ之カ補助官タル司法警察官ニ於テモ亦同シク告發ノ義務ナシト云フニ於テ論理上何ノ牴牾スル所アラシク況ンヤ第四十九條第二項ニ於テ既ニ司法警察官ノ履踐ス可キ特別ノ手續ヲ示シタルニ於テオヤ故ニ余ハ第五十二



條ノ官吏、公吏中ニハ司法警察官ヲ包含セスト斷言スルニ躊躇セサルナリ但シ司法警察官ニ告發ノ義務ナシト云フハ其犯罪事件ヲ放擲シテ顧ミサルモ可ナリト云フニ非ス此等ノ官吏ハ犯罪ヲ捜査スルノ義務ヲ帶フルヲ以テ之ヲ相當裁判所ノ檢事ニ送致ス可キ義務アリ簡約ニ言ヘハ搜索權ヲ有スル人ハ特ニ告發、告發ヲ爲サスシテ直チニ起訴又ハ移送ヲ爲ス可キモノトス

(三) 自首 自首ニ付テハ刑事訴訟法中何等ノ規定ナシ然レトモ性質上告發、告發ト同一ナルヲ以テ自首モ亦告發、告發ノ手續ニ準セサル可カラス故ニ申立ヲ受ク可キ官吏及申立ノ手續ニ關シテハ凡テ告發、告發ノ手續ヲ參觀ス可シ唯タ刑法第八十五條ニ官ニ自首シ云々トアルヲ以テ官トハ何レナルヤ廣ク一般ノ官吏ヲ指ス乎將タ相當官吏ノ謂ナルヤノ問題ヲ生セサルヲ得ス余ハ前者ノ如キ空漠ナルモノヲ指シタルモノト信スル能ハサルヲ以テ刑法第八十五條ノ官トハ即チ相當官吏ノ謂ニシテ相當官吏ハ即チ檢事及司法警察官ナリトス從來治罪法ニ於テハ豫審判事ニ爲シタル自首モ亦有効ナリシカ刑事訴訟法ニ依レハ豫審判事ハ司法警察ノ事務ヲ取扱フコトナキヲ以テ結局有効ニ自首ヲ受理シ

得ル相當官吏ハ此二者ニ限レリト謂フ可シ

(第二) 現行犯

現行犯トハ刑事訴訟法第五十六條及第五十七條ニ規定セル場合ヲ云フ而シテ其詳細ハ豫審ノ場合ニ説明スルヲ以テ茲ニハ唯タ公訴提起ノ原因トシテ之ヲ説述スルニ止ム可シ

一、現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタルトキ 現ニ行ヒトハ犯罪行為ヲ爲ス場合ヲ云ヒ行ヒ終リタル際トハ既ニ現場ハ去リタルモ其犯人タルコト明瞭ニシテ之ヲ追跡スル如キ場合ヲ云フ此終リタル際云々ノ字句ニ付キ實際ノ上種々ノ議論アレトモ畢竟犯罪ト犯人トノ連絡アル場合タルコトヲ要スルニ在リ

二、犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、トキ 前項ハ眞ノ現行犯ニシテ本項以下ハ准現行犯ナリ故ニ此場合ハ最モ狹義ニ之ヲ解釋セサル可カラス

三、兇器、贓物其他ノ物件ヲ携帶シ又ハ身體、被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キトキ 本項ニハ兇器云々ヲ携帶シトアルヲ以テ之ヲ狹義ニ解



ス可シ從テ家屋中ニ藏匿シ又ハ道路ニ投棄シタル兇器ノ如キハ本項中ニ包含セサルモノトス

四、家屋内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ請求シタルトキ本項ニ依レハ單ニ戸主ノミ此權ヲ有スルヲ以テ若シ隣家ノ人ヨリ請求シ又ハ一家皆死亡スルトキハ此規定ヲ適用シ得サルノ結果ヲ生ス可シ然レトモ實際上ニ於テハ之ヲ廣義ニ解釋シ一般ニ此規定ヲ適用スト雖モ是レ正當ノ解釋ト云フヲ得サルナリ  
以上四个ノ原因アルトキハ現行犯トシテ法律上特別處分ヲ許セリ然レトモ禁錮以上ノ刑ニ該ル時ト其以下ノ刑ニ該ル時トニ依テ其處分ヲ同ウセス即チ先ツ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アリタルトキハ何人ヲ問ハス直チニ其犯人ヲ逮捕スルコトヲ得刑事訴訟法第六十條)而シテ此場合ニ於テハ司法警察官又ハ假ニ巡查憲兵卒ニ引渡シ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可キモノトス(刑事訴訟法第六十一條)尤モ此場合ニ於テ之ヲ檢事ニ引渡シ得ルヤ否ヤニ付テハ何等ノ明文ナシト雖モ無論之ヲ引渡シテ差支ナシト信ス

司法警察官及巡查憲兵卒カ其職務ヲ行フニ當リテ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ令狀ヲ待タスシテ之ヲ逮捕スルコトヲ得(刑事訴訟法第五十八條第一項)  
罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯ナルトキハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢事、違警罪ニ付テハ即決ヲ爲ス可キ官署ニ告發ス可シ但其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢事若クハ官署ニ引致スルコトヲ得ヘシ(同條第二項)  
巡查憲兵卒カ被告人ヲ逮捕シタルトキハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可キモノトス而シテ其之ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及告發ニ付テノ調書ヲ作テサル可カラス(刑事訴訟法第五十九條)

(第三) 新聞ノ記事又ハ風説其他ノ原因ニ依リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ思料シタルトキ

我刑事訴訟法ハ豫審主義ヲ採リタル結果トシテ苟モ犯罪アレハ進ンテ之ヲ罰スルノ趣旨ナルヲ以テ檢事並ニ其補助官ハ本項ノ如キ場合ニ在リテモ公訴ノ原因



ト爲ルコトヲ流言、浮説又ハ新聞ノ記事等ヨリ認知シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲サ、ル可カラズ

公訴消滅ノ原因

### 第二章 公訴消滅ノ原因

公訴消滅ノ原因アルトキハ起訴ヲ提起スルコトヲ得ス又一度起リタル訴ハ爲メニ消滅スルモノトス以下公訴ノ消滅原因ヲ逐次説述ス可シ

#### (第一) 被告人ノ無能力

刑法第七十八條乃至第八十二條ニ規定セル是非ノ辨別ヲ欠ク者、幼者及瘖啞者ノ如キハ刑法上責任ヲ有セサルヲ以テ訴訟上當事者タル能力ナキモノト云フ可シ元來國家ハ犯罪アルトキハ刑罰權ヲ執行シ以テ其犯人ヲ處罰スルヲ原則トス然レトモ本項ニ列擧シタル者ノ如キハ犯罪事實ハ縱令明カニ存在スルモ智識ノ發達不完全ナルカ爲メ刑罰權ニ制限ヲ加ヘテ之カ執行ヲ爲サシメス既ニ此等ノ者ニ對シテ刑法上刑罰權ヲ制限スル以上ハ訴訟ノ目的物ナキカ故ニ公訴權モ亦共ニ消滅スルハ當然ナリト云ハサル可カラズ

#### (第二) 被告人ノ死亡

公訴ノ目的物タル被告人ニシテ死亡スルトキハ是レ刑ノ目的消滅ニ歸シタルモノナルカ故ニ亦公訴消滅ノ一原因ナリ故ニ被告人カ起訴前死亡シタルニ檢事之ヲ知ラスシテ起訴シタルトキニ於テモ又訴訟中死亡シタルトキニ於テモ共ニ公訴ハ消滅セサルヲ得ス

#### (第三) 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ告訴ノ拋棄

告訴トハ犯罪ヲ爲シタル一定ノ人ヲ罰スルノ請求ヲ云フ如何ナル犯罪ハ告訴ヲ待テ受理ス可キモノナルヤハ刑法上ノ問題ナレトモ今其二三ノ事例ヲ擧ケレハ脅迫罪、誹毀罪、有夫姦罪、畧取誘拐罪、猥褻罪、家畜殺傷罪等ノ如シ即チ刑法ニ親告罪ト稱スルモノ是レナリ抑モ刑事上ノ犯罪アレハ國家ハ其刑罰權ニ依リ進ンテ之ヲ搜索シ犯人ヲ逮捕シ之ニ一定ノ刑罰ヲ科ス可ク敢テ被害者ノ告訴ヲ俟ツコトナキハ刑法上ノ原則ナリ然ラハ法律ハ何カ故ニ前記ノ親告罪ニ於テハ被害者ノ告訴ヲ俟テ後始メテ公訴ヲ提起スルヲ得ルカ如キ一大例外ヲ設ケタルヤ是レ刑法上ノ問題ニ屬シ種々議論ノ存スル所ナルモ今其梗概ヲ述フレハ誹毀罪或ハ脅迫罪ノ如キハ事體極メテ小ニシテ且ツ其危險ノ如キモ殆ント被害者ノ一身ニ局



限スト云フ可キカ故ニ法律上強テ起訴スルノ價值ナキモノトシ又有夫姦罪ノ如キハ夫カ告訴セシテ事ヲ隱密ニ付セント欲スルニ法律自ラ之ニ干渉シテ公訴ヲ提起スルカ如キハ是レ閨門ノ耻辱ヲ社會ニ暴露スルモノニシテ國家カ犯罪者ヲ處罰シテ得タル利益ハ却テ一家ノ被フリタル不名譽ヲ償フニ足ラサルコトアラソ故ニ法律ハ斯ル場合ニ於テハ被害者又ハ本夫ノ告訴ヲ待テ公訴ヲ起スコトヲ爲シタルモノナル可シ余ハ進ンテ此告訴ヲ申立テ得ヘキ人告訴ノ成立及消滅ノ場合ニ付キ聊カ論述スル所アラントス

告訴ハ何人ヨリ之ヲ申立ツルコトヲ得ルヤト云フニ是レ亦刑法ノ規定スル所ニシテ各場合ニ依リ其申立人ヲ同ウセス即チ家畜ヲ殺傷シタル場合ニハ被害者ノミ申立權ヲ有シ(刑法第四百二十三條)誹毀罪ノ場合ニハ被害者又ハ死者ノ親屬申立權ヲ有ス(同第三百六十一條)又有夫姦罪ニ付テハ本夫ニ限リテ此權ヲ有シ(同第三百五十三條)脅迫罪、猥褻罪ニ付テハ被害者又ハ其親屬此申立權ヲ有ス(同第三百二十九條及第三百五十條)被害者トハ本人ハ勿論法律上代理人ヲモ包含シ又親屬ハ刑法第一百四條ノ親屬例ニ依ル可キモノトス

告訴權ハ何時成立スルヤト云フニ此權ハ犯罪ト同時ニ成立ス可シ  
告訴權ハ何時消滅スルヤト云フニ之ヲ使用セサル前ニ消滅スル場合ト使用シタル後消滅スル場合トニ區別セサル可カラス  
告訴權使用前ニ消滅スル場合ハ告訴權ヲ有スル者ノ死去シタルトキ、時効完成シタルトキ及豫メ告訴ヲ拋棄シタルトキ是レナリ抑モ告訴權ハ或特定人ノ專有スル所ニシテ何人ト雖モ之ニ干渉スルコト能ハサルモノナレハ其有權者ニシテ死去スル以上ハ告訴モ亦從テ消滅スルモノト謂ハサル可カラス又公訴ノ時効カ完成スル以上ハ法律上告訴モ亦消滅スルコト論ヲ俟タス  
茲ニ聊カ疑ノ存スルハ告訴權ヲ有スル者一旦告訴ヲ爲シタル後死去シタルトキハ其告訴ハ如何ナル影響ヲ被フルヤノ點是レナリ告訴人ニ於テ一旦告訴ヲ爲シタル以上ハ公訴茲ニ成立スルカ故ニ縱令其告訴人死去スルコトアルモノ之ヲ以テ其權ヲ拋棄シタルモノト看做ス可キニ非ス又既ニ其相當ノ權ヲ行使シタル以上ハ未ダ行使セサル以前ノ如ク告訴權ハ直チニ消滅スルモノニ非サルヲ以テ斯ル場合ニ於ケル告訴人ノ死去ハ公訴ニ何等ノ關係ナキモノトス



告訴權ノ拋棄ヲ豫メ明言シタル場合ニ於テハ再ヒ之ヲ提起スルコトヲ得サルヤ是レ大ニ議論ノ存スル所ナリ余ノ信スル所ニ依レハ夫ノ告訴權者カ告訴ニ付テ默々タル間ハ措テ問ハス既ニ一旦被告人トノ合意ニ因リ告訴ヲ爲サ、ルコトヲ明言シタル以上ハ其後ノ告訴ハ告訴タルノ効ナキモノトス何トナレハ親告罪ニ關スル告訴ハ一ハ公訴ノ條件トナリ一ハ處刑ノ條件トナルヲ以テ告訴ナクンハ公訴起ラス故ニ告訴權者ニシテ既ニ其權利ヲ拋棄シタルトキハ公訴ノ原因玆ニ消滅シテ復タ何等ノ効果ヲ生セサレハナリ

告訴權ヲ使用シタル後告訴ノ消滅スル場合ハ即チ告訴ノ取下是レナリ而シテ一タヒ告訴ヲ爲シタルトキハ其告訴ハ何時マテ之ヲ取下クルコトヲ得ルヤ此點ニ付テハ二説アリ第一説ニ曰ク告訴ハ公訴ノ條件ニシテ處刑ノ條件ニ非ス故ニ一タヒ告訴ヲ爲シタル以上ハ爰ニ公訴起リテ最早之ヲ取下クルコトヲ得スト蓋シ其趣旨トスル所ハ既ニ告訴ヲ爲シ檢事カ公訴ヲ提起シタルトキハ私人ノ手ヲ離レテ全ク公權ノ行動ニ屬シ一己人ノ得テ左右シ得ヘキモノニ非スト云フニ在リ又第二説ニ曰ク告訴ハ一ハ公訴ノ條件ニシテ一ハ處刑ノ條件ナリ從テ訴ノ前後

ヲ問ハス裁判ノ確定スル迄ハ之ヲ取下クルコトヲ得ヘシト余ハ此第二説ニ贊同シ告訴ハ裁判ノ確定スル迄ハ何時ニテモ之ヲ取下クルコトヲ得ト爲スモノナリ請フ試ニ其理由ヲ述ヘン抑モ本議論ノ歸着スル所ハ結局告訴ハ公訴提起ノ原因タルニ止マルヤ將タ判決ノ條件ヲモ包含スルヤノ點ニ在リ今刑法ニ就テ之ヲ見ルニ例ヘハ第三百二十九條ハ脅迫ヲ受ケタル者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論スト規定シ其他ノ親告罪ニ於テモ亦告訴ヲ待テ其罪ヲ論スルモノト爲セリ而シテ罪ヲ論ストハ即チ判決ヲ下ス場合ヲ措テ他ニ其解釋ヲ付ス可キモノナキカ故ニ法律ハ告訴ヲ以テ判決ノ條件ト認メタルヤ明カナリ去レハ親告罪ニ付テハ檢事ノ公訴ト告訴人ノ告訴トハ相互條件ヲ爲スモノニシテ若シ其一方欠缺シタルトキハ判決ヲ下スコトヲ得サルノ主義ヲ採リタルモノト云フ可シ而シテ又告訴ハ取下クルコトヲ得サル場合ナキヲ以テ苟モ判決ノ確定セサル以上ハ自由ニ之ヲ取下クルコトヲ得ヘシト云ハサル可カラス

第一審裁判所カ有罪ノ判決ヲ言渡シタル場合ニ於テ上訴期間内ニ告訴ヲ取下ケタルトキハ如何ナル結果ヲ生スルヤ抑モ裁判ノ言渡アルトキハ其事件裁判所ヨ



リ脱離スルヲ以テ此場合ニ於テハ告訴ノ取下ヲ爲シ得サル可シ是ヲ以テ或ハ告訴ハ判決アルマテ之ヲ取下クルコトヲ得ヘクシテ爾後ハ之ヲ取下クルヲ得スト論スル者アリ此説タル一理ナキニ非スト雖モ是レ何人モ上訴スル者ナキ場合ニ復スルヲ以テ告訴人ハ更ニ上訴裁判所ニ於テ之ヲ取下クルコトヲ得ヘシ要スルニ第一審ノ判決言渡後上訴アリタルトキハ上訴裁判所ニ對シテ告訴ヲ取下クルコトヲ得レトモ若シ上訴アラサルトキハ未ダ判決ノ確定セサルニ拘ハラス上訴期間中ト雖モ之ヲ取下クルコトヲ得スト云ハサル可カラサルナリ

告訴ハ之ヲ別ツコトヲ得ルヤ換言スレハ共犯者ノ一人ニ對シテ告訴アリタルトキハ尙ホ他ノ共犯者ニ對シテモ告訴アリタルモノト看做スコトヲ得ルヤ否今之ヲ外國ノ法律ニ徵スルニ或ハ告訴ハ之ヲ別ツコトヲ得ト規定セルモノアリ然レトモ明文ヲ以テ規定セルモノハ素ヨリ我邦ノ如ク何等ノ明文ヲ設ケサル法律ノ説明トシテ之ヲ引用スルヲ得ス余ハ外國法ノ規定如何ハ措テ問ハス我法律ノ解釋トシテ告訴ハ之ヲ別ツコトヲ得スト論斷スル者ナリ請フ聊カ其理由ヲ述ヘン

抑モ數人共謀シテ犯罪ヲ行フトキハ數人各自ニ刑罰ヲ受ク可キモノナレトモ犯罪其者ハ唯々一個ナルヲ以テ證據ノ蒐集上告訴ノ不可分ヲ以テ可ナリト爲サ、ル可カラス之ニ反シ被害者數人ニシテ犯者一人ナルトキハ被害者ノ告訴ニ對シテハ前ニ述ヘタル不可分ノ原則ヲ適用スルコトヲ得大何トナレハ此場合ニ於テハ各被害者ニ對スル犯罪各別ニ成立スルモノニシテ共犯ニ於ケルカ如ク數人ヲ俟テ一罪ヲ構成ス可キモノニ非サレハナリ故ニ縱令數人ノ被害者中其一人ヨリ告訴アルモ他ノ被害者ニ對シテハ何等ノ効果ヲ及ホスコトナシ之ヲ要スルニ一犯罪ニ對スル犯人數名アル場合ニハ其一人ニ對シテ爲シタル告訴ハ不可分ナレトモ被害者數人ナル場合ニ於テ其一人カ爲ス所ノ告訴ハ可分ナリトス

次ニ同一人ニシテ同時ニ告訴ヲ俟テ受理ス可キ事件ト告訴ヲ要セサル事件トヲ併セテ犯シタルトキハ如何例ヘハ強姦罪ハ告訴ヲ俟テ受理ス可キ犯罪ナルニ強盜カ之ヲ犯シタルトキハ前者ニ付テハ尙ホ告訴ヲ俟テ受理ス可キモノナリヤ余ハ此場合ニ於テハ告訴ヲ俟テ受理ス可キ事件ハ告訴ヲ要セサル事件ニ吸收セラレ、モノト信ス何トナレハ是レニ罪ニ非スシテ全ク二條件ヨリ成レル法律上ノ



一罪タレハナリ試ニ刑法第三百五十一條ヲ見ヨ強姦罪ハ告訴ヲ俟テ受理ス可キモノナルニ拘ハラヌ強姦ニ因テ人ヲ死傷セシメタル者ハ歐打ノ各本條ニ照ラシ重キニ從テ處斷スト規定シ敢テ告訴ヲ要セサルモノト爲スニ非スヤ左レハ斯ル二罪ヲ併犯シタル場合ハ告訴ヲ要スル事件ハ之ヲ要セサル事件ニ吸收セラレ結局告訴ヲ俟タヌシテ公訴ヲ提起シ得ルコト明カナリ

終リニ連續犯繼續犯ノ一部ニ付キ告訴アリタルトキハ他ノ部分ニハ如何ナル影響ヲ及ホスヤ此問題ヲ決スルニハ先ツ此兩者ノ性質ヲ明カニセサル可カラズ抑モ連續犯繼續犯トハ如何ナルモノナリヤト云フニ我刑法ニ於テハ別ニ説明ヲ與ヘス又刑事訴訟法第十條ニ規定スル所ニ依ルモ別ニ其性質ヲ辯明セシテ學者ノ區別ニ一任セリ今學者ノ所說ニ依レハ繼續犯トハ例ヘハ十日間人ヲ監禁スルカ如キヲ云フ此場合ニ於テハ犯罪ハ時々刻々繼續シテ成立スレトモ法律ハ之ヲ一罪トス又連續犯トハ例ヘハ百圓ノ金子ヲ十回ニ竊取スルカ如キヲ云フ此場合ニ於テハ犯罪ハ一回毎ニ成立スルモ同一ノ意思ヲ以テ竊取スルカ故ニ法律ハ十回ノ所爲ヲ以テ一罪トス斯ノ如ク繼續犯若クハ連續犯ハ何年間若クハ何回繼續

スルトモ之ヲ一罪ト看做スモノナレハ其一部ニ付テ告訴アリタルトキハ猶ホ全部ニ對シテ告訴アリタルモノト看做スハ素ヨリ法律上當然ノ結果ナリト云ハサル可カラズ故ニ裁判所ハ進ンテ他ノ告訴ナキ部分ニ付キ裁判スルコトヲ得ヘシ

(第四) 確定判決

公訴カ正當ニ使用セラレテ消滅スルヲ確定判決ト云フ公訴正當ノ使用トハ何ソヤ曰ク犯罪事件ニ付キ當事者ノ一方ヨリ裁判所ニ對シテ請求シ裁判所ハ請求ニ對シテ裁判ヲ與ヘ其裁判確定シタルトキ即チ是レナリ抑モ公訴カ一度正當ニ使用セラレテ消滅スルハ固ヨリ當然ノコトニシテ所謂一事不再理ノ原則ハ茲ニ基因シタルモノナリ蓋シ此原則ノ起源ハ遠ク羅馬法ニ在リ同法ハ曰ク裁判所カ下シタル裁判ニシテ確定ノ制度ヲ認ムルコトナカラシカ裁判ハ何時ニテモ之ヲ反覆スルコトヲ得ヘクシテ終ニ其底止スル所ヲ知ラサルニ至ル可シ果シテ斯ノ如クハ裁判ノ正確何ニ依リテカ之ヲ全クスルヲ得ン裁判所ノ信用何ニ依リテ之ヲ保ツヲ得ン確定裁判ノ制度ヲ認ムルハ實ニ止ムヲ得サルニ出ツト而シテ之ニ反對スルモノハ羅馬法皇ノ法律タル「カノン」法ナリ其理由ニ曰ク今夫レ確定裁判



ノ制ヲ探ランガ其裁判ノ善ナルト惡ナルトニ拘ハラズ悉ク皆確定シテ復タ動か  
 ス可カラサルニ至ル可シ明裁判ナレハ則チ可ナリ然レトモ若シ不當不法ノ誤判  
 ナルトキハ他ニ之ヲ救済スルノ途ナカル可シ是レ豈ニ實體上ノ眞實發見ヲ主義  
 トスル訴訟法ニ於テ採用ス可キ制度ナランヤ唯タ夫レ法律ノ希圖スル所ハ實體  
 上ノ眞實如何ニ在リテ存セリ苟モ裁判ニシテ實體上ノ眞實ヲ得スンハ幾度之ヲ  
 變更スルモ裁判ノ神聖、裁判ノ信用ニ於テ何ノ毀損スル所カ之レアラン一事不再  
 理ノ原則ノ如キハ實ニ架空ノ妄想ニ過キスト要スルニ羅馬法ハ裁判ノ信用上ヨ  
 リ確定判決ノ制ヲ採リ「カノン」法ハ實體上眞實ヲ發見スルノ點ヨリ之ヲ認メサリ  
 キ二者各一理アルニ依リ爾來此二主義ハ互角ノ勢力ヲ以テ斷續シ來リシカ佛國  
 刑事訴訟法ハ此二主義ヲ折衷シテ先ツ確定裁判ヲ原則トシ而シテ或條件ノ下ニ  
 於テ非常上告及再審ノ制ヲ設ケ以テ其調和ヲ計レリ我刑事訴訟法モ亦之ニ模倣  
 シ同法第六條第三ニ於テ確定判決ナル一項ヲ掲ケ其例外トシテ第二百九十二條  
 ニ非常上告ノ制ヲ設ケ第六編ニ再審ノ規定ヲ設クルコトヲ爲セリ  
 確定判決トハ何ンヤ曰ク「闕席判決ニ付テハ故障、對席判決ニ付テハ上訴ヲ以テ攻

撃スルコトヲ得サル判決是レナリ然レトモ判決一タヒ確定ノ程度迄進行セハ最  
 早如何ナル方法ヲ以テスルモ之ヲ攻撃シ得サルモノト解ス可カラス唯タ故障若  
 クハ通常ノ上訴ヲ以テ之ヲ攻撃スルヲ得サルニ止マリ非常上告若クハ再審ノ方  
 法ニ依ルトキハ時ニ之ヲ打破シ得ルコトアリ然レトモ現行法ハ裁判確定後ハ被  
 告人ノ不利益ニ前裁判ヲ變更スルコトヲ許サ、ルカ故ニ確定裁判ハ如何ナル方  
 法ニ依ルモ之ヲ被告人ノ不利益ニ變更スルコトヲ得ス從テ確定裁判ヲ攻撃スル  
 ハ單ニ被告人ノ利益ノミニ限ルモノトス  
 余ハ是レヨリ如何ナル區域ニ於テ裁判確定スルヤ、如何ナル種類ノ裁判確定スル  
 ヤ又如何ナル裁判所ノ判決ハ確定スルヤニ付キ逐次講述ス可シ  
 (一) 裁判ハ如何ナル區域マテ確定スルヤ 判決ハ何レノ點迄確定スルヤニ付テ  
 ハ刑事訴訟法中一モ明文ノ徵ス可キモノナシ民事訴訟法第二百四十四條ニ依  
 レハ「判決ハ其主文ニ包含スルモノニ限り確定力ヲ有ス」トアリ此規定ハ直チニ  
 之ヲ刑事訴訟法ニ適用スルコトヲ得ルヤト云フニ余ハ刑事訴訟法ニ於テハ單  
 ニ主文ノミ確定スルト云フヲ以テ足レリトセス尙ホ其理由モ亦確定スルモノ



ト信ス夫レ裁判所ノ受理スルハ事件其者ニ在リ法律ノ點ニ至リテハ一ニ其見ル所ヲ適用シ毫モ檢事ノ申述ニ羈束セラル、コトナシ例ハ檢事ハ被告ノ所爲ハ竊盜ナリ若クハ殺人ナリトシテ起訴スルコトアルモ其竊盜又ハ殺人ト云フハ法律ノ解釋ニシテ裁判所ハ檢事ノ付シタル罪名ニ羈束セラル、モノニ非サレハ其起訴セラレタル事實全體ニ涉リ果シテ被告ノ所爲ハ罪ト爲ル可キヤ否ヤヲ審案セサル可カラス而シテ其起訴セラレタル所爲ニシテ果シテ有罪ナランカ如何ナル種類ノ犯罪タルヲ問ハス必ス裁判ヲ下サ、ル可カラス故ニ其所爲カ檢事ノ起訴シタル罪名ニ當ラサルヲ口實トシテ其事件ヲ却下ス可キモノニ非ス是レ確定判決ハ被告ニ對シ起訴セラレタル所爲全體ニ涉リテ不再理ノ効力ヲ生スル所以ナリ故ニ檢事ヨリ竊盜ノ事實ヲ起訴シタルニ裁判所ハ之ニ對シテ無罪若クハ免訴ノ言渡ヲ爲シタルトキ檢事ヨリ再ヒ同一ナル事實ヲ詐欺取財トシテ起訴スルモ裁判所ハ確定判決ノ理由ニ因リテ公訴ヲ受理スルコトヲ得ス又秘密出版ノ罪ニ因リテ被告人一タヒ裁判ヲ受ケタル後檢事ヨリ更ニ同一ノ出版物ニ付キ官吏侮辱罪アリトシテ起訴シタル場合ニ於テハ若シ

前裁判コシテ官吏侮辱ノ點ヲモ併セテ審理判定シタルモノトセハ被告ハ確定判決ヲ以テ抗辯スルコトヲ得ルハ勿論ナレトモ之ニ反シ前訴訟ハ單ニ秘密出版ノ所爲ノミヲ受理シタリトセハ更ニ官吏侮辱罪ニ問ハサル可カラス其他繼續犯、連續犯モ皆同一ニ論定スルコトヲ得ヘシ

確定判決ノ効力ノ及フ可キ區域其レ斯ノ如シ今ヤ判決ノ主文ナルモノハ被告人ヲ無罪、免訴トシ若クハ何々ノ刑ニ處ストノ明言ノミニ止マリ其如何ナル事實アリヤ即チ被告人ハ如何ナル所爲ヲ行ヒタリヤノ點ニ至テハ判決理由ノ説明スル所ニシテ主文ニ依テ窺知シ得ヘキモノニ非ス然ルニ若シ判決主文ノミ確定シテ其理由ハ確定セスト爲ストキハ法律カ確定判決ノ制ヲ設クルモ何等ノ効用ナキニ至ル可シ是レ豈ニ法律ノ精神ナランヤ余カ此場合ニ於テ民事訴訟法ノ規定ヲ適用ス可カラスト唱フル所以即チ爰ニ在リ然ラハ判決ハ主文及理由ノ全部確定ス可キモノナルヤト云フニ又一概ニ論述スルコト能ハス何トナレハ判決ノ理由中ニハ被告人ノ所爲ハ勿論裁判官ノ意見ヲモ包含スルヲ以テ若シ理由ノ全部確定スルモノトセハ裁判官ノ意見モ尙ホ確定スルモノト云



ハサル可カラスト雖モ裁判官ノ意見ハ確定ノ効チ有ス可カラサルハ多言チ俟  
タスシテ明カナレハナリ論シテ茲ニ至レハ判決ノ確定スル範圍ハ管ニ主文ノ  
ミナラス其主文ヲ抽出スル事實ノ全部ニ渉ルモノト云ハサル可カラス

(二) 如何ナル種類ノ裁判カ確定スルヤ 裁判ニハ決定命令及判決ノ三種アリ刑  
事訴訟法第六條ハ單ニ判決ニ付テノミ確定判決ノ效果ヲ規定シ決定命令ニハ  
其効力チ及ホスコトナシ然レトモ豫審終結ノ決定ニ付テハ判決ト同一ノ主義  
ヲ採レリ

(三) 如何ナル裁判所ノ判決カ確定スルヤ 即チ判決確定ノ効力ハ單ニ内國裁判  
所ノ判決ノミナラス外國裁判所ノ判決又ハ特別裁判所ノ判決ニモ及フモノナ  
ルヤ否ノ問題ナリ

外國裁判所カ下シタル裁判ハ内國ニ於テ確定ノ効力アリヤ否ヤ例ヘハ内國人  
外國ニ在リテ罪ヲ犯シテ裁判ヲ受ケ其裁判一タヒ確定シタルトキハ内國ニ於  
テ再ヒ同一事件ニ付キ公訴ヲ受クルコトアラサルヤト云フニ今佛蘭西刑事訴  
訟法ニ依レハ外國裁判所ノ裁判シタル犯罪ハ内國ニ於テ再ヒ之ヲ罰セストノ

明文アルヲ以テ外國裁判所ノ判決ハ内國ニ於テ確定力チ有ス可シ何トナレハ  
内國ニ於テ斯ル明文アルニ拘ハラス尙ホ外國ノ犯罪ヲ罰スルトキハ一事不再  
理ノ原則ニ違背スレハナリ翻テ本邦ノ法律ニ於テハ此等明文ノ存スルヲ見ス  
既ニ明文ナキ以上ハ法律ハ其國境内ニ行ハル可キコト一般ノ原則ナルヲ以テ  
苟モ相互ニ獨立國ナル以上ハ他國ノ裁判ヲ認ムルノ義務ナシ若シ又一事不再  
理ノ原則ニシテ萬國共通ノモノナランカ外國裁判ニ對シテハ再ヒ内國ニ於テ  
之ヲ裁判スルヲ得サレトモ既ニ一獨立國ハ他國ノ裁判ヲ認ムルノ義務ナキ以  
上ハ此原則モ亦内國法律ノ範圍内ニ於テノミ行ハル可キモノナレハ他ニ特別  
ナル法律ノ明文又ハ條約アレハ格別然ラサル以上ハ外國裁判所ノ裁判ハ本邦  
ニ於テ確定ノ効力ナク唯タ内國裁判所ノ裁判ニ限リ内國ニ於テ確定ノ効力チ  
有スルモノト爲スヲ以テ穩當ナリト信ス

次ニ裁判所ニハ通常及特別ノ區別アルニ拘ハラス相通シテ確定判決ノ効力チ  
有スルヤ否ヤ茲ニ所謂通常裁判所トハ大審院、控訴院、地方裁判所及區裁判所ヲ  
指シ特別裁判所トハ領事裁判所、軍事裁判所及伊豆、小笠原島ノ島司裁判ヲ謂フ



此等ノ裁判所ハ皆内國ノ裁判所ナルカ故ニ斯ル區別アルニ關セス其裁判ハ孰レモ内國ニ於テ確定判決ノ効力アリト云ハサル可カラス何トナレハ此等ノ裁判所ハ皆我刑法ヲ適用スルモノナルカ故ニ一事不再理ノ原則ハ共ニ適用セラレサル可カラサルハ當然ナレハナリ故ニ軍人ノ普通ノ犯罪ニ付キ軍事裁判所ニ於テ裁判一タヒ確定シタルトキハ通常裁判所ハ再ヒ之ヲ裁判スルヲ得ス又領事裁判所ノ裁判一タヒ確定シタルトキハ内地ノ裁判所ニ於テ再ヒ起訴スルコトヲ得サルナリ

上來余ハ裁判確定ノ區域如何及如何ナル裁判カ確定ス可キヤ又如何ナル裁判所ノ裁判カ確定ス可キヤニ付テ講了セリ此確定ノ効力ハ唯々同一ノ人同一ノ事實ニ付キテ存立スルノミニシテ人ヲ異ニシ事實ヲ異ニスレハ確定判決ノ効ナキコト論テ俟タサル所ナリ然レトモ此原則ニ對シテハ二三ノ例外アリテ存ス抑モ同一人ニ對シ同一事件ニ付キ再理スルヲ得スト爲スハ凡ソ一度一事件ヲ調査セル以上ハ最早再ヒ之ヲ調査スルノ餘地ナキカ故ナルヲ以テ未タ其事件ノ本體ニ付キ調査ヲ爲サ、ルトキハ縱合判決存在スルモ更ニ本體ニ付テ裁判シ得ルコト當

然ナリ是レ例外ノ由テ生スル所以ナリ余ヲ以テ之ヲ見レハ此例外トナル可キ場合凡ソ二個アリ以下逐次之ヲ説述ス可シ

(イ) 管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルコトヲ言渡シタル場合 此場合ニ於テモ被告人事實并ニ裁判所ノ三者カ同一ナルトキハ判決確定ノ効ヲ生スルコト勿論ナレトモ若シ其三者ノ一ニシテ變動アルトキハ再ヒ之ヲ審理スルモ一事再理ニ非サルナリ例ハ東京地方裁判所ニ於テ被告人ニ對シ管轄違ノ言渡ヲ爲シタルトキハ從來ノ儘ニテハ同裁判所ニ於テ再ヒ審理スルコトヲ得サルモ其他ノ裁判所例ハ横濱地方裁判所ニ於テ之ヲ審理スルニハ何等ノ差支アルコトナシ又東京地方裁判所ニ於テ判決ス可キ新證據ヲ備フルトキハ同裁判所ニテ再ヒ裁判スルモ差支アラサルナリ

(ロ) 告訴ヲ俟テ受理ス可キ事件ニ付キ告訴ナシトノ理由ニ依リ免訴シタル場合はレ亦告訴ヲ俟タスシテ再ヒ起訴セントスルトキハ確定判決ノ効アレトモ更ニ被害者ノ告訴ヲ得タル後ニ起訴スルトキハ前判決ハ確定ノ効アルコトナシ



以上二個ノ場合ニ於テハ確定判決ノ効力ニ付キ制限アルハ明瞭ナル可シ要スルニ確定判決ハ其事實ノ全體ヲ審理シテ有罪無罪若クハ免訴ヲ言渡シタルトキニ於テ其効力ヲ生スルモノト云ハサル可カラス然ルニ(イ)ノ場合ノ如ク管轄ノ點ニ於テ公訴ヲ却下シ又(ロ)ノ場合ノ如ク告訴ナシトシ公訴ヲ却下スルトキノ如キハ單ニ其一事件ノ外部ニ付テ審理シタルニ止マリ未ダ其實體ニ入りテ審理スルヲ得サルモノナレハ事實ノ全部ヲ審理シ得タリト云フ可カラス從テ更ニ條件ヲ變更シ公訴ヲ提起スルトキハ所謂一事再理ニ非サルヤ素ヨリ明カナリ然レトモ訴訟ノ條件ニシテ前後同一ナルトキハ結局同一ノ結果ヲ生スルニ止マルカ故ニ斯ル場合ニ於テハ其一事再理タルヲ免レサルコト論ヲ俟タス

判決ニシテ一タヒ確定ノ効力ヲ生シタルトキハ最早再ヒ之ヲ覆ヘスコトヲ得ス例ヘハ重ク罰ス可キニ輕ク罰シタルカ如キコトアルモ又ハ物品ヲ沒收ス可キニ之ヲ遺忘シテ沒收セカリシカ如キコトアルモ裁判所ハ再ヒ之ヲ變更スルコトヲ得サルナリ但シ再審及非常上告ニ付テハ例外トス尙ホ此二者ニ關シテハ後日詳論スル所アル可シ

(第五) 犯罪後發布シタル法律ニ因リ刑ノ廢止

此場合ハ舊法律ニ於テ罪ト爲シタルモノヲ新法律ヲ以テ廢止セル場合ヲ云フ例ヘハ改定律令ニ於テハ人ヲ咒咀セル者ハ謀殺ヲ以テ之ヲ論シタレトモ現行法ニ於テハ之ヲ罰スルノ明文ナキヲ以テ縱令今日ニ至リ咒咀ノ事實發覺スルコトアルモ其人ニ對シ犯罪者トシテ公訴ヲ提起スルコトヲ得ス

(第六) 大赦

大赦ハ犯罪訴追ノ權及ヒ裁判執行權ノ拋棄ニシテ此制ヲ設ケタルハ現行法律ノ適用ト社會ノ情態トノ適合セサル場合ニ於テ其調和ヲ計ラントスルニ在リ換言スレハ大赦ハ法律ノ酷ニ失スル恐レアル場合ニ於テ之ヲ圓滑ナラシメントスル理由ヨリ出テタル制度ナリ論者或ハ說ヲ爲シテ曰ク大赦ハ犯罪事實ヲ消滅スルモノナリト是レ恐ラクハ泰西ニ於テ大赦ヲ Amnestiee ト呼ビ「アムネスチー」ハ其語原ヲ希臘ニ發シ遺忘ノ意義ヲ含ミタルヨリ來レル說ナラン此說タル頗ル疑フ可キモノアリ何トナレハ大赦アルモ其犯罪事實ハ依然トシテ存在ス可ク又社會カ其事實ヲ遺忘ストハ到底想像シ得ヘカラサルコトナレハナリ故ニ大赦ハ國家カ



犯罪訴追權ヲ拋棄スルニ因リテ公訴ヲ消滅セシムルモノト爲スヲ以テ最モ穩當ナリト信ス此大赦權ハ本邦ニ於テハ天皇陛下ノ握有セラル、所ナリ(帝國憲法第十六條)斯ノ如ク大赦ハ天皇陛下ノ特權ニ屬スルカ故ニ如何ナル犯罪ニ付キ大赦アリタルカ又大赦ノ範圍如何ニ付テハ其時々ノ勅令ニ依テサル可カラズ或ハ大赦ハ總テノ犯罪ニ付キ之ヲ爲スコトヲ得ルニ非ズ單ニ政事犯ニ限ラサル可カラスト云フ者アレトモ此說非ナリ何トナレハ斯ノ如キハ憲法上天皇陛下ノ有セラ、特權ヲ制限スルノ効力ヲ生スレハナリ又或ハ大赦ハ法律ノ執行ヲ中止スルモノナルカ故ニ之ヲ行フニハ勅令ヲ以テセシテ宜シク法律ヲ以テシ立法議會ノ協賛ヲ經ルコトヲ要スト論スル者アリ然レトモ是レ主權者カ此權ヲ濫用スルヲ恐レテ斯ノ如キ制限ヲ加ヘタル歐洲諸國ノ制度ニ基キ立論シタルモノニシテ我國ノ如キ憲法ノ下ニ於テハ到底採用ス可カラサルノ議論ト云ハサルヲ得ス

(第七) 時効

公訴權ニハ使用シテ消滅スルモノト使用セズシテ消滅スルモノトアリ而シテ其使用ニ因テ消滅スル場合ハ前ニ述ヘタル確定判決ニシテ之ヲ使用セサルカ爲メ

ニ消滅スル場合ハ茲ニ所謂時効ナリトス法律ハ何カ故ニ時効ノ制ヲ設ケタルヤト釋スルニ學說區々ニシテ未ダ歸一スル所ナシ以下各說ニ付キ其當否ヲ論評セ

ノトス第一說ニ曰ク時効ハ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ設ケタルモノナリト此說ハ被告人ヲ處罰スルノ主義ト全ク相反スルモノニシテ之ヲ是認スルヲ得ズ第二說ニ曰ク被告人ハ實際刑ニ處セラル、コトナキモ其遁逃隱匿ノ時間中大ニ心神ニ苦痛ヲ感シ宛モ刑ヲ受ケタルト同一ノ効果ヲ有スルヲ以テ之ヲ設ケタルモノナリト此說モ亦之ヲ採用スルニ足ラス何トナレハ實際上ニ於テハ刑ノ執行ヲ受ケタルト同一ノ苦痛ヲ覺ヘス却テ尙ホ罪惡ヲ重スル者アル可ク又現今ノ學說及統計ニ依ルモ到底改良セサルノ犯罪人居多ナレハナリ第三說ニ曰ク社會ハ時日ノ經過ニ因リテ犯罪ヲ遺忘セリ既ニ犯罪ヲ遺忘シタル後尙ホ之ヲ罰スルハ社會ノ人心ヲシテ法律ノ苛酷ニ過クルノ感ヲ發セシム可ク實ニ害アリテ益ナキカ故ニ則チ時効ノ制ヲ設ケテ其弊ヲ防キタルナリト此說モ亦信ヲ置クニ足ラサル可シ凡ソ處罰ノ權ト義務ト有スル者ハ個人ノ集合シタルモノニ非ズシテ無形人ナ

ルカ故ニ決シテ犯罪ヲ遺忘スルノ理由ナシ夫ノ俗諺ニ犯罪人ノ逃走ヲ説キテ熱



焰ヲ冷マヌト云フコトアリ蓋シ犯罪ニ因リ地方人心ノ熱シタルモノ、冷却スルヲ待ツノ意ナリ是レ遺忘説ノ由テ起リタル所ナル可シ然レトモ今日ノ文明社會ニ於テ刑罰權ハ堂々國家ノ握有ニ歸スルノ主義ヲ採ル以上ハ此等ノ議論ハ之ヲ採用スルヲ得ス又此議論ハ刑法ノ時効ニ適スレトモ訴訟法上ノ時効ニ適セス又第四説ニ曰ク被告人ニ對スル利益不利益ノ證據ハ共ニ時日ノ經過ニ因リテ消滅ニ歸スルハ自然ノ結果ナリ既ニ證據湮滅ノ後尙ホ其犯罪ヲ罰セントスルモ正當ニ目的ヲ達スルコトヲ得ス尤モ犯罪ニ關スル證據ハ時日ノ經過ニ因リテ必スシモ常ニ湮滅スト云フ可カラス時日ノ經過ニ因リ時トシテハ被告人ノ利益不利益ノ證據共ニ消滅スルコトアリ又時トシテハ然ラサルコトアリ然レトモ立法者ハ此二个ノ場合ヲ熟考シ證據ノ湮滅セル場合ニハ裁判ヲ爲シ得サルヲ以テ則チ時効ノ制度ヲ設ケタルモノナリト此説ハ稍々時効ノ精神ト適合スルニ似タリ斯ノ如ク其理由ノ一定セサルニ拘ハラズ諸國ノ法律ハ概シ時効ノ制ヲ採用シ本邦ニ於テモ亦之ニ模倣シテ刑事訴訟法第八條ノ法規ヲ設定セリ曰ク「公訴ノ時効ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ成就ス第一、違警罪ハ六個月第二、輕罪ハ三年第三、重罪ハ

十年」ト即チ斯法ハ罪質ノ輕重ニ依リテ三種ノ時効期間ヲ定メタリト雖モ此期間ハ如何ニシテ之ヲ起算ス可キヤ是レ最モ研究ス可キ事項ニ屬ス余ハ先ツ時効ノ起算點ヨリ講述センニ刑事訴訟法第十條ハ規定シテ曰ク「公訴私訴ノ時効ハ犯罪ノ日ヨリ其期間ヲ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス」ト故ニ如何ナル犯罪ニ付テモ其成立ノ日ヨリ時効ヲ起算セサル可カラス然レトモ所謂犯罪成立ハ如何ナル日ニ在リヤノ點ハ過失犯若クハ不作爲ノ犯罪ニ付キ之ヲ定ムルコト頗ル困難ナラサルヲ得ス例ヘハ甲者カ乙者ノ水練ニ長セサルヲ知リ之ヲ溺死セシメント謀リテ誘ツテ深淵ニ陷レ其救助ヲ爲サスシテ遂ニ死ニ致シタルトキハ犯罪成立ノ日ハ何レニ在リヤ又例ヘハ甲者誤テ燭火ヲ庫中ニ放置シ遂ニ次日ニ至リテ其倉庫ヲ燒失セシメタルトキハ何レノ日ヲ以テ犯罪成立シタリト爲ス可キヤ人或ハ言ハシ第一ノ場合ニ在リテハ甲者カ乙者ヲ誘テ深淵ニ至ラシメタルトキヨリ起算シ第二ノ場合ニ在リテハ前日ノ燭火ヲ放置シタルトキヨリ起算ス可シト然レトモ是レ誤認ノ甚シキモノト云ハサルヲ得ス斯ル場合ニ於テハ犯罪ノ端緒ハ被害者ヲ深淵ニ誘ヘタルトキ又ハ燭火ヲ放置シタルトキニ在ルモ



犯罪ノ成立ハ第一ノ場合ニ於テハ乙者ヲ溺死セシメタルトキニシテ第二ノ場合ニ於テハ倉庫ヲ焼失セシメタルトキニ在リト云フ可シ故ニ前例ニ於テハ溺死ノ結果後例ニ在テハ焼失ノ結果ヲ生シタル日ヨリ之ヲ起算セサル可カラズ又殴打致死ノ場合即チ甲者カ乙者ヲ殴打シ乙者爲メニ十日後若クハ二十日後ニ至リテ死亡シタルトキハ甲者ノ殴打致死罪ハ殴打ノトキヨリ其時効ヲ起算ス可キヤ將ク致死ノトキヨリ其時効ヲ起算ス可キヤト云フニ這般ノ犯罪ニ付テハ結果ヲ以テ其罪ヲ論シ縱令殴打ノ後十日若クハ二十日ヲ經テ死亡スルモ其事件判決前ニ在ルトキハ尙ホ之ヲ殴打致死罪ト爲スヲ以テ或ハ其死去シタルトキ犯罪成立シ此時ヨリ時効ヲ起算ス可キモノ、如シ然レトモ余ハ致死ヲ以テ一ノ結果ト看做シ犯罪ノ成立ハ殴打ノトキニ在ルモノトスルヲ正當ト爲スカ故ニ此場合ニ於テハ殴打ノ日ヨリ時効ヲ起算スルヲ以テ穩當ナリトス

次ニ前題第十條ノ末段ニハ但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算スト規定シタルヲ以テ或ハ通常犯罪ノ例外ナルカ如キノ觀ナキニ非スト雖モ決シテ然ラズ蓋シ斯ル犯罪ニ至リテハ或ハ數年ノ久シキニ亘ルモノナキニ非サレハ其最初ノ

時ヨリ起算スルトキハ時効ニ罹ルコトアル可シト雖モ這般ノ犯罪タル前後ヲ通シテ一罪ト看做ス可キモノニシテ犯罪成立ノ日ハ結局其最終ノ日ニ在ルカ故ニ則チ其最終ノ日ヨリ時効ヲ起算スト爲シタルモノニシテ素ヨリ當然ノコトニ屬シ敢テ特別ノ規定ニ非サルナリ又法文ニハ單ニ繼續犯トアリテ繼續犯ノ何タルヤヲ規定セス而シテ學者ノ所說ニ依レハ數所爲ヲ併セテ一罪ト爲ス場合ヲ繼續犯、連續犯、集合犯等ニ區別セリト雖モ此等ノ犯罪ハ皆法文ノ所謂繼續犯中ニ包含スト云フモ不當ニ非サル可シ

從犯及教唆罪ハ何レノ日ヨリ時効ヲ起算スルヤ我刑法總則ヲ見ルニ此等ノ所爲ハ獨立ノ犯罪ニ非スシテ全ク正犯ニ附從スルモノナリ從テ從犯及教唆罪ニ付テハ正犯成立ノ日ヨリ其時効ヲ起算ス可キモノトス

時効ノ起算點ハ以上説明スル所ノ如シ此起算點ヨリ起算シテ重罪ニ付テハ十年輕罪ニ付テハ三年、違警罪ニ付テハ六個月ヲ經過スルモ公訴起ラサルトキハ其犯罪事實ハ茲ニ時効完成シテ公訴消滅ス可シ然レトモ時効ハ必スシモ常ニ澁滯ナク經過スルモノニ非ス場合ニ依リテ中斷ヲ受クルコトアリ若シ一タヒ時効ヲ中



斷シタルトキハ爾後時効ハ新タニ開始スルモノニシテ從來既ニ經過シタル時効ハ全ク無効トナルカ故ニ斯ル場合ニ於テハ其中斷ノ手續ヲ爲シタル日ヨリ更ニ時効ノ進行ヲ開始ス可シ而シテ時効ノ中斷ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ以テ之ヲ行フモノトス(刑事訴訟法第十一條)然レトモ此等ノ手續ハ適法ナルコトヲ要スルカ故ニ若シ其手續ニシテ不法ナルトキハ全ク中斷ノ効ナシ但裁判所ノ管轄違ナルニ因リ其手續無効ト爲ル場合ハ此限ニ在ラス(同第十二條)時効中斷ノ權ヲ有スル者ハ檢事豫審判事又ハ裁判所ニシテ其他ノ者ハ之ヲ有スルコトナシ

時効カ一タヒ有効ニ中斷セラレタルトキハ其未タ發覺セサル正犯從犯及民事擔當人ニ對シテモ亦其効力ヲ生ス可シ故ニ此場合ニ於テハ法律ハ人ニ對シテ時効ヲ中斷スルモノニ非スシテ事件ニ對シテ中斷スルモノト云ハサル可カラス而シテ茲ニ聊カ問題ヲ生スルハ彼ノ人違ノ犯人ニ對シテ起訴シタルトキノ如キハ時効中斷ノ効力アルヤ否ヤノ點是レナリ余ヲ以テ見レハ此場合ニ於テハ事件ニ對シテ中斷スルノ主義ニ依リ縱令檢事カ人違ノ犯人ニ對シテ起訴スルモ是レ實體上ノ關係ニ依リ犯罪事件ト認メタルモノナレハ刑事訴訟法第十二條ノ規定ニ於

ケル無効ノ手續ト云フ可キニ非ス故ニ訴訟法上ニ於テハ犯罪ノ主體ハ人違ナルモ時効ハ有効ニ中斷セラル、モノト云ハサル可カラズ

時効ノ問題ニ最モ大ナル關係ヲ有スル重罪、輕罪及違警罪ノ區別ニ付テハ二說アリ其第一ハ犯罪ノ種類區別ハ刑法第九十九條ニ依リ本刑ヲ定メ其刑輕罪ニ該當スルモノナレハ輕罪、重罪ニ該當スルモノナレハ重罪ト爲ス可シト論スル者ナリ本刑ノ解釋ハ不當ニ非サレトモ之ヲ以テ直チニ犯罪種類ノ區別ノ基本トスルハ不當ナリ何トナレハ此條項ハ唯刑ノ加減ノ爲メニ其標準ヲ規定シタルニ過キサレハナリ次ニ第二ハ刑法第七條第八條第九條ノ規定シタル刑ヲ以テ總テノ犯罪種類ノ區別ト爲ス可シト論スル者ナリ此說ハ重罪ノ刑ヲ減等シテ輕罪ノ刑トスルモ其罪素ト重罪ナレハ重罪ニ處セラレタルモノト爲スニ在リ余ハ此說ニ左袒セントス

### 第三章 公訴ノ意義

公訴ハ一定ノ人ニ對シテ一定ノ犯罪事實ニ付キ裁判所ノ判決ヲ求ムル爲メ權利者ヨリ裁判所ニ爲ス所ノ申立ナリ抑モ訴訟ノ目的ハ結局裁判所ノ判決ヲ得ルニ

公訴ノ意

刑事訴訟法 公訴ノ意義



在リ詳言スレハ訴訟ニシテ一タヒ提起セラル、トキハ當事者ハ各其欲スル所ヲ請求シ其請求ノ満足ヲ得ルカ爲メ證明ノ方法ヲ備フル等一トシテ其請求ノ點ニ付キ裁判所ノ判決ヲ得ントスルニ非サルハナシ由是觀之訴訟物ハ常ニ判決ノ目的ト同一ニシテ又訴訟物ハ請求ノ點ト同一ナラサル可カラサルナリ

判決ハ一定ノ犯罪事實ニ付キ一定ノ人ニ對シテ有罪無罪ヲ發表シタル裁判所ノ意見ナレハ判決ノ由テ生スル訴訟物ニハ一定ノ人及一定ノ犯罪事實アルコトヲ要スルハ自明ノ理ト云フ可シ然ルニ訴訟物ハ特別ノ場合ノ外訴ニ依テ其範圍定マルカ故ニ訴ヲ提起スル權利者ノ請求中ニハ必ス一定ノ事實及一定ノ人ナキヲ得ス若シ其一ヲ欠クトキハ判決トシテ効力ナキカ如ク請求トシテモ亦無効ナリト云ハサル可カラス故ニ公訴ニハ一定ノ事實ト一定ノ人トヲ包含スルヲ要ス公訴ニ一定ノ犯罪事實アルコトヲ要スルハ何人モ首肯シテ毫モ疑ヲ挾ムモノナシ然レトモ一定ノ人ヲ要スルヤ否ニ付テハ從來學者間ニ議論ノ存スル所ナリ反對論者ハ曰ク凡ソ裁判所ハ犯罪ノ事實ニ付キ訴ヲ受クルモノナリ故ニ一定ノ人ニ付テハ裁判所其事實ヲ審案シテ之ヲ確定ス可ク敢テ檢事ノ起訴ヲ待ツ可キモノ

ニ非スト然レトモ第一ニ一定ノ事實ト一定ノ人トハ判決ニ必要ナル原素ナリ然ルニ之カ基本タル訴ニ於テハ何故ニ其一ヲ擧グルコトヲ要セサル乎第二ニ反對論ハ治罪法ノ如ク事件ニ付キ訴ヲ受クルノ主義ヲ採ル法律ノ解釋トシテハ素ヨリ適當ナル可キモ現行刑事訴訟法ノ如ク全然其主義ヲ變更シ裁判所ハ特別ノ場合ノ外檢事ノ請求ナクシテ裁判ヲ爲ス可カラストスル主義ノ法律(刑事訴訟法第六十七條、第八十四條)ノ下ニ於テハ到底謬説タルヲ免レス

斯ノ如ク公訴ニハ必ス一定ノ人ヲ要スト雖モ此原則ニ對シテハ一ノ例外アリテ存ス即チ時効中斷ノ場合はレナリ刑事訴訟法第十一條第一項ニ依レハ未ダ發覺セサル正犯、從犯ニ付テハ既ニ發覺シタルトキト同一ノ手續ヲ以テ時効ノ經過ヲ中斷スルコト、爲セリ從テ此場合ニ限リ例外タル可キモノトス

公訴トハ一定ノ人ニ對シテ一定ノ犯罪事實ニ付キ裁判所ノ判決ヲ求ムル爲メ權利者ヨリ裁判所ニ爲ス所ノ申立ナルヲ以テ公訴狀ニ記載ス可キモノハ凡ソ左ノ如クナラサル可カラス

一、原告人、被告人及裁判所ノ表示



- 二、 證明セラル可キ事實
- 三、 原告人ノ法律上ノ請求

以上ノ三者ハ公訴狀ニ掲載ス可キ事項アリ然レトモ第三即チ原告ノ法律上ノ請求ハ必スシモ之ヲ掲クルノ要アルニ非ス是レ刑事ト民事ト異ナル所ナリ蓋シ民事ニ於テハ不干涉主義ヲ採ルヲ以テ裁判所ハ自ラ進ンテ當事者ノ請求以外ニ干渉スルコトナシ故ニ當事者ハ豫メ其請求事項ヲ訴狀ニ掲載スルノ必要アリ然レトモ刑事ニ於テハ裁判所ハ事實ノ點ニ付キテ檢事ノ提出スル所ニ束縛セラルト雖モ其法律適用ノ點ニ至リテハ一ニ裁判官ノ自由ニ存シ決シテ檢事ノ請求セル範圍内ニ制限セラル可キモノニ非ス例ヘハ檢事ハ一定ノ事實ヲ捉ヘ來リテ竊盜罪ノ刑罰ノ言渡ヲ請求スルモ裁判所ニ於テ其事實ヲ審理シ結局強盜若クハ詐欺取財ト認ムルトキハ直チニ自己ノ信スル判決ヲ言渡スコトヲ得ルカ如シ故ニ第三ノ事項ハ必スシモ之ヲ掲載スルノ要アラサルナリ

#### 第四章 公訴提起ノ方式

公訴ハ裁判所ニ對シ判決ヲ請求スルモノニシテ檢事之ヲ提起スルモノナルコト

公訴提起ノ方式

ハ前ニ講述セルカ如シ而シテ其提起ノ方式ニ付テハ刑事訴訟法中何等ノ規定スル所ナシ故ニ口頭ヲ以テスルモ又書面ヲ以テスルモ適法ニ之ヲ提起スルコトヲ得ルモノナリ然レトモ現行ノ慣例ニ依レハ公廷外ニ於テ提起スルトキハ一般ニ書面ヲ用フルコト、セリ

公訴ノ提起ト法廷ニ於ケル檢事ノ論告トハ之ヲ混同ス可カラス抑モ檢事ハ公訴ヲ提起シタル以上ハ當事者ト爲ルヲ以テ論告ハ畢竟當事者ノ權利トシテ之ヲ行フモノナリ之ニ反シ起訴ハ國家ノ代表者タル機關トシテ之ヲ行ヒ且ツ判決ノ基本ト爲ルモノニシテ之ニ因リ當事者タルノ權利及義務ヲ有スルニ至ルモノナレハ公訴ノ提起ハ書面ヲ以テスルヲ穩當ト爲サ、ル可カラス

公訴ノ提起ニ二アリ一チ公判ト云ヒ一チ豫審ト云フ我刑事訴訟法ハ公判ニ於ケルモノヲ起訴ト名ケ豫審ニ於ケルモノヲ請求ト稱シ二者其文字ヲ同ウセスト雖モ何レモ公訴ノ提起ニ非サルハナシ

#### 第五章 公認提起ノ効力

檢事カ適法ノ方式ヲ備ヘテ公訴ヲ提起スルトキハ左ノ効力ヲ生ス可シ

公訴提起ノ効力

刑事訴訟法 公訴 公訴提起ノ効力



第一、裁判所并ニ當事者間ニ於テ權利義務ノ關係ヲ生ス  
 公訴一タヒ起リタルトキハ其事件ハ裁判所ニ繫屬シ從テ裁判所ハ其起訴ニ付キ  
 事實并ニ法律ノ點ヲ審査シテ裁判ヲ下スノ義務ヲ生ス而シテ申立人ノ正否犯罪  
 事實ノ有無一定ノ人ノ存否及自己ノ管轄ニ屬スルヤ否ニ付キ之カ取調ヲ爲シ若  
 シ其一ニシテ欠缺セルコトヲ發見スルトキハ公訴不成立若クハ管轄違トシテ其  
 公訴ヲ却下セサル可カラス而シテ此等ノ要件具備スルトキハ茲ニ始メテ本案ニ  
 入り其審理ヲ始ム可キ義務ヲ發生ス可シ

第二、一事不再理ノ效果ヲ生ス

公訴カ裁判所ニ繫屬スルトキハ權利拘束ノ效果ヲ生ス可ク從テ同一事件ニ付テ  
 ハ再ヒ之ヲ受理セス是レ確定判決アリシ後ハ同一事件ニ付キ再ヒ訴ヲ起スコト  
 ナ得サルノ原則ト同一ノ理由ニ基クモノニシテ畢竟夫ノ羅馬法以來各國法律ノ  
 採用セル一事不再理ノ大原則ノ適用ニ外ナラス即チ同一事件カ同時ニ二个ノ裁  
 判所ニ起リタルトキニ於テハ二个ノ公訴存立シ得ヘカラサルヲ以テ其一方ノ公  
 訴ハ之ヲ却下ス可キモノトス民事訴訟法ニ依レハ斯ノ如キ場合ハ明カニ權利拘

束ノ抗辯ヲ認メテ被告ニ其權利ヲ附與シタリ然ルニ刑事訴訟法ニ於テハ特ニ明  
 文ヲ以テ當事者ニ斯ル權利アルコトヲ認メサレトモ立法ノ精神ヲ討索スルニ同  
 一事件カ同時ニ二个以上ノ裁判所ニ起リタルトキハ素ヨリ此效果ヲ生ス可キモ  
 ノナラント信ス

第三、公訴ヲ取下ルコトヲ得サルノ效果ヲ生ス

公訴一タヒ提起セラレタル以上ハ最早檢事ト雖モ之ヲ取下ルコトヲ得サルノ  
 効果ヲ生ス可シ而シテ何故ニ之ヲ取下ルコトヲ得サルヤノ理由ニ至リテハ學  
 者間種々ノ異論アリ普通ニ之ヲ解スル者ハ本法第一條ヲ引用シ來リテ曰ク抑モ  
 犯罪ヲ罰セントスル公訴權ハ國家ニ屬シ檢事ニ存セス故ニ本法第一條ニ於テモ  
 檢事之ヲ行フトアリテ檢事之ヲ有スト規定スルコトナシ既ニ公訴權ハ國家ニ屬  
 シ而シテ檢事ハ唯々其機關トシテ之ヲ行フニ止マル以上ハ自己ノ任意ヲ以テ之  
 ナ左右スルコトヲ得サルハ素ヨリ其所ナリ是レ公訴ヲ取下ルコトヲ得サル所以  
 ナリト惟フニ我草案者ノ説モ亦斯ノ如クナル可シ然レトモ法律ノ解釋ハ必スシ  
 モ草案者ノ意思ノミヲ尋ヌ可キモノニ非ス草案者ノ夢想ヲモセサル法律ノ眞意



ヲ推敲シ來ルハ當然解釋家ノ權内ニ在リ檢事ハ起訴ノ機關トシテ職務ヲ行フニ  
 方リ毫釐ヲモ其意見ヲ挾ムコトヲ得サル乎豈ニ斯ノ如キ理アラシヤ若シ論者ノ  
 說ヲ貫徹セシメント欲セハ檢事ハ起訴前ニ在リテモ亦犯罪アリト爲ストキハ必  
 スヤ起訴ノ義務ヲ負ハサル可カラス然ルニ論者多クハ起訴スルト否トハ檢事ノ  
 自由ニシテ必スシモ起訴セサル可カラサルノ義務ヲ有セスト主張スルハ畢竟自  
 家撞着ノ議論ト云ハサルヲ得サルナリ論者又曰ク檢事ハ犯罪必罰ノ原則ニ依テ  
 起訴ノ義務アリ既ニ起訴ノ義務アル以上ハ之ヲ訴フレハ足ル可ク復々之ヲ取下  
 クルノ權ナキハ勿論ナリト然レトモ此說ニ依レハ檢事ニ起訴ノ義務ヲ負擔セシ  
 メ而シテ權利トシテ之ヲ取下ヲ許サ、ルハ如何ナル理由ニ依ルヤ毫モ其要領ヲ  
 得サルナリ最後ニ論者又說ヲ爲シテ曰ク檢事既ニ起訴シタル以上ハ其事件ニ付  
 テハ裁判所ノ義務トシテ之ヲ審査セサル可カラス從テ其事件ハ實質上檢事ノ手  
 ナ離レテ全然裁判所ノ手裡ニ移轉ス可ク從テ檢事ハ之ヲ取下クルノ權ナシト余  
 ハ現行法ノ解釋トシテハ寧ロ此最終ノ說ヲ採ラント欲スル者ナリ然レトモ何レ  
 ノ說ニ依ルモ檢事ニ上訴權ヲ左右スルノ權ヲ與ヘタルヲ以テ見レハ必スシモ以

上ノ結論ヲ以テ完全無缺ナリト云フヲ得サル可シ之ヲ外國ノ法律ニ徵スルニ公  
 訴ヲ取下クルヲ得スト爲スハ佛蘭西及ヒ獨逸刑事訴訟法ニシテ奧太利ノ刑事訴  
 訟法ニ於テハ取下ヲ許シタリ故ニ理論上公訴ハ檢事之ヲ取下クルコトヲ得サル  
 モノニ非サルカ如シ

第九編 裁判

第一章 公訴ト裁判トノ關係

檢事ヨリ提起セル公訴ハ二個ノ方法ニ於テ裁判ヲ受クルモノトス即チ一ハ豫審  
 ナ經テ公判ニ移リ一ハ直チニ公判ニ擊屬スルモノナリ而シテ裁判所ハ事件ヲ審  
 理セル結果意見ヲ發表スルモノニシテ其豫審ニ於ケルモノヲ決定ト云ヒ公判ニ  
 於ケルモノヲ判決ト云フ以下判決決定ト公訴トノ間ニ如何ナル關係ヲ有スルヤ  
 ニ付キ聊カ説明スル所アテントス

刑事訴訟法第六十七條ニ依レハ檢事ノ請求シタル以外ニ付キテハ豫審ヲ爲スコ  
 トヲ得ス若シ其以外ニ超越シタルトキハ其手續ハ無効ナル可シト規定シ又同第  
 百八十四條ニ依レハ公判ニ於テハ檢事ノ起訴以外ノ事件ニ付キ裁判スルコトヲ

裁判  
 公訴トノ關係



得スト規定セリ而シテ唯タ此例外トナルハ現行犯豫審ノ場合及附帶ノ犯罪ノ場合ニ限レリ由是觀之特別ノ場合ノ外裁判所ハ起訴セラレタル公訴ノ範圍内ニ於テノミ裁判スルコトヲ得ヘク其以外ニ付テハ何等ノ權利ヲ有セサルモノトス從テ公訴ト裁判トハ其範圍相接合セサル可カラサルナリ然レトモ我刑事訴訟法ニ依レハ犯罪ノ證據ヲ蒐集スルハ裁判所ニシテ檢事ニ非ス換言セハ裁判所ハ自ラ證據ヲ蒐集シテ自ラ裁判ヲ爲シ檢事ハ唯タ犯罪ヲ搜查スルノ權ヲ有スルニ止マシルノミ從テ檢事ノ起訴ハ無證據ナルコトアル可ク又證據ヲ提出スルモ合法ノモノニ非サレハ事實ト相違スル所アルヲ免レサルコト自然ノ數ナリト謂フ可シ若シ民事訴訟法ノ如ク不干涉主義ヲ採ルトキハ斯ル場合ニ於テハ訴ヲ棄却セハ足レリト雖モ現ニ干涉主義ヲ採ル刑事訴訟法ノ下ニ於テハ斯ル結論ハ到底之ヲ許容ス可キモノニ非ス苟モ檢事ノ起訴ニシテ無證據ナル以上ハ裁判所ハ進ンテ證據ヲ蒐集シ不明ノ點ヲ明カニシテ裁判ヲ爲サ、ル可カラサルナリ

判決ハ公訴ノ範圍内ニ於テ爲ス可キモノナレトモ裁判所ニ於テ審理ノ末被告人ノ所爲檢事ノ起訴ヨリ輕キカ又ハ重キ情狀アルコトヲ發見シタルトキハ裁判所

ハ尙ホ其輕キ情狀若クハ重キ情狀ニ付キ裁判ヲ爲スコト得ルヤ否ヤ前ニ述ヘタルカ如ク檢事ハ證據蒐集ノ權ナキヲ以テ檢事ノ起訴ハ必スシモ事實ニ相違ナシト斷言スルヲ得ス從テ裁判所ニ於テ審理ノ末檢事ノ起訴ヨリ其事實ノ輕重アルコトヲ發見スルコトナシト云フ可カラス而シテ裁判所カ檢事ノ起訴ヨリ其情狀輕キコトヲ發見シタルトキハ素ヨリ論ナシ何トナレハ裁判所ハ訴ヲ受ケタル範圍内ニ於テ裁判スルカ故ナリ例ヘハ檢事ハ既遂犯トシテ起訴シタルモ其實未遂ナリシトキノ如シ斯ル場合ニ於テハ裁判所ハ更ニ檢事ノ起訴ヲ待タズ未遂犯トシテ裁判スルコトヲ得ヘシ又情狀重キ場合ニ於テモ裁判所ハ尙ホ裁判ヲ下スコトヲ得ルモノト信ス例ヘハ檢事ハ竊盜トシテ起訴シタルニ其實強盜ナル場合ノ如シ詳言セハ斯ル場合ニ於テハ其犯罪ノ本質ヲ變更シタルモノニ非スシテ唯タ情狀重キニ過キサレハ裁判所ハ檢事ノ新タナル起訴ヲ待ツコトナク自ラ裁判スルヲ得ルモノトス蓋シ裁判所ハ如何ナル範圍迄訴ヲ受ケタルヤヲ知ラント欲セハ須ラシ其判決確定ノ効果ハ如何ナル範圍迄及フヤノ點ニ着眼スルヲ要ス竊盜罪ニ付キ起訴ヲ爲シタルニ其事實ハ強盜罪ナルコトヲ發見シタル場合ニ於テハ



竊盜罪ヲ無罪トシテ放免シ強盜罪ニ付キ新タニ公訴ヲ起サントスルモ竊盜罪ノ無罪ニ因リ財物ヲ不正ニ取得シタル事實ナシトスル裁判既ニ確定セルヲ以テ再ヒ之ヲ動カスコトヲ得ス從テ檢事ノ公訴ハ其殘存セル暴行強迫ノ點ニ限ルモノト云ハサルヲ得ス故ニ場合ニ依リテハ結局強盜罪モ之ヲ免訴セサルヲ得サルノ結果ヲ生ス可シ既ニ被告人ハ重大ナル犯罪ヲ爲シタルコト判然タルニ拘ハラス尙ホ且ツ之ヲ無罪ト爲サ、ル可カラサルハ豈ニ訴訟上機宜ヲ得タルモノナランヤ左レハ唯々情狀ノ重キ者ノ如キハ所謂訴訟ヲ受ケタル區域内ナリト看做サ、ル可カラズ之ヲ要スルニ其情狀ノ輕キトキハ如何ナル場合ニ於テモ裁判所ハ之ヲ裁判ヲ爲スコトヲ得ヘシ又其情狀單ニ重キヲ加フルニ止マルトキハ起訴ノ範圍内トシテ裁判ヲ爲ス可シ

斯ノ如ク裁判ハ公訴ノ事實ニ羈束セラレ其範圍ヲ超越スルコトヲ得サルヲ原則トスルモ尙ホ二三ノ例外アリテ存ス

(第一) 豫審判事カ檢證調書ヲ作りタル場合 豫審判事カ檢事ヨリ先キニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アリタルコトヲ知り得ル場合ニ於

テ其事件急速ヲ要スルトキハ檢事ノ請求ヲ待タズシテ犯所ニ臨檢シ其檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス(刑事訴訟法第四百十二條及第四百十三條)

(第二) 公判中附帶犯罪ヲ發見シタル場合 附帶犯罪ノ何タルヤハ後ニ公判ノ場合ニ於テ説明ス可シ而シテ公判ノ辯論中附帶犯罪ヲ發見シタルトキハ裁判所ハ檢事ノ起訴ナキモ併セテ之ヲ裁判ス可キモノトス(刑事訴訟法第八十四條)

(第三) 證人又ハ鑑定人ノ供述不實ナル場合 裁判所カ證人又ハ鑑定人ノ供述不實ナルコトヲ發見シタルトキハ職權ヲ以テ之ヲ裁判スルコトヲ得ヘシ(刑事訴訟法第九十五條)

以上三個ノ場合ハ例外トナルモノニシテ即チ此等ノ場合ニ於テハ裁判所ハ檢事ノ起訴ナキモ職權ヲ以テ進ンテ裁判スルコトヲ得ヘシ

### 第二章 裁判ノ種類及裁判ノ成立

裁判トハ裁判所ノ意見ヲ指稱スルモノニシテ之ヲ三種ニ區別スルコトヲ得ヘシ即チ判決、決定及命令是レナリ而シテ其効用ニ至リテハ各差異アリテ其詳細ナル

裁判ノ種類及成立



點ハ宜シク民事訴訟法及裁判所構成法ヲ參照セサル可カラス今茲ニ之ヲ概言ス  
 レハ命令ハ裁判長ノ意見ニシテ判決ト決定トハ裁判所ノ意見ナリ尙ホ其差異ヲ  
 述ブレハ判決ハ事件ノ繫屬セル裁判所ノ意見ニシテ之アリテ始メテ犯罪ノ有無  
 ナ決スルモノナリ又決定及命令ハ訴訟ヲ進行セシメ又ハ確定シタル裁判ヲ執行  
 セシムル爲メニ障礙物ヲ排斥スルノ方法ナリ即チ證人鑑定人ヲ呼出シタルニ之  
 ニ應セサルヲ以テ罰金ヲ言渡スカ如シ要スルニ判決決定及命令ハ一ハ全ク訴訟  
 ナ消滅セシメ一ハ訴訟ヲ進行セシムルノ方法ナル點ニ於テ差異アルヲ見ル可シ  
 然レトモ我刑事訴訟法ハ豫審終結ノ場合ニ於テハ決定ヲ判決即チ中間判決ノ意  
 義ニ使用シ全ク訴訟ヲ消滅セシムルノ効果ヲ與ヘタリ是レ決定ノ性質ニ於テ一  
 ノ特例ト云フ可シ

裁判成立ノ方法ハ裁判所構成法第百十九條乃至第百二十四條ノ規定スル所ナリ  
 即チ合議體ノ裁判ニ付テハ定數ノ判事ノ過半數ニ依リ之ヲ決ス可ク而シテ判事  
 ハ其裁判ス可キ問題ニ付テ自己ノ意見ヲ發表スルコトヲ拒絕シ得サルモノトス  
 又其評議ニ於テ意見ヲ述フル順序ハ官等ノ最モ低キ者ヲ始メトシ官等同シキト

キハ年少者ヲ始メトシ裁判長最後ニ意見ヲ述フルモノトス又受命ノ事件ニ付テ  
 ハ受命判事先ツ自ラ其意見ヲ述ヘサル可カラス(裁判所構成法第百十九條第百二  
 十二條第百二十三條第一項第百二十四條)

合議體ノ裁判ノ評決ハ過半數ニ依ル可キモ若シ三說以上ニ分レテ各過半數ニ至  
 ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ  
 合算スルモノトス是レ裁判所構成法第百二十三條第三項ノ規定スル所ナリ故ニ  
 例ヘハ甲判事ハ一年ノ禁錮ニ處ス可シト主張シ乙判事ハ十个月丙判事ハ八個  
 月ニ處ス可シト主張スルトキハ十个月ニ處スルカ如シ茲ニ議論アルハ法文ニ所  
 謂三說トハ理由ヲ云フ乎將々其結果ヲ云フ乎ノ點即チ是レナリ蓋シ之ヲ理由ト  
 爲シ又ハ結果ト爲スニ依リテ其間ニ重大ナル差異ヲ生ス可シ例ヘハ五人ノ判事  
 其說各分レ一人ハ被告人ノ所爲ヲ以テ正當防衛ナリト論シ一人ハ證據不充分ナ  
 リト論シ一人ハ犯罪ノ意思ナシト論シ他ノ二人ハ有罪ナリト論スル場合ニ於テ  
 若シ理由ノ點ヨリ云フトキハ有罪ヲ主張スル者多ク無罪ヲ主張スル者少ナシト  
 雖モ之ニ反シテ結果ヨリ云フトキハ無罪ヲ主張スル者多數ヲ占メ有罪ヲ主張ス



ル者少數タル可シ余ハ法文ニ所謂三説トハ理由ヲ指スモノニ非スシテ其結果ノ謂ナリト信ス

裁判ノ告知

### 第三章 裁判ノ告知

裁判所ノ意見ヲ發表スルノ方法即チ當事者ニ告知スルノ方法ニ二種アリ言渡及ヒ送達是レナリ而シテ裁判ハ當事者ニ送達シ又ハ言渡スニ非サレハ其効力ヲ生セス以下此二者ヲ分論ス可シ

裁判ノ言渡

#### 第一節 裁判ノ言渡

刑事訴訟法第二百四條ニ依レハ判決ノ言渡ハ辯論ヲ終リタル後即日又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲ス可シ判決ノ言渡ハ主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス其判決ノ理由ハ判決ノ言渡ト同時ニ之ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シト即チ判決ノ言渡ハ公判廷ニテ之ヲ爲スモノニシテ辯論ヲ終結シタル後即日又ハ次ノ開廷日ニ判決ノ主文ヲ朗讀シ其理由ハ朗讀ニ因リ又ハ口頭ニテ之ヲ言渡サ、ル可カラス然ルニ今若シ此等ノ規定ニ背キテ辯論ヲ終リタル後即日又ハ次ノ開廷日ニ判決ヲ言渡サス或ハ理由ヲ言渡サ、ルトキハ其結果如何余ハ先ツ即日又ハ次ノ開廷日ニ

判決ヲ言渡サ、ル場合ヨリ之ヲ論センニ此點ニ付テハ學說二派ニ分ル第一説ハ曰ク法律カ第二百四條ノ如キ規定ヲ設ケタル理由ヲ考フルニ是レ口頭辯論主義ヲ採用シタル結果トシテ口頭辯論ニ因テ得タル心證ノ未タ裁判官ノ念頭ヲ去ラサル間ニ判決ヲ下サシメントスルノ精神ニ外ナラサルナリ從テ辯論終結後即日又ハ次ノ開廷日ニ言渡サ、レハ不法ノ判決タルヲ免レスト第二説ハ曰ク刑事訴訟法ノ口頭辯論主義ヲ採リタルハ論者ノ説ノ如シ然レトモ我刑事訴訟法ノ此主義ヲ一貫セサルコトハ第八十三條ノ辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタルトキハ其全癒ノ後辯論ヲ新タニシ又其他ノ疾病ニ因テ辯論ヲ停止スルコト五日間以上ニ及フトキハ申立ニ因リ辯論ヲ新タニスルコトヲ規定シ其以外ニ辯論ヲ停止シタル場合ニ付テハ何等ノ規定ナキヲ以テモ之ヲ見ルコトヲ得ヘシ而シテ判決ハ公判ノ一部ニシテ其性質上毫モ辯論ト異ナルコトナケレハ辯論後即日又ハ次ノ開廷日ニ判決ヲ言渡サ、レハトテ何等ノ不法不當ナル理由ヲ發見スル能ハス若シ之ヲ不法ナリトセハ夫ノ辯論中證人呼出ノ爲メニ數日ヲ要シ爾後辯論ヲ續行スル場合ニ於テモ亦辯論ヲ新タニ爲サ、ル可カラスト論決セサルヲ得



ス加之被告人不在ノ場合ニ於テハ唯ダ一片ノ送達ヲ以テスルモ尙ホ判決ノ効力アリト爲スヨリ之ヲ見ルモ言渡ノ日時ハ判決ノ必要條件ニ非スト云フヲ得ヘシト余ハ此第二説ヲ以テ妥當ヲ得タルモノト信スルナリ

以上講述シタル所ハ判決言渡ノ手續ナリ然ルニ決定命令ニ付テハ此點ニ關シテ何等ノ規定アルヲ見ス唯ダ豫審終結ノ決定ハ之ヲ檢事及ヒ被告人ニ送達ス可キモノトス(刑事訴訟法第七十一條)是レ口頭辯論ヲ經サルカ故ナラン左レハ縱令決定ト雖モ口頭辯論ヲ經タルモノニ付テハ判決ト同シク之ヲ言渡サ、ル可カラスト信ス

裁判ノ送達

### 第二節 裁判ノ送達

送達ハ口頭辯論ヲ經サル決定及ヒ其他ノ必要ニ應シテ書類ヲ被告人ニ交付スルノ手續ナリ而シテ缺席判決ノ場合ニ於テ縱令口頭辯論ヲ經タルトキト雖モ尙ホ判決書ハ之ヲ送達ス可キモノトス(刑事訴訟法第二百二十八條第一項)

刑事訴訟法第十九條ニ依レハ書類ノ送達ハ此法律ニ於テ別ニ規定アラザルトキハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ストアリ而シテ茲ニ所謂特別ノ規定トハ左ノ二三ノ

場合ニ就テ之ヲ見ルコトヲ得ヘシ

(第一) 召喚狀、勾引狀及ヒ勾留狀ノ送達ニ於ケル機關ヲ異ニス 刑事訴訟法ノ規定ニ依レハ召喚狀ノ送達ハ執達吏ヲシテ之ヲ爲サシメ勾引狀、勾留狀ハ巡查憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セシムルモノトス(刑事訴訟法第七十六條第三項)之ニ反シテ民事訴訟法ニ依レハ如何ナル場合ニ於テモ執行ノ機關ハ執達吏又ハ郵便ナリ

(第二) 監獄署内ニ在ル被告人ニ送達ヲ行フ手續ヲ異ニス 刑事訴訟法第八十四條ニ依レハ被告人監獄署ニ在ルトキハ執達吏ヲシテ之ヲ本人ニ送達セシム可シト爲セリ是レ亦民事訴訟法ト異ナル所ニシテ同法ニ依レハ監獄署内ニ在ル被告ニ書類ヲ送達スルトキハ監獄署ニ之ヲ交付ス可キモノトセリ

(第三) 公示送達ノ場合ニ於ケル揭示期間ヲ異ニス 刑事訴訟法第二百二十七條ニ依レハ公示送達ノ場合ニ於テハ告知書ヲ一个月間裁判所ノ揭示板ニ貼付シテ公示ス可シトセリ然ルニ民事訴訟法第五十八條ニ依レハ公示ノ期間ハ之ヲ十四日ト定ム故ニ是レ亦民事ノ送達方法ニ對スル例外ナリトス



以上三个ノ場合ニ於ケル刑事訴訟法ノ送達方法ハ民事訴訟法ノ通常送達方法ノ例外タル可キモノナリ此場合ノ外ハ如何ナル場合タルヲ問ハズ總テ民事訴訟法ノ規定スル送達ノ方法ヲ準用ス可キモノトス

裁判所ノ用語

### 第四章 裁判所ノ用語

我裁判所ニ於テハ日本語ヲ用フルモノトス然レトモ當事者若クハ證人鑑定人ニシテ日本語ニ通セザレハ通事ヲ用フ若シ通事ヲ得難キ場合ニ於テ書記其言語ニ通スルトキハ裁判長ノ承諾ヲ得テ通事ト爲ルコトヲ得又場合ニ依リテハ外國語ヲ以テ取調ヲ爲シ得ルモ其調書ハ日本語ヲ以テ之ヲ調製セサル可カラズ(裁判所構成法第百十五條乃至第百十八條及刑事訴訟法第百九十六條)

期日及期間

### 第十編 期日及期間

刑事訴訟法ニ於ケル時ノ効力ニ二種アリ即チ期日及期間はレナリ期日トハ訴訟ヲ爲スノ日ヲ云ヒ期間トハ訴訟行爲ヲ爲ス可キ一定ノ時間ヲ云フ以下之ヲ分説ス可シ

期日

### 第一章 期日

期日トハ判廷ヲ開キテ訴訟行爲即チ證人鑑定人ノ訊問若クハ檢證等ヲ爲スノ日ヲ云フ刑事訴訟法ニ於テハ元來休暇ナルモノ、規定ナシ且ツ裁判所構成法第百二十九條ニ依レハ刑事訴訟ハ裁判所ノ休暇中ニ拘ハラズ停止スルコトナシト規定セルヲ以テ裁判所ハ實際ニ於テハ日曜日又ハ大祭日ニ期日ヲ定メサルヲ通例トスルモ必要ノ場合ニハ此等ノ祝祭日ニ於テ開廷ヲ爲スモ決シテ違法ノ裁判タルコトナシ

期間

### 第二章 期間

期間トハ裁判所カ一定ノ時間内ニ或訴訟行爲ヲ爲ス可シト定メタル時日ノ繼續ヲ云フ例ヘハ上訴故障勾引狀又ハ勾留狀ノ期間ノ如キ即チ是レナリ期間ノ計算ニ付テハ其起算點ハ法律又ハ裁判官之ヲ定メ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セスシテ翌日ヨリ之ヲ起算シ二十四時ヲ以テ一日トシ三十日ヲ以テ一月トシ一年ハ曆ニ從フモノトス然レトモ最終ノ日カ休暇ニ該ルトキハ期間ニ算入セス例ヘハ最終ノ日カ日曜日又ハ大祭日ナルトキハ其翌日ヲ以テ期間ノ最終ノ日ト爲ス故ニ其中間ニ存在スル日曜日又ハ

刑事訴訟法

期日及期間 期日、期間







(三) 被告人 被告人期日ヲ守ラサルトキハ刑事訴訟法第七十一條ニ依リ勾引狀ヲ執行セラル可ク又ハ第二百二十六條ニ依リ缺席判決ヲ受ケサル可カラズ又期間ヲ守ラサルトキハ故障上訴權ヲ喪失ス可キモノトス

(四) 辯護人 辯護人期日ヲ守ラサルトキハ輕罪ニ付テハ辯護權ヲ喪失ス可ク重罪ニ付テハ辯護人ナクシテ裁判ヲ爲シ得サルヲ以テ裁判所ヲ構成セサルモノトス又期間ヲ守ラサルトキハ上訴故障ノ權ヲ喪失ス可シ而シテ法律上ノ代理人ニ付テモ亦同一ナリトス

(五) 證人、鑑定人 證人、鑑定人期日ヲ守ラサルトキハ勾引又ハ罰金ニ處セラレ且ツ費用ノ賠償ヲ命セラル、コトアル可シ(刑事訴訟法第百十八條及第百三十六條)但シ鑑定人ニ對シテハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス又證人、鑑定人カ期間ヲ守ラサルトキハ罰金ノ言渡ヲ取消スノ權ヲ喪失ス可シ(刑事訴訟法第百十九條)以上講述シタル如ク檢事及訴訟關係人ハ期日、期間ヲ守ラサルトキハ訴訟ヲ爲スノ權ヲ失フモノトス然レトモ事情止ムヲ得スシテ之ヲ守ルコト能ハサル場合ニ於テ尙ホ之ヲ強ユルハ法律ノ本旨ニ非サルカ故ニ刑事訴訟法第十七條ニ於テモ

特別ノ場合ヲ除ク外云々ト明言シ以テ其調和ヲ計レリ所謂特別ノ場合トハ即チ原狀回復ヲ許ス場合ナリトス然レトモ原狀回復ハ如何ナル場合ニ於テモ之ヲ許スモノニ非スシテ二个ノ制限アリテ存ス

第一、原狀回復ノ申立ハ故障及上訴ノ期間ヲ經過セル場合(刑事訴訟法第二百三十一條、第二百三十四條、第二百四十七條及證人、鑑定人カ不參ニ因リ罰金ヲ言渡サレタル場合)刑事訴訟法第百十九條、第百三十六條ニ限り之ヲ爲スコトヲ得ヘ

第二、訴訟關係人ハ天災其他避ク可カラサル事變等ノ障礙ノ止ミタル日ヨリ起算シテ通常ノ期間内ニ其事實ノ疏明方法ヲ申立書ニ記載シ故障若クハ上訴ヲ爲ス可キモノトス(刑事訴訟法第二百四十七條)

裁判所ニ於テ以上二个ノ制限ニ從ヒタル申立ヲ許可シタルトキハ故障若クハ上訴ハ未タ期日、期間ヲ過經セザリシ以前ノ程度ニ復シ更ニ之ヲ爲スコトヲ得刑事訴訟法第二百四十八條)而シテ法文ニ所謂天災其他避ク可カラサル事變トハ一ニ裁判官ノ決定ニ任ス可キヲ以テ各場合ニ於テ異ラサルヲ得サルナリ



第十一編 訴訟手續

上來講述シタル所ハ訴訟ヲ爲ス可キ準備ニ過キス今ヤ本編ニ於テハ訴訟ノ手續即チ檢事ノ搜查、起訴及豫審ニ付テ講述セントス

第一章 犯罪ノ搜查

犯罪ノ搜查トハ犯罪ノ有無犯人ノ何人タルヤヲ審明シ並ニ證據物ヲ集取スルコトヲ云フ(刑事訴訟法第四十六條)檢事ノ犯罪搜查權ハ此範圍内ヲ出テサルモノニシテ其目的タル畢竟起訴ノ材料ヲ集取スルコト外ナラス故ニ犯人ヲ逮捕スルハ勿論特別ノ場合ヲ除クノ外強制ヲ以テ搜查ヲ行フコトヲ得サルモノトス

第一節 犯罪搜查ノ原因

犯罪搜查ノ原因ニ二アリ搜查權ヲ有スル人カ自ラ犯罪アルコトヲ認知思料スル場合及他人ニ依リテ犯罪アルコトヲ告知セラル、場合はレナリ例ヘハ告訴告發又ハ自首ノ如キハ搜查權ヲ有スル者カ他人ニ依リ犯罪アルコトヲ告知セラル、場合ニシテ現行犯ノ如キハ搜查權ヲ有スル人カ自ラ犯罪アルコトヲ認知スル場合ナリ其他公訴提起ノ原因中ニ掲ケタル風説新聞ノ記事ノ如キハ依テ以テ自ラ

犯罪アルコトヲ認知思料スル場合ニ包含セシムルコトヲ得ヘシ

第二節 犯罪搜查ノ機關及管轄

犯罪搜查ノ機關ハ第一、檢事第二、司法警察官是レナリ本法第四十六條ハ檢事ニ搜查權アルコトヲ規定シ第四十七條及第四十八條ハ檢事ノ補助官トシテ檢事以外ノ者ニ搜查權アルコトヲ規定シタリ檢事以外ニ搜查權ヲ有スル者ハ即チ(一)警視總監及地方長官(二)警視、警部長(三)島司(四)憲兵將校、下士(五)郡長(六)林務官(七)市町村長(八)船長是レナリ(司法警察官ノ章ト参照ス可シ)

此等ノ搜查權ヲ有スル者カ其職務ヲ行フ管轄ノ區域ハ事物ノ點ニ付テハ素ヨリ制限アルコトナシ唯問題トナルハ林務官ノ如キハ山林以外ノ事ニ關スル犯罪ニ付テモ尙ホ搜查權ヲ有スルヤ否ヤノ點ニ在リ余ハ林務官ト雖モ法律ニ於テ司法警察官トシテ搜查ノ權アルコトヲ規定シ而シテ別ニ其職權ニ付キ制限ヲ設ケサル以上ハ縦令山林以外ノ犯罪ニシテ其如何ナル種類タルニ拘ハラズ總テ搜查權アリト云フヲ以テ最モ解釋ノ正鵠ヲ得タルモノト信ス但シ實際ノ慣例ニ於テハ或ハ余ノ議論ニ反スルモノナキニアラスト雖モ現行法上其根據ノ薄弱ナルコト



ヲ斷言スルヲ得ヘシ

次ニ土地ノ管轄ニ付テハ事物ノ管轄ト異ナリテ制限アリ即チ檢事ノ管轄區域ハ附置セラレタル裁判所ノ管轄ト同一ナルヲ以テ其區域外ニ出テ、捜査ヲ爲スコトヲ得ス(構成法第六條)

刑事訴訟法第四十七條ニ警視總監及地方長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルコト付キ云々トアルヲ以テ此二者ニ限り行政上ノ管轄區域ニ於テノミ捜査權ヲ行ヒ得ルカ如クナレトモ警察官タルト市町村長タルト島司タルト將ヲ林務官タルトナ問ハス凡テ皆ナ其管轄區域内即チ行政上ノ土地ノ區畫内ニ於テノミ管轄權ヲ有シ其外ニ出テ、ハ捜査ヲ爲スコトヲ得スト解釋セサル可カラス

### 第三節 犯罪捜査ノ區域并ニ手段

犯罪捜査ノ區域并ニ手段

犯罪捜査ノ區域并ニ手段ハ學者ノ間大問題ノ存スル所ナリ余ハ先ツ現行犯ト非現行犯トニ區別シテ論述ス可シ

現行犯ニ關スル捜査ノ區域并ニ手段ハ本法第五十八條乃至第六十一條及第四百

十四條、第四百四十六條、第四百四十七條ニ規定シ同條ハ檢事并ニ司法警察官ニ裁判官ト同様同量ノ職權ヲ與ヘタリ論者或ハ第五十八條ハ捜査ノ手續ナルモ第四百四十四條、第四百四十三條、第四百四十七條即チ假處分ハ豫審處分ニシテ捜査ノ手續ニ非スト論スルモノアレトモ是レ大ナル誤見ナリ試ニ第五十八條ト第四百四十四條、第四百四十六條、第四百四十七條ト比較シテ果シテ幾何ノ相違カアル現行刑事訴訟法ハ現行犯ニ付キ檢事及司法警察官ニ豫審判事ト同様ノ職權ヲ與ヘタルコトヲ注意セサル可カラス即チ第五十八條ハ司法警察官及巡查、憲兵卒ニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ許シ第四百四十四條、第四百四十六條及第四百四十七條ハ檢事、司法警察官ハ罰金又ハ費用ノ賠償ノ言渡ヲ爲シ及證人、鑑定人ニ宣誓ヲ命スルコトヲ許サステニ司法警察官ニ對シ勾留狀ヲ發スルコトヲ禁シタルモ其他豫審判事ニ屬スル處分ハ之ヲ行フコトヲ許シタリ前者ハ人身ノ自由ヲ束縛スルコトヲ許シ後若ハ亦裁判官ニ屬スル處分ヲ許ス均シシ是レ裁判官ニ屬スル處分ナリ然ルニ犯人ヲ逮捕スルハ捜査處分ニシテ同時ニ審問スルハ豫審處分ナリト云フヲ得ス又犯人ヲ逮捕スルハ捜査處分ニシテ同時ニ物件ヲ差押ユルハ豫審處分ナリト云フヲ得ス二者ノ



間毫モ區別ノ認ム可キモノナシ後者ニシテ捜査處分ニ非サレハ前者モ亦捜査處分ニ非ス前者ニシテ捜査處分ナルコトヲ認メテ後者ノ捜査處分ナルコトヲ認メサルハ誠ニ怪シムニ堪ヘタリ要スルニ我現行法ハ現行犯ニ付テハ檢事及司法警察官ニ豫審判事ト同様ノ權限ヲ與ヘタルモ其處分ハ公訴ノ準備手續ナルカ故ニ捜査處分ナリト云ハサルヲ得ス最モ議論アルハ非現行犯ノ場合ニ於ケル檢事及司法警察官ノ捜査ノ區域及手段ナリ

檢事及司法警察官カ非現行犯ノ場合ニ於ケル犯罪捜査ノ區域及手段如何即チ檢事及司法警察官ハ非現行犯ノ場合ニ於テ犯罪捜査上證人被告人ヲ訊問シ又ハ檢證物件差押及臨檢ヲ爲シ得ル乎ノ問題ナリ裁判所ノ慣例ハ此問題ニ對シテ消極的ノ判決ヲ與ヘタリ而シテ其理由トスル所ハ下ノ如シ帝國憲法第二十三條ニ曰ク「日本臣民ハ法律ニ依ルニ非サレハ逮捕、監禁、審問、處罰ヲ受クルコトナシ」ト而シテ刑事訴訟法ヲ按スルニ現行犯ノ場合ハ措テ問ハス非現行犯ノ場合ニ於テ檢事及司法警察官ハ告訴、告發ヲ受クルコトヲ規定スルモ證人及被告人ヲ訊問シ又ハ臨檢、檢證ヲ爲シ物件差押ヲ爲シ得ルコトヲ規定セス故ニ若シ非現行犯ノ場合ニ

於テ檢事及司法警察官カ此等ノ手續ヲ爲シタルトキハ其處分ハ特ニ法律ノ許ササル所ナルカ故ニ憲法上無効ナリト云ハサル可カラス從テ此等ノ處分ニ因リテ調製シタル書類ヲ裁判ノ材料ト爲ストキハ其裁判ハ不法ノ裁判タルヲ免レサルナリト檢事及司法警察官カ非現行犯ノ場合ニ於テ證人被告人ヲ訊問スルコトハ法律ノ特ニ許サ、ル處分ナルカ故ニ憲法第二十三條ニ牴觸ストノ說ハ余輩首肯スルコト能ハス檢事、司法警察官ノ證人被告人ヲ訊問スルヲ以テ直チニ憲法第二十三條ニ所謂審問ナリト解スルハ恐ラクハ誤解ナル可シ憲法ニ所謂審問トハ審問セラル、者ニ對シ審問ヲ受クルノ義務ヲ負ハシメタル場合ニシテ此義務ハ法律ニ因ルニ非サレハ何人ニモ生スルコトナシ法律上斯ノ如キ審問權ヲ有スル者ハ普通裁判官ナリ檢事、司法警察官ニハ特別ナル場合ノ外斯ノ如キ審問權ヲ與ヘサルカ故ニ此等ノ官吏ノ訊問ニ對シテハ證人、被告人ニ答辯ヲ爲ス可キ義務ヲ生スルコトナシ故ニ此等ノ者ヲ證人、被告人ト看做シテ訊問ヲ爲シ其訊問ヲ受ケタル人民モ亦隨意ニ之ニ答辯シタリトテ決シテ憲法ニ所謂審問ノ手續ヲ不法ニ爲シタリト云フヲ得ス然ラサレハ吾人カ途上ニ於テ路人ニ前路ノ遠近ヲ問フモ憲



法第二十三條ニ牴觸スルモノト云ハサル可カラズ學校ノ教師カ子弟ノ父母ヲ召喚シテ子弟ノ勤惰ヲ取調フルモ亦同條ニ牴觸スルモノト云ハサル可カラズ果シテ斯ノ如ク我憲法ヲ解ス可キモノトセハ吾人ノ行爲ハ太甚シキ制限ヲ受ケタルモノト云ハサルヲ得ス然レトモ是レ反對論者ト雖モ首肯スル所ニ非サル可シ既ニ吾人カ路上ニ於テ行人ニ道途ヲ問フモ又學校ノ教師カ子弟ノ父母ヲ召喚シテ取調ヲ爲スモ憲法第二十三條ニ牴觸スルモノニ非ストセハ檢事司法警察官カ非現行犯ノ場合ニ於テ證人又ハ被告人ヲ召喚シテ訊問スルモ亦憲法第二十三條ニ牴觸スルモノニ非サルヤ昭々タリ余輩ハ檢事及司法警察官カ通常人ノ爲シ能フ所ヲ爲シ能ハスト云フノ理由ヲ發見スルコト能ハス又法律上特ニ規定アラサルヲ以テ檢事ハ告訴、告發ヲ受クルノミニ止マリ他ノ手續ヲ爲スヲ得スト云フ者アリ此說ニ從フトキハ夫ノ刑法ニハ自首ノ規定アリテ刑事訴訟法ニ此規定ナキヲ以テ檢事及司法警察官ハ自首ヲモ受クルコト能ハスト云ハサル可カラズ世上往々虛妄ノ事實ヲ本トシ自首、告訴、告發ヲ爲ス者アルヲ以テ檢事、司法警察官ニシテ相當ニ其職務ヲ行フニハ告訴等ヲ受理スルニ於テ大ニ注意スル所ナクンハアラ

ス從テ被告人又ハ證人ヲ召喚シテ之ヲ取調フルハ素ヨリ其所ナリ左レハ檢事及司法警察官ハ單ニ告訴、告發ヲ受クルニ止マリ其他ノ手續ヲ爲スヲ得ストスル理由ハ到底之ヲ發見スルコト能ハス故ニ余輩ハ犯罪ノ搜查處分ヲ以テ被告人ヲ逮捕スル等公力ヲ用フルコトヲ爲シ能ハサルハ素ヨリ論ナキモ公力ヲ用非シテ被告人、證人ヲ訊問シ又ハ臨檢、檢證又ハ物件差押ヲ爲シ此等ノ調書ヲ作ルハ決シテ不法ニ非スト斷言スルニ躊躇セサルナリ

斯ノ如ク法曹間ニ議論ノ紛爭ヲ來タセシハ職トシテ刑事訴訟法ノ粗架ナルニ由ラスンハ在ラス佛國刑事訴訟法ニ於テハ檢事、司法警察官及豫審判事ノ三者ヲ以テ犯罪搜查ノ機關ト爲スヲ以テ通常ノ場合ハ檢事及司法警察官ニ於テ搜查ヲ爲シ若シ判事ノ力ヲ藉ラスンハ爲シ得サル場合ニハ豫審判事之ニ從事スルヲ以テ我邦ノ如ク調書ノ有効、無効ノ議論ヲ生スルコトナシ又獨逸刑事訴訟法ニ於テハ檢事及司法警察官ハ證據ノ蒐集等凡テ公訴準備ノ手續ヲ爲シ得ルモ若シ強制ヲ加フルニ非サレハ爲スコト能ハサル場合ニハ檢事ハ區裁判所ノ判事ヲシテ其取調ヲ爲サシムルカ故ニ獨逸ニ於テモ我邦ノ如キ調書ノ有効、無効ノ議論ヲ生スル



コトナシ之ヲ要スルニ佛獨法共ニ檢事及司法警察官ノ爲シ得ル範圍ハ強制ニ出  
 テサルマテニ止マリ其程度ヲ越エレハ檢事ノ請求ニ因リ判事之ヲ爲サシムルモ  
 ノトセリ我治罪法ニ於テハ佛國法ノ如ク豫審判事ヲモ亦犯罪搜查ノ機關ノ一ト  
 爲シタリシカ刑事訴訟法ニ於テハ獨逸法ニ模倣シ豫審判事ヲ犯罪搜查ノ機關中  
 ヨリ除キテ檢事及司法警察官ヨリ獨立セシメタリ然レトモ敢テ獨逸法ノ如ク區  
 裁判所判事ヲシテ檢事ノ搜查處分ノ機關トスルコトナク去レハトテ豫審判事ニ  
 ハ犯罪搜查權ヲ與ヘサルヲ以テ遂ニ本問ノ如キ一大問題ヲ惹起スルニ至レリ他  
 日斯法改正ノ際ハ此等ノ點ハ最モ注意ヲ要ス可キモノナラン

事件ノ送附

第四節 事件ノ送附

司法警察官若クハ檢事カ犯罪事件ヲ搜查シ最早取調フルニ及ハスト認メタルト  
 キハ之ヲ相當ノ管轄裁判所ノ檢事ニ送附セサル可カラス今其手續ヲ詳述スレハ  
 即チ左ノ如シ

司法警察官ニ於テ違警罪ノ告訴、告發ヲ受ケタルトキ又ハ現行犯等ニ因リ犯罪ア  
 ルコトヲ發見シタルトキ(刑事訴訟法第四十九條、第五十八條)ハ即決ヲ爲ス可キ事

件ニ付テハ相當官署ニ、其他ノ事件ニ付テハ檢事ニ送附セサル可カラス又違警罪  
 ノ事件ト雖モ一タヒ檢事ノ手ニ係リタルトキハ即決例ニ依リ之ヲ處斷ス可キモ  
 ノニ非ラス必スヤ檢事ハ第六十二條及第六十三條ニ依リ相當管轄裁判所ニ起訴  
 セサル可カラス等シク是レ違警罪ナルモ檢事ナルト司法警察官ナルトニ依リ斯  
 ノ如ク其手續ヲ異ニスルハ一見甚タ奇怪ノ感ナキ能ハスト雖モ刑事訴訟法編纂  
 ノ際即決例ナルモノ、存在ニ注意セサリシ結果トセハ復タ敢テ非難スルニ足ラ  
 サル可シ

檢事ニ於テ告訴、告發ヲ受ケ若クハ司法警察官其他ノ檢事ヨリ事件ノ送附ヲ受ケ  
 又ハ自ラ犯罪アルコトヲ認知思料シ其取調ヲ必要ト認ムルトキハ相當ノ手續ヲ  
 爲シ犯罪アリト認メタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲サ、ル可カラス  
 普通裁判所ノ管轄ニ屬セサルモノ即チ陸海軍ノ軍法會議ニ於テ處分ス可キモノ  
 ニ付テハ現今特別ノ規定アリ即チ陸海軍人ノ非現行犯ニ付テハ司法警察官、檢事  
 及豫審判事ハ告訴、告發ヲ受クルコトヲ得又現行犯ニ付テハ司法警察官直チニ之  
 ヲ逮捕スルコトヲ得而シテ此等ノ官吏カ告訴、告發ヲ受ケ又ハ現行犯ノ場合ニ於



テ被告人ヲ逮捕シタルトキハ直チニ陸海軍ノ檢察官ニ送附セサル可カラス斯ノ如ク豫審判事ヲシテ司法警察官タルノ職務ヲ行フモノトセルハ舊治罪法トノ權衡上ヨリ出テタルモノナレハ現行法ヨリ看ルトキハ奇怪ノ感ナキ能ハス願フニ陸海軍ノ治罪法ハ早晚之ヲ改正セサルヲ得サル可シ(陸軍治罪法第四十二條海軍治罪法第四十二條第四十三條及第四十九條)

### 第一章 起訴

以上述へ來リタル所ヲ以テ事件ハ總テ檢事ノ手ニ集マルカ故ニ檢事ハ茲ニ起訴ノ手續ヲ執ラサル可カラス今起訴ニ付テ檢事ノ注意ス可キ事項ヲ列擧スレハ左ノ如シ

- 第一、管轄裁判所ニ起訴セサル可カラス
- 第二、其事件タル元來罪トナラサル平時効ヲ經タル乎若クハ親告罪ニ付テハ告訴アリヤ否ヲ調査セサル可カラス 即チ本法第六條所定ノ原因アルトキ及法律上罪トナラサルモノト認メタル場合ハ敢テ起訴スルニ及ハス蓋シ此點ニ付キ學者或ハ異論ヲ挾ムモノアラソ然レトモ本法第一條ヲ看ルニ公訴ハ犯罪ヲ

證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスルモノニシテ云々トアリ既ニ公訴ニシテ刑ノ適用ヲ目的トセンカ事件ニシテ罪トナラズ若クハ時効ヲ經過シタル以上ハ敢テ起訴スルニ及ハサルヤ明瞭ニシテ疑フ可カラス

第三、訴訟ノ併合ニ注意セサル可カラス 若シ同一人ニシテ數罪ヲ犯スカ若クハ數人ニテ一罪ヲ犯シタルトキハ同時ニ同一裁判所ニ起訴セサル可カラサルモノトス

第四、起訴ニ二途アリ公判及豫審是レナリ是レ亦注意セサル可カラス 刑事訴訟法第六十二條ヲ看ルニ

- (一) 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ必ス豫審判事ニ豫審ヲ求ム可ク
- (二) 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ或ハ豫審ヲ求メ又ハ直チニ其裁判所ニ訴テ爲ス可ク
- (三) 構成法第十六條第二號第三號ニ記載シタル輕罪又ハ違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添へ之ヲ區裁判所檢事ニ送致ス可キモノトセリ



檢事ニ於テ公訴ヲ起シタルトキハ裁判所ハ之ヲ受理シ豫審若クハ公判ノ手續ヲ爲サ、ル可カラス以下進ンテ豫審ノ手續ニ付キ講述ス可シ

### 第二章 豫審

豫審ハ特別ノ場合ヲ除クノ外ハ凡テ檢事ノ起訴ニ因リ成立スルモノニシテ裁判所ニ於テ訴訟事件ヲ公判ニ移ス可キヤ否ヤヲ決定スル訴訟ノ一段階ナリ而シテ檢事カーゴヒ豫審ヲ請求スルトキハ其事件ハ裁判所ニ繫屬スルモノナルカ故ニ檢事ハ最早之ヲ取下クルコトヲ得ス

豫審制度ノ目的ハ公判ノ煩雜ヲ防クニ在リ蓋シ口頭審理主義ヲ採ル訴訟法ニ在リテハ凡テノ訴訟事件ヲシテ悉ク公判ニ集マラシメハ證據物ノ明確ヲ欠キ訴訟ハ紛々擾々トシテ復々能ク事實ノ真相ヲ穿ツコト能ハサルニ至ル可シ是ヲ以テ事件ノ重大ナルモノニ在リテハ先ツ之ヲ豫審ニ附シテ證據ヲ蒐集整頓シ後始メテ之ヲ公判ニ移シ以テ善良ナル裁判ヲ得ントスルニ在リ

豫審ノ意義ニ付テハ舊治罪法ト刑事訴訟法トハ其見ル所ナ同ウセス即チ治罪法ニ於テハ豫審判事モ亦司法警察官ノ一人ニシテ豫審ハ司法警察ノ事務ト爲シ檢

事カ自ラ犯罪ノ搜索ヲ爲シ得サル場合ニ於テハ裁判所ニ委託シテ其調査ヲ請求シ豫審判事ハ之ニ應ジテ搜索ヲ爲スコトヲ目的ト爲セリ然ルニ本法ニ於テハ豫審判事ヲ司法警察官ヨリ獨立セシメ豫審ハ純然タル裁判官ヲシテ之ヲ司ラシムルヲ以テ一ノ裁判手續ナリト云ハサル可カラス從テ檢事カ犯罪事實ヲ起訴スルト同時ニ其事件裁判所ニ繫屬シテ檢事ハ之ヲ左右スルコトヲ得サルノ結果ヲ生ス可シ

豫審判事カ事件ヲ受理スル場合ハ之ヲ分テ左ノ四个トス

(第一) 檢事ノ起訴アル場合(刑事訴訟法第六十二條)

(第二) 現行犯ノ場合ニ豫審判事カ調書ヲ作りタル場合(同第四百四十二條)

(第三) 公判ヨリ送附アリタル場合(同第二百四十二條)

(第四) 大審院特別權限ニ屬スル事件ニ付キ大審院長ノ命令アリタル場合(同第三百十四條)

豫審判事カ此等ノ原因ニ依リテ訴訟ヲ受理シタルトキハ其事件ハ之ヲ公判ニ移ス可キ價值アルヤ否ヲ決定セサル可カラス而シテ檢事ハ強制手段ヲ以テ證據ヲ



蒐集スルノ職權ヲ有セサルカ故ニ該證據ノ不充分ナルコトアルハ素ヨリ其所ナ  
リ從テ豫審判事ハ單ニ檢事ノ提出シタル證據ノミニ基キ之ヲ不充分トシテ直チ  
ニ免訴スルコトヲ得ス必スヤ自ラ進ンテ其犯罪事件ニ關スル證據物ヲ蒐集シ犯  
罪ノ有無ヲ決定ス可キモノナリ故ニ豫審判事ノ職務ヲ約言セハ畢竟犯罪ノ證據  
物ヲ蒐集シテ罪ノ有無ヲ決定スルニ在リト云フヲ得ヘシ

### 第一節 證據物ノ蒐集ニ關スル強制方法

#### 第一款 被告人ノ呼出及勾留

被告人ヲ呼出シ及ヒ勾留スル方法ニ三種アリ即チ召喚狀、勾引狀及勾留狀是レナ  
リ抑モ犯罪事實ヲ熟知スルノ地位ニ在ル者ハ犯罪人ヲ以テ第一トス故ニ先ツ其  
犯罪人ヲ出頭セシメテ事實ヲ訊問スルハ證據蒐集上最モ策ノ得タルモノナルヲ  
以テ即チ豫審判事ニ令狀ヲ發スルノ職權ヲ與ヘタルモノナリ左ニ項ヲ分テ以テ  
説明ス可シ

#### 第一項 召喚狀

(第一) 召喚狀ノ性質 召喚狀トハ相當裁判所ヨリ一定ノ人ニ對シ一定ノ時日ニ

證據物ノ  
蒐集ニ關  
スル強制  
方法  
被告人ノ  
呼出及勾  
留

召喚狀

一定ノ場所ニ出頭ス可キコトヲ命令シタル書類ニシテ之ヲ發スルノ權ヲ有ス  
ル者ハ豫審判事若クハ受命、受託判事ナリ故ニ檢事若クハ司法警察官ハ非現行  
犯ニ付キ如何ナル場合ト雖モ召喚狀ヲ發スルコトヲ得ス然レトモ之ヲ以テ檢  
事若クハ司法警察官ハ何人ヲモ呼出スコトヲ得スト速斷ス可カラズ此點ニ付  
テハ尙ホ捜査ノ條下ヲ參照ス可シ

(第二) 召喚狀執行ノ機關 召喚狀ハ裁判所直チニ執達吏ヲシテ送達セシムルモ  
ノトス(執達吏規則第三條第三)歐洲大陸ニ於テハ檢事ヲ以テ裁判執行ノ機關ト  
爲セトモ我構成法ハ檢事ヲ以テ判決執行ノ機關ト爲シ令狀執行ノ機關ト爲サ  
ス故ニ裁判所ハ令狀ノ執行ヲ直チニ執達吏ニ命令スルコトヲ得ルモノト解セ  
サル可カラサルナリ

(第三) 召喚狀ノ効力 召喚狀ヲ受ケタル者ハ必スヤ其命令ニ從ヒ一定ノ時日ニ  
於テ一定ノ場所ニ出頭セサル可カラズ約言スレハ一國ノ裁判權ニ服スル者ハ  
凡テ裁判所ノ召喚ニ應シテ出頭スルノ義務アリ從テ外國ノ主權者、外國公使并  
ニ我邦ニ於テ治外法權ヲ有スル外國人ハ此義務ヲ負フコトナシ此例外ヲ除ケ

刑事訴訟法

訴訟手續 豫審 證據物ノ蒐集ニ關スル強制方法  
被告人ノ呼出及勾留 召喚狀



ハ我邦ニ在ル總テノ人ハ此召喚ニ應セサル可カラサルモノトス  
召喚狀ニ因リ出頭シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問セサル可カラス又遅クトモ  
出頭ノ日ヲ過ク可カラス(刑事訴訟法第六十九條換言セハ召喚狀ハ長クトモ其  
召喚シタル當日間ニ於テノミ効力ヲ有スルモノト云フ可シ)

(第四) 召喚狀ノ行ハル、區域 此事項ハ後ノ勾留狀ト共ニ之ヲ詳説セントス

(第五) 召喚狀執行ノ場所 召喚狀執行ノ場所ハ裁判所ナリ蓋シ裁判官ハ召喚狀  
ヲ以テ人ヲ勾留スルコトヲ得ス從テ之ヲ監獄ニ入ル、ヲ得サルカ故ニ召喚セ  
ラレタル人ノ出ツル所ハ即チ執行ノ場所ナリトス

(第六) 召喚狀ノ形式 召喚狀ノ送達ト被告人ノ出頭トノ間少クトモ三十四時間  
ノ猶豫ナカル可カラス(刑事訴訟法第六十九條第二項)

(第七) 送達ノ方法 此事項ハ之ヲ民事訴訟法ニ讓ル可シ

(第八) 召喚狀ノ書式 召喚狀ノ書式ハ後ニ勾留狀ト共ニ詳説ス可シ

勾引狀

第二項 勾引狀

(第一) 勾引狀ノ性質 勾引狀ノ性質ハ召喚狀ト異ナルコトナシ唯二者ノ異ナル

所ハ召喚狀ハ書面ノミノ呼出ナルモ勾引狀ハ公力ヲ用フル呼出ナルノ點ニ在  
リ抑モ裁判所ノ召喚アルトキハ被告人ハ之ニ應スルノ義務アリ從テ召喚ニ應  
シテ出頭セサルハ此義務ヲ破ルモノナリ故ニ裁判所ハ之ヲ制裁トシテ勾引狀  
ヲ發スルナリ約言スレハ是レ不作爲ノ所爲ニ對スル一ノ制裁ナリトス

(第二) 勾引狀ヲ發スルノ權ヲ有スル人 此權ヲ有スル人ハ豫審判事及受命弁ニ  
受託判事ナリトス現行犯ノ場合ニ於テハ檢事司法警察官モ亦之ヲ發スルコト  
ヲ得(刑事訴訟法第一百四十四條)

(第三) 勾引狀ノ機關 此事項ハ勾留狀ト共ニ之ヲ説述ス可シ

(第四) 勾引狀ヲ發スル條件 勾引狀ヲ發スルニ必要ノ條件ハ左ノ如シ

- 一、 召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出頭セサルトキ(刑事訴訟法第七十一條)
  - 二、 被告人定マリタル住所ヲ有セサルトキ
  - 三、 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アルトキ
  - 四、 被告人未遂罪又ハ強迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アルトキ
- (以上刑事訴訟法第七十二條)



此第二及第四ノ場合ニ勾引狀ヲ發スルハ最初ノ義務ノ違背ニ對スル制裁ナリトハ聊カ解シ難キニ似タレトモ決シテ然ラス裁判所ハ最初ヨリ義務ヲ破リ又ハ破ラントスルノ恐アルモノト看做シタリト解セハ別ニ恠ムニ足ラス

(第五) 勾引狀消滅ノ原因 勾引狀ハ四十八時間内其効力ヲ有ス故ニ此時間ヲ經過スレハ勾引狀ハ當然消滅ニ歸ス可シ又四十八時間前ナルモ取調ヲ終了スルカ又ハ勾留狀ヲ發シタルトキハ勾引狀ハ當然消滅ニ歸スルモノトス

茲ニ四十八時間ト謂フハ何レノ時ヨリ起算ス可キヤ刑事訴訟法第十五條ニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算ストアルニ依リ即時トハ何レノ時ナルヤヲ論究セサル可カラス刑事訴訟法第七十三條第一項ニハ勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル判事ニ被告人ヲ引致ス可シトアリ次ニ同條第二項ニハ勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時間内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スルトキハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シトアリ此二項ニ由リテ觀レハ被告人ヲ裁判官ノ面前ニ引致シタルトキヨリ四十八時ヲ起算ス可キモノナルコトヲ推知シ得ヘシ從テ裁判官ノ面前ニ引致スルマテハ

勾引狀ヲ發シタル時ヨリ幾何ノ時間ヲ費スモ毫モ問フ所ニ非サルナリ

(第六) 勾引狀ノ行ハル可キ區域 是レ亦後ニ勾留狀ト共ニ詳述ス可シ

(第七) 勾引狀執行ノ場所 此點ニ付テハ法律別ニ明文ヲ設ケス法律ニハ唯々令狀ヲ發シタル判事ニ引致ス可シト規定シ如何ナル場所ニ引致ス可キ乎ヲ規定セス然レトモ被告人ヲ二日間無爲ニ裁判所内ニ引致シ置クハ穩當ナリト云フ可カラス實際ノ慣例ニ於テハ監獄則ニ依テ留置場ニ留置シ居レリ余ハ寧ロ法律ヲ以テ此等ノ點ヲ明確ニ規定セシコトヲ望ム

(第八) 勾引狀ノ送達并ニ効力

(第九) 勾引狀ノ書式

以上二個ノ事項モ亦勾留狀ト共ニ之ヲ詳述セントス

### 第三項 勾留狀

刑事訴訟ニ於テハ被告人ノ常ニ出席スルコトノ必要ナル素ヨリ論ナシ然レトモ被告人ハ或ハ逃走セントシ或ハ證據ヲ湮滅セントスルモノナキニ非ス是ニ於テ乎公力ヲ以テ被告人ヲ勾留スルノ必要アリ是レ勾留狀ノ由テ起ル所以ニシテ亦

刑事訴訟法

訴訟手續 卷一 被告ノ呼出及勾留 勾留狀



裁判所ノ強制ト謂フ可シ

(第一) 勾留狀ノ性質 勾留狀ハ訴訟ノ完結ニ至ルマテ被告人ノ自由ヲ剝奪スル裁判所ノ命令ニシテ其目的トスル所ハ被告人ノ逃走及罪證ノ湮滅ヲ防キ訴訟ヲ完全ニ進行セシムルニ在リ而シテ召喚狀ト異ナルハ召喚狀ハ唯ダ一時被告人ヲ裁判所ニ呼出スノ効力アルニ止マレトモ勾留狀ハ訴訟ノ完結スルマテ被告人ヲ留置スルコトヲ得ルノ効力アリ又勾引狀ト異ナルハ勾引狀ハ被告人ヲ判事ノ面前ニ呼出シタル後四十八時間之ヲ留置クコトヲ得ルニ過キサレトモ勾留狀ハ幾日間ト雖モ之ヲ留置スルコトヲ得ルモノニシテ或ハ數年ノ久シキニ亘ルコトアル可シ治罪法ニ於テハ勾留狀ノ外ニ尙ホ收監狀ナルモノアリ前者ハ十日間ノ効力ヲ有スルニ止マリ後者ハ現行法ノ勾留狀ノ如ク幾日間ト雖モ効力ヲ有セシカ此二者ヲ區別スルハ徒ラニ手續ノ煩勞タルニ止マラサルミナラス公判々事ニハ令狀ヲ出タスノ權ナカリシヲ以テ未ダ取調ヲ終ヘサル間ニ疾ク既ニ十日ヲ經過シタルトキハ如何トモ爲ス能ハサルノ不都合アルニ因リ現行法ニ於テハ收監狀ヲ廢シテ勾留狀ヲ存シ之ニ收監狀ト同一ノ効力ヲ

有セシメタリ誠ニ至當ノコト、云フ可シ

(第二) 勾留狀ヲ發スルノ權ヲ有スル人 此權ヲ有スル人ハ豫審判事、受命及受託判事ニシテ檢事ハ現行犯ノ場合ニ限り之ヲ發スルコトヲ得レトモ司法警察官ハ如何ナル場合ニ於テモ之ヲ發スルヲ得ス

(第三) 勾留狀ノ機關 刑事訴訟法第八十三條ハ亦疑問ノ存スル所ナリ本法第十七條ニ曰ク「勾引狀、勾留狀ハ時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查憲兵卒數人ニ分付スルコトアル可シ」ト是ニ由テ之ヲ觀レハ勾留狀ヲ執行スルハ巡查又ハ憲兵卒ナルコト疑ナシ唯疑アルハ何人カ此等ノ巡查憲兵卒ニ令狀ノ執行ヲ命スルヤノ點是レナリ既ニ講述シタルカ如ク獨佛刑事訴訟法ニ於テハ檢事ヲ以テ裁判ノ執行機關ト爲スカ故ニ令狀ヲ執行スルハ亦檢事ノ職務ト爲セリト雖モ我構成法第六條ニ於テハ檢事ヲ以テ判決ヲ執行スルモノト爲シ裁判ヲ執行スルモノト爲サハルヲ以テ決定ノ一タル令狀ハ檢事ノ執行スル所ニ非スト斷言セサル可カラス或ハ構成法ニ判決トアルハ之ヲ裁判ノ意義ニ解ス可シ從テ令狀執行ノ機關ハ檢事ナリト説ク者アリ成程我構成法ノ母法タル獨逸構成法ニハ

刑事訴訟法

訴訟手續 豫審 證據物ノ蒐集ニ關スル強制方法  
被告人ノ呼出及勾留 勾留狀



裁判トアルニハ相違ナシト雖モ現ニ刑事訴訟法ニ於テ裁判ト判決トヲ區別シ各別ノ意義ニ之ヲ使用スル以上ハ如何ニ母法ニ裁判トアレハトテ之ヲ以テ判決トアル我構成法ノ解釋ヲ曲シ可カラサルハ敢テ多言ヲ要スル所ニ非ス唯タ聊カ論者ノ説ヲシテ強カラシムルハ本法第八十三條ノ規定是レナリ同條第二項ニ曰ク「巡查憲兵卒ハ其令狀執行ニ關スル書類ヲ檢事ニ差出ス可シ」ト蓋シ令狀ノ歸リ來ル所ハ其發シタル所ニ外ナラサル可ケレハ此規定ニ依ルトキハ令狀執行ノ機關ハ檢事ナリト言フヲ得ヘキモノ、如シ

(第四) 勾留狀ヲ發スル原因 刑事訴訟法第七十五條ニ勾留狀ハ被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ストアリ又第八十六條ニ豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノニ非スト思料シタルトキハ豫審中何時ニテモ勾留狀ヲ取消ス可シトアリ是ニ由テ之ヲ觀レハ勾留狀ヲ發スルコトヲ得ル原因ハ左ノ如シ

- 一、 禁錮以上ノ刑ニ該ルモノナラサル可カラス
- 二、 一タヒ被告人ヲ訊問シテ禁錮以上ノ刑ニ該ルト思料シタルモノナラサル

可カラス

勾留狀ハ此等ノ原因アルモ必ス之ヲ發セサル可カラサルニ非スシテ其之ヲ發スルト否トハ判事ノ見込如何ニ在リ

刑事訴訟法第七十五條ニ被告人逃亡シタル場合ニ於テハ其訊問ヲ爲サスシテ直チニ勾留狀ヲ發スルコトヲ得トアルヨリ此場合ニハ禁錮以上ノ刑ニ該ラサルモノト雖モ尙ホ勾留狀ヲ發スルコトヲ得ルカ如クナルモ決シテ然ラス禁錮以上ノ刑ニ該ル者ニ非サレハ勾留狀ヲ發スルコトヲ得サルハ第七十五條及第八十六條ニ依テ明白ナリ

(第五) 勾留狀消滅ノ原因 勾留狀消滅ノ原因ハ左ノ如シ

- 一、 被告事件禁錮以下ノ刑ニ該ルモノナルコトヲ發見シタルトキ 此場合ニ於テハ判事ハ勾留狀ヲ取消サ、ル可カラス
- 二、 被告人免訴セラレタルトキ 此場合ニ於テハ勾留狀ハ當然消滅ニ歸スルモノトス

外國法律ニ依レハ被告人逃亡又ハ證據湮滅ノ恐ナキ場合ニ於テモ亦勾留狀ヲ

刑事訴訟法

訴訟手續 豫審 證據物ノ蒐集ニ關スル強制方法  
被告人ノ呼出及勾留 勾留狀



取消ス可キモノトセリ此規定タル實ニ妥當ヲ得タルモノト言フ可シ蓋シ是レ獨リ被告人タルモノ、利益ナルノミナラス國家ノ經濟上ニ於テモ亦利益ナリト云ハサルヲ得ス我刑事訴訟法ハ勾留狀消滅ノ原因ヲ認メスシテ唯タ一時勾留狀ヲ停止スルノ原因ヲ認メタリ即チ保釋及責付是レナリ尙ホ其詳細ハ後款ニ於テ之ヲ講述ス可シ

(第六) 勾留狀ノ行ハル、區域 法律カ既ニ裁判所ノ管轄權ヲ定メタル以上ハ裁判所ノ職權ハ其管轄地内ニ止マリ他ノ管轄地ニ於テ有効ニ之ヲ行フヲ得ス例ヘハ甲裁判所カ乙裁判所ノ管轄地ニ於テ檢證調書又ハ差押調書ヲ調製シタルトキハ其調書ハ無効ノモノナルカ如シ然ラハ勾留狀ハ如何ト云フニ此原則ノ例外トシテ第七十九條ニ豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潜匿シタルコトヲ知リ云々巡查憲兵卒ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得ト規定シ又第三百二十二條ニ裁判所ニ於テ管轄違ヲ認メタルトキハ新タニ勾留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シト規定シタリ左レハ勾留狀ハ之ヲ發シタル裁判所ノ管轄地内ハ勿論日本全國ニ通シテ効力ヲ有スルモノト云ハサル可カラス例ヘハ千葉地方

裁判所ニ於テ判決ヲ受ケタル被告人カ其判決ヲ不當ナリトシテ東京控訴院ニ上訴スルニ方リ千葉ヨリ東京ニ移送スルニハ千葉地方裁判所ノ發シタル勾留狀ヲ以テスト雖モ其勾留狀ハ獨リ千葉地方裁判所ノ管轄内ニ止マラス日本全國ニ涉リテ効力ヲ有スルカ如シ裁判所ノ慣例ニ依レハ東京裁判所ニ勾留スルトキハ單ニ東京ノ監獄ニ勾留スルトノ旨ヲ記載スルヲ以テ直チニ日本全國ニ涉リテ効力アリト爲スハ一見甚タ奇ナルカ如シト雖モ是レ書式ノ不當ナルニ過キス現行ノ訴訟法ヨリ云ヘハ寧ロ一定ノ裁判所ヲ指示セス廣ク裁判所ニ勾留スト記スル方穩當ヲ得タルモノナル可シ  
勾留狀ノ効力ノ全國ニ及フコト以上講述スル所ノ如シ此點ニ付テハ勾引狀及召喚狀共ニ異ナルコトナシ斯ク勾留狀ハ全國ニ通シテ効力ヲ及ホスモノナルモ管轄地外ニ於テハ巡查憲兵卒タル者直チニ之ヲ執行スルコトヲ得スシテ先ツ被告人所在地ノ豫審判事、檢事又ハ司法警察官ニ其令狀ヲ示サ、ル可カラス(刑事訴訟法第七十九條第二項)此點ニ付テハ佛國刑事訴訟法ハ大ニ參照ノ資ト爲スニ足ルモノアリ即チ同國刑事訴訟法第九十八條第二項ニ依レハ豫審判事



ノ管轄地外ニ於テ令狀ヲ執行スル吏員ハ被告人ヲ逮捕シタル上其地ノ治安判  
 事若クハ治安判事補又此等ノ官吏アラサルトキハ邑長副邑長若クハ警部ノ前  
 ニ被告人ヲ連レ行キ令狀ニ認印ヲ受ク可キモノト規定セリ之ニ反シテ我現行  
 法ニ於テハ前述ノ如ク執行前ニ之ヲ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ示サ、ル  
 可カラズ是レ或ハ處置緩急ヲ誤ルノ虞ナキ歟惟フニ封建制度ノ盛ナルニ方リ  
 テヤ非常ニ管轄權ヲ重シ他所ノ管轄事件ニ付テハ總テ之ヲ無効トシ又被告  
 人ハ其裁判ヲ拒ムノ權利ヲ有シタリト雖モ往來交通ノ便次第ニ開ケ且ツ中央  
 集權ノ世ニ在リテハ却テ管轄權ヲ重ニスルノ不便ヲ感スルコト太甚シテ遂ニ  
 全國一般ニ其効力ヲ有スルモノト爲スニ至リタレトモ而カモ又裁判管轄區域  
 ナ定メタル以上ハ多少ノ制限ヲ設ケサル可カラサルカ故ニ遂ニ其令狀ノ形式  
 如何等ヲ檢認センカ爲メ其執行以前ニ之ヲ示ス可キコトヲ規定シタルハ古來  
 ノ習慣ニ出テタルモノナル可シ被告人逃亡シ其所在分明ナラサルトキハ勾留  
 狀モ亦其効ヲ奏スルコトナシ是ニ於テ乎逮捕狀ノ必要アリ刑事訴訟法第八十  
 條ハ逮捕狀ノコトヲ規定セリ元來逮捕狀ハ判決ヲ受ケタル被告人ニ對シテ發

スルモノナレトモ此場合ニ於テハ其性質勾留狀ト異ナラスシテ檢事長之ヲ發  
 スルノ權ヲ有シ其効力ハ勾留狀ト同シク全國ニ及フモノナリ若シ被告人外國  
 ニ逃走シタルトキハ最早之ヲ追捕スルヲ得サルヲ以テ唯タ罪人引渡條約ニ依  
 リテ之カ引渡ヲ要求スルコトヲ得ルノミ然レトモ現今我邦ト此條約ヲ取結ヒ  
 タルハ單ニ北米合衆國ノ一アルノミ

(第七) 勾留狀ノ送達及効力 勾留狀ハ如何ナル人如何ナル場所如何ナル時ヲ問  
 ハス之ヲ執行スルコトヲ得ヘシ即チ被告人逃レテ家宅内ニ入りタルトキハ執  
 行官ハ家宅内ニ侵入シテ之ヲ執行スルコトヲ得若シ被告人暴行ヲ以テ抵抗シ  
 タルトキハ執行官モ亦公力ヲ以テ之ヲ取押ユルコトヲ得ルモノト然レトモ  
 此事ニ付テハ左ノ制限アリ

(一) 時ニ關スル制限 時ニ關スル制限ハ掲ケテ第七十八條第三項ニ在リ即チ  
 日出前日没後ハ之ヲ爲スコトヲ得ス但旅店割烹店其他夜間ト雖モ衆人ノ出  
 入スル場所ニ於テハ其公開時間内ニ限り之ヲ爲スコトヲ得トアル是ナリ然  
 ルニ茲ニ不都合ノ結果ヲ來タスハ例ヘハ往來ニ於テ被告人ニ對シ令狀ヲ執

刑事訴訟法 訴訟手續 證據證據物ノ蒐集ニ關スル強制方法  
 被告人ノ呼出及勾留 勾留狀



行セントスルニ被告人逃レテ第三者ノ家宅内又ハ自己ノ家宅内ニ隠レタルトキハ如何第三者ノ家宅内ニ逃レタルトキハ其承諾アレハ夜間ト雖モ尙ホ之ヲ執行シ得ヘシト雖モ自己ノ家宅内ニ逃レタルトキハ夜間ニ於テハ到底令狀ヲ執行スルニ由ナカル可シ元來日出前日没後ハ家宅搜索又ハ令狀ノ執行ヲ爲スコトヲ得スト定メタルハ勿論憲法ノ保障スル所ノ人身ノ自由又ハ家宅ノ安全ヲ重シタルニ由ルト雖モ憲法ニハ法律ニ依ルノ外云々ノ一句アルニ因リ法律ヲ以テスルトキハ能ク右ノ如キ不都合ヲ免ル、コトヲ得ヘシ被告人逃レテ自己ノ家宅内ニ入りタル後ハ最早執行官ハ空シク手ヲ束ネテ天明ヲ俟タサル可カラサルカ如キハ最モ改正ヲ要ス可キ所ナラント信ス唯タ此例外トモ看ル可キハ刑法附則第二十八條ナリ即チ同條ニ曰ク監視ノ期限間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シト故ニ此場合ニ於テハ夜中ニ拘ハラス尙ホ令狀ヲ執行シ得ヘシト雖モ其他ノ場合ニ在リテハ夜中ハ之ヲ執行スルコトヲ得サルナリ外國法律ニ依レハ被告人自己ノ家宅内ニ逃匿シタルトキハ夜中ト雖モ令狀ヲ執行シ得ルモノトセリ

(二) 場所ニ關スル制限 場所ニ關スル制限ニ付テハ我刑事訴訟法中一モ明文アルコトナシ然レトモ此制限ハ通常裁判所ノ職權ニ屬セサル場所ノ點ニ於テ看ルコトヲ得ヘシ是レ構成法ニ通常裁判所ナル語アルニ基因スルモノナリ故ニ夫ノ宮城外國公使館軍艦及兵營ノ如キハ通常裁判所ノ職權ニ屬セサルモノナレハ從テ此等ノ場所ニ於テハ令狀ヲ執行スルコトヲ得サル可シ

(三) 人ニ關スル制限 通常裁判所ノ管轄ニ屬セサル者即チ内外國ノ主權者外國公使日本ニ治外法權ヲ有スル外國人及軍人ハ人ニ關スル制限ヲ形成スルモノトス

刑事訴訟法第八十一條ヲ見ルニ豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人軍屬ニ對シテ令狀ヲ發シタルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ令狀ヲ示シ其長官又ハ隊長ハ成ル可ク本人ヲシテ其令狀ニ應セシム可シトセリ然レトモ余ノ見ル所ヲ以テスレハ本條ノ如キ場合ハ實際ニ於テ一タヒモ遭遇スルコトナカル可シ何トナレハ軍人罪ヲ犯シタルトキハ直チニ之ヲ軍法會議ニ送付シ又軍人カ通常人ト共ニ罪ヲ犯シタルトキハ二者ヲ分離シテ軍人ハ軍法



會議ニ移送スレハナリ

次ニ帝國議會開會中ハ議員ニ對シテ令狀ヲ執行スルコトヲ得ス是レ憲法第五十三條ノ規定スル所ナリ但シ現行犯ノ場合ハ此限ニ在ラストス

(四) 形式上ノ制限 令狀ヲ執行スルニハ其地ノ市町村長ノ立會ナカル可カラズ若シ市町村長ニシテ差支アルトキハ隣佑二名以上ノ立會ナカル可カラサルナリ(刑事訴訟法第七十八條第一項)

以上ノ四制限ヲ除クノ外令狀ハ如何ナル人如何ナル場所如何ナル時タルヲ問ハズ之ヲ執行スルコトヲ得ヘシ

(第八) 勾留狀執行ノ場所 勾留狀ノ執行ニ依リ被告人ヲ引致シタルトキハ之ヲ其管轄地ノ監獄署ニ勾留ス可キモノトス然レトモ若シ遠方ニ於テ之ヲ執行シ直チニ其管轄地ノ監獄署ニ引致スルコト能ハサルトキハ其沿道ノ最近監獄署ニ引致ス可シ(刑事訴訟法第八十二條)而シテ其被告人ニ關スル費用ハ凡テ該監獄署ノ負擔ニ歸ス

抑モ被告人カ勾留狀ノ執行ニ因リ監獄署ニ在ル間ハ是レ所謂未決勾留ナルモ

ノコシテ唯々其逃亡及罪證湮滅ヲ防クカ爲メ己ムヲ得サルニ出テタル手段ニ過キサレハ苟モ其必要以外ニ於テハ十分ニ被告人ヲ保護セサル可カラズ歐洲ニ於テハ被告人未決拘留中ハ其逃亡及罪證湮滅ヲ防クノ必要以外ニ於テハ或ハ著述ヲ爲スコトヲ得ヘク或ハ自己ノ欲スル衣食ヲ爲シ得ヘク或ハ他人ト應接ヲ爲スコトヲ得ルナリ然レトモ我邦ニ於テハ監獄則上斯ノ如ク寛大ナラサルカ如シ是レ或ハ被告人ト外人トノ通謀ヲ避ケ罪證湮滅又ハ逃走ヲ防止セントスルニ在レトモ其必要以内ニ於テハ大ニ被告人ヲ保護セサル可カラサルハ何人モ異議ナカル可シ

(第九) 勾留狀ノ書式 令狀ノ書式ハ第七十六條ノ規定スル所ナリ即チ令狀ニハ被告事件被告人ノ氏名職業住所又若シ其氏名分明ナラサルトキハ容貌體格等凡テ被告人ヲ判知シ得ヘキ様記載セサル可カラス(但シ召喚狀ニハ之ヲ要セス)其他令狀ヲ發シタル年月日時ヲ記載シ判事及裁判所書記署名捺印セサル可カラズ蓋シ令狀ノ効力如何ハ其事件ノ眞實如何ニ在ラスシテ其方式ノ合法ナルヤ否ヤニ在リテ存ス故ニ以上ノ條件ニ違背シタルトキハ令狀タルノ効力ナシ



茲ニ一ノ問題アリ令狀ハ電報ニテ之ヲ通知シ以テ先方ノ警察署ニ依頼シ之ヲ執行スルコトヲ得ルヤ否ヤノ問題はレナリ第一説ニ曰ク此場合ハ令狀ヲ有スル人カ自己ノ職權ヲ他人ニ委任シタルモノナリ從テ其委任ヲ受ケタル人ハ正當ナル人ヨリ委任セラレタルモノナレハ令狀ヲ執行スルニ於テ何等ノ支障アルコトナシト第二説ニ曰ク人ヲ逮捕スルニハ裁判官ニ非サレハ之ヲ爲スコト能ハス若シ裁判官ノ面前ニ在ラスシテ人ヲ逮捕セントセハ必スヤ裁判官ノ認證シタル書面ナカル可カラス今夫レ電報ニ依ルトキハ令狀ノ形式ハ之ヲ備フルコトヲ得ヘシト雖モ判事裁判所書記ノ署名捺印ハ到底之ヲ得ルコト能ハス從テ實際ニハ不便ナリト雖モ電報ニ依リテハ令狀ヲ執行スルコトヲ得スト爲サ、ル可カラスト余ハ第二説ヲ可トスルモノナリ惟フニ今日ノ如ク海ニ汽船アリ陸ニ汽車アリ交通ノ便利ナル電報ニ因ル執行ヲ以テ無効ト爲スハ頗ル社會ノ進歩ニ伴ハサルカ如シト雖モ令狀ノ効力ハ令狀ノ形式如何ニ在レハ第二説ヲ可トスルハ誠ニ止ムヲ得サルコト、言フ可シ

第二款 保釋

保釋

第六

一タヒ勾留狀ヲ發シテ被告人ヲ勾留シタル以上ハ事件免訴トナルカ若クハ禁錮以下ノ刑ニ該ルコトヲ發見スルニ非サレハ判事ハ勾留狀ヲ取消スコトナク何日間ニテモ被告人ヲ勾留スルコトヲ得ヘシ然レトモ職テ法制上ヨリ觀察シ來レハ未決ノ囚徒ヲ永シ勾留スルハ獨リ被告人ノ不利益ナルノミナラス國家ノ經濟上亦策ノ得タルモノニ非ス是ヲ以テ勾留外ノ方法ニ依リ被告人ノ逃走ヲ防止シ得ヘクソハ之ヲ自由ニ爲シ置クヲ以テ妥當ト爲サ、ル可カラス是レ保釋制度ノ由テ起リタル所以ナリ即チ保釋トハ勾留狀ノ執行ヲ一時中止スル所ノ處分ヲ云フ

(第一) 保釋ノ條件 裁判所カ保釋ヲ許可スルニハ左ノ條件ヲ具備セサル可カラ

ス(刑事訴訟法第五十條)

- 一、 保釋ノ請求者ハ未決勾留中ノ被告人ナラサル可カラス 勾引狀ヲ受ケタル被告人ニ保釋ナキコト并ニ裁判確定ノ後ニ保釋ナキコト明カナリ
- 二、 保釋ノ請求ナカル可カラス 此請求ハ被告人自身ニ爲スコキモノナリト雖モ被告人無能力ナルトキハ法律上代理人ヨリ之ヲ爲スコトヲ得ルモノトス此條件ニ由リテ看レハ保釋ハ裁判所ノ職權ニ屬セス被告人ノ請求ヲ俟テ

刑事訴訟法

訴訟手續

條

證據物ノ蒐集ニ關スル強制方法

保釋



始メテ許可スルモノナルコト明カナリ

三、被告人ヨリ何時ニテモ裁判所ノ呼出ニ應シテ出頭ス可キノ證書ヲ差出シ且ツ保證金ヲ出サ、ル可カラス 保證金ハ通常被告人又ハ法律上代理人ヨリ差出ス所ノ金錢若クハ有價證券ナル可シト雖モ又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且ツ十分ナル資力アル者ヨリ差出ス所ノ金額ニ充ツ可キ保證書即チ第三者ノ保證書ニテモ可ナリ(刑事訴訟法第五十二條)而シテ右保證金額ハ豫審判事ノ定ム可キモノトス即チ被告人ノ地位、名望及資力ノ有無ニ依リテ差異アル可ケレハ豫メ法律ヲ以テ一定ノ金額ヲ規定スルコトナシ

以上ノ三條件ヲ具備シタルトキハ豫審判事ハ檢事ノ意見ヲ聽カサル可カラス然レトモ豫審判事ハ檢事ノ意見ニ拘束セラル、コトナク之ヲ許スト否トハ一ニ豫審判事ノ權内ニ在リテ存セリ

(第二) 保釋取消ノ原因 保釋取消ノ原因ハ左ノ如シ

一、被告事件重罪ナリト思料シタルトキ 即チ重罪公判ニ付スルノ決定ヲ與ヘタルトキハ保釋ヲ取消ス可シ(刑事訴訟法第六十八條)

二、被告事件禁錮以下ノ刑ニ該ル可キモノト思料シタルトキ 第七十五條ノ裏面的解釋ニ依リ禁錮以下ノ刑ニ該ル可キ者ハ最初ヨリ勾留セラル可キ必要ナキモノナレハ直チニ保釋ヲ取消シ被告人ヲ釋放ス可キハ當然ナリト云フ可シ(刑事訴訟法第六十六條)

三、免訴放免ノ決定ヲ爲ストキ

四、被告人故ナク裁判所ノ呼出ニ應セサルトキ 是レ保釋ヲ許可シタル條件ノ一ヲ履行セサルモノナレハ之ヲ取消スコト太甚タ至當ナリ然レトモ裁判所ハ被告人ヲ呼出スニ二十四時間ノ猶豫ヲ與ヘサル可カラス即チ二十四時間ノ猶豫ヲ與フルモ尙ホ被告人出頭セサルトキハ豫審判事ハ檢事ノ意見ヲ聽キ保證金ノ全部又ハ一部ヲ沒收シ直チニ保釋ノ言渡ヲ取消ス可キモノトス但保證金ヲ沒收シタル後免訴ノ言渡ヲ爲シ若クハ違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ前キニ沒收シタル金額ヲ還付セサル可カラス是レ蓋シ被告人ハ元來勾留セラル可キ條件ヲ有セサルカ爲メナラン(刑事訴訟法第五十四條、第五十五條及



第一百五十七條

五、裁判所ニ於テ必要ト認メタルトキ 是レ舊法ニナキ所ニシテ現行法カ始メテ規定シタル條項ナリ被告人裁判所ノ呼出ニ應セサルトキハ前述セル法文ニ依リテ保釋ヲ取消スコトヲ得ヘシト雖モ罪證ヲ湮滅セント圖リ又ハ犯罪ヲ行ハント企テタル場合ニ於テハ舊法ノ如クセハ勾留スルコト能ハサルヨリ新法ハ此原因ヲ法律ニ規定セリ是レ誠ニ至當ノ規定ナリト云フ可シ(刑事訴訟法第百五十六條第二項)

(第三) 保釋ノ効果 保釋ハ未決勾留中ノ被告人ニ對シ一時其拘束ヲ中止スルノ効力アリ是故ニ保釋ヲ受ケタル被告人ハ裁判所ノ呼出ニ應シテ出頭ス可キ義務アルノ外他ノ自由ナル者ト異ナル所ナシト云ハサル可カラズ然ルニ茲ニ現今ノ慣例ニ於テ大ニ疑義ヲ懷カサル可カラサルモノアリ开ハ他ナラス明治十六年司法省達丙第三十號是レナリ該達ニ依レハ被告人ハ假住所ヲ定メ敢テ裁判所ノ管轄以外ニ出ツルコトヲ許サス又公衆ノ場所若クハ公開ノ場所ニ臨ムコトヲ許サス若シ此等ノ成規ニ背反シタルトキハ直チニ保釋ヲ取消ス可キモ

ノトセリ此達ハ治罪法ノ時代ニ發布セラレタルモノナルニ拘ハラズ現ニ我裁判所ニ於テ往々之ヲ實行スル所アリ是ヲ以テ該達ノ効力ニ付キ二説ヲ生セリ一ハ曰ク該達タル今日ニ於テ効力アルコトナシ即チ治罪法ト共ニ消滅ニ歸シタルモノナリト他ハ曰ク否刑事訴訟法ハ治罪法ノ相續者ナリ故ニ好シヤ治罪法時代ノ達ナリト雖モ尙ホ刑事訴訟法ト牴觸スルニ非サル以上ハ今日ニ於テモ尙ホ有効ナリト今積極消極何レヲ以テ正鵠ヲ得タリト爲ス可キ乎惟フニ治罪法ニ於テハ現行刑事訴訟法第百五十六條第二項ニ該當スルノ規定ナシ從テ被告人カ故ナク裁判所ノ呼出ニ應セサルトキノ外保釋ヲ取消スコトヲ得サリシナリ是レ當時ニ於テ此達ノ必要ヲ感シタル所以ナラン然ルニ現行刑事訴訟法ハ第百五十六條第二項ヲ設ケ而カモ往年ノ達ヨリハ概括的ノ規定ヲ設ケタリ是故ニ往年ノ達ハ今日ニ於テ必要ナキノミナラス却テ現行ノ他ノ法律ト牴觸スルコトナキ乎ノ疑アリ例ヘハ保釋中議會ニ臨ミ又届出ヲ爲サスシテ旅行ヲ爲ストキハ直チニ保釋取消ノ原因ト爲スカ如キ是レナリ左レハ該達ハ刑事訴訟法ノ發布ト共ニ廢滅セリト見ル方穩當ナラン然ルニ或人ハ之ヲ辯護シテ



曰ク是レ裁判所ト被告人トノ契約ニ出ツ契約ハ能ク吾人ノ自由ヲ伸縮スルコトヲ得ヘシト左レトモ訴訟上斯ル契約ヲ爲スノ權ナキコト疑フ可カラサレハ余ハ無効説ニ賛同セントス

責付

第三款 責付

責付ハ殆ント保釋ト其性質ナ同ウスルモノニシテ勾留狀ノ効力ヲ一時停止セシムルモノナリ然レトモ保釋ヲ得ルニハ保證金ヲ出サ、ル可カラサルヲ以テ此恩惠ニ浴スル者ハ唯々富有者ノ一アルノミ貧困者ニ至リテハ保釋ス可キノ情狀存スト雖モ保證金ナキカ爲メ空シク未決監中ニ呻吟セサルヲ得ス是レ豈ニ公平ノ法制ナランヤ是レ責付ノ必要ヲ感スル所以ナリ蓋シ幕府以來ノ刑制ニシテ現今ニ存續スルモノハ唯々此責付ノ一アルノミ即チ責付ハ往時ノ五人組預ケ又ハ村預ノ制ノ進化シタルモノナリ明治十五年中某縣ノ伺ニ責付セラレタル被告人ノ賄料ハ何人カ支辨ス可キモノナルヤ官廳ナリヤ將タ被告人ナリヤトアルカ如キ亦以テ此制度ノ起源ヲ追想スルニ餘リアリ穢テ之ヲ外國ノ例ニ徵スルニ何レモ之ニ類似シタル制度アルヲ見ス唯々英國ノ「シユニアチー」ナル制度カ之ト類似ス

ルノミ然レトモ「シユニアチー」ハ犯罪ヲ爲シ又ハ爲サントシタル人ニ與フルモノニシテ外形上稍我責付ニ類似セリト雖モ又全然同一ノモノト云フコト能ハサルナリ

(第一) 責付ノ條件 裁判所カ責付ヲ許可スルニハ左ノ條件ヲ必要トス

- 一、 請求者ハ未決勾留中ノ被告人ナラサル可カラス
  - 二、 被告人ノ請求又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ爲スコトヲ得 後者ハ保釋ト異ナル所ナリ(刑事訴訟法第百五十九條第一項)
  - 三、 親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ被告人ヲ出頭セシム可キ證書ヲ差出サ、ル可カラス(刑事訴訟法第百五十九條第二項)
- 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定スルモノトス
- (第二) 責付取消ノ原因 責付取消ノ原因ハ保釋取消ノ原因ト異ナルコトナシ又責付ニ付テモ司法省ノ達トノ關係アレトモ保釋ニ於ケルト同一ノ結果ニ歸セサルヲ得サルヲ以テ茲ニ之ヲ省畧ス可シ

第四款 密室監禁

密室監禁

刑事訴訟法 訴訟手續 豫審 證據物ノ蒐集ニ關スル強制方法 密室監禁



密室監禁モ亦豫審ニ於ケル強制手段ノ一ナリ而シテ前ニ述ヘタル令狀ト異ナル所ハ前者ハ證據ヲ發見スルカ爲メ犯罪事件ノ關係人ヲ裁判所ニ引致シ若クハ既ニ發見シタル證據物ヲ裁判所ニ保全スルノ強制方法ナルニ後者ハ訴訟事件ノ取調上眞實ノ申述ヲ得ンカ爲メ既ニ裁判所ニ在ル被告人ニ對シテ爲ス可キ強制方法ナリ

(第一) 密室監禁ヲ爲ス條件 密室監禁ヲ爲スニ必要ナル條件ハ左ノ如シ

一、 勾留狀ヲ受ケタル被告人ナラサル可カラス

二、 刑事ノ命令ニ從ヒ自己ニ不利益ナル證據ヲ申立テサルトキナラサル可カラス 是レ英國法ト大ニ異ナル所ナリ英國法ニ於テハ當ニ自己ニ不利益ナル證據ヲ提出スルノ義務ナキノミナラス又之ヲ拒絕スルヲ以テ被告人ノ權利ナリトセリ然レトモ我刑事訴訟法ニ於テハ自己ニ不利益ナル證據ヲ提出スルコトヲ以テ被告人ノ義務ト認メタリ從テ被告人カ若シ此義務ヲ破リタルトキハ強制手段ヲ以テ之ヲ盡サシメサル可カラス是レ法律カ本條件ノ下ニ於テ密室監禁ヲ許シタル所以ナリ

以上二個ノ條件アルトキハ豫審判事ハ檢事ノ請求又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ密室ニ監禁スルコトヲ得ヘシ(刑事訴訟法第八十七條)

(第二) 密室監禁消滅ノ原因 密室監禁消滅ノ原因ヲ舉クレハ即チ左ノ如シ

一、 勾留狀消滅シタルトキ 密室監禁ハ勾留狀ヲ受ケタル者ニ對シテノミ之ヲ爲スコトヲ得故ニ若シ勾留狀ニシテ消滅シタルトキハ獨リ密室監禁ノミ存在ス可カラサルコト論ヲ俟タス而シテ勾留狀消滅ノ原因ニ付テハ前ニ勾留狀ノ部ニ於テ論述シタルヲ以テ茲ニ復タ之ヲ贅セス

二、 豫審判事ノ命令ニ從ヒ自己ニ不利益ナル申立ヲ爲シタルトキ 被告人カ豫審判事ノ命令ニ服從スルニ於テハ最早密室監禁ノ目的ヲ達シタルモノナルヲ以テ其直チニ消滅スルコト復タ喋々ヲ要セスシテ明カナリ

三、 期間ノ經過シタルトキ 本法第八十九條第一項ニ依レハ「密室監禁ハ十日ヲ經過ス可カラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルコトヲ得」ト規定セルカ故ニ若シ監禁ノ當時ヨリ起算シテ十日ヲ經過スルモ尙ホ其言渡ヲ更改セザルトキハ密室監禁ハ當然消滅ニ歸ス可キモノトス



(第三) 密室監禁ノ効力 密室監禁ノ効力ハ左ノ如シ  
 密室監禁ハ普通ノ未決勾留ト大ニ其趣チ異ニセルモノナリ即チ本法第八十八條ニ依レハ被告人ハ一名毎ニ別房ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サ、ルモノト爲セリ然レトモ通常ノ未決勾留中ノ被告人ニ付テハ斯ル嚴酷ノ束縛アルコトナシ(刑事訴訟法第八十五條)斯ノ如ク一人チ一室ニ密閉スルトキハ幽閉遣ルニ所ナク苦悶堪フ可カラサルモノアルハ普通ノ人情ナルカ故ニ或ハ密室監禁ヲ以テ拷問ノ餘習ヲ存スルモノナリト非難スル學者尠ナカラス然レトモ被告人チ一人毎ニ別房ニ置クヲ以テ直チニ拷問ナリト論スルハ妥當ヲ得タルモノニ非ス蓋シ未決勾留中ノ被告人チ別房ニ留置スルノ必要ハ現今ノ學說ニ於テ一般ニ是認セラル、ノミナラス我國ノ如キ經費ノ不足ヨリ未決囚ハ三々五々之チ一房ニ雜居セシムルノ制ヲ採ルハ實ニ止ムヲ得サレトモ米國ノ如キハ既ニ一房一人ノ制ヲ實行セリ是ニ由テ之ヲ觀レハ密室監禁ヲ拷問ト爲スハ復タ以テ其誤想ナルコトヲ知ルニ足ル可キナリ

豫審判事カ被告人チ密室ニ監禁シタルトキハ一期間内ニ少クトモ二回其被告人チ訊問セサル可カラス而シテ若シ此監禁ノ言渡ヲ更改シタルトキハ裁判所長ニ其旨ヲ報告セサル可カラサルナリ(刑事訴訟法第八十九條)

第五款 物件差押、檢證及搜索

余ハ前款ニ於テ被告人ニ對スル強制方法ヲ説明シタルヲ以テ本款ニ於テハ更ニ進ンテ證據物ニ對スル強制方法ヲ講述セントス  
 前屢々講述シタルカ如ク刑事ノ訴訟ハ實體上ノ眞實ヲ求ムルヲ以テ趣旨ト爲スカ故ニ裁判所ハ自ラ進ンテ被告人カ犯罪ノ用ニ供シタル物件又ハ犯罪ニ因リテ得タル物件ヲ蒐集シ之ヲ調査スルノ權利及義務アリ是ニ於テ乎物件差押、檢證及搜索ノ手續ヲ爲スノ必要ヲ生ス而シテ此等ノ手續ハ裁判所カ被告人チ呼出スノ趣旨ト毫モ異ル所ナク唯タ一ハ物件ニ付キ一ハ言語ニ付テ之ヲ取調フルノ差アルノミ今ヤ此三者ハ其相互ノ間ニ果シテ如何ナル關係ヲ有スル乎ト云フニ第一ニ物件ノ差押ハ證據上必要ナル物件アルトキハ裁判所ハ宛モ被告人チ引致スルカ如ク其物件ヲ差押ヘテ之ヲ保存スルノ方法ヲ云ヒ第二ニ檢證ハ證據上必要ノ



物件アルモ之ヲ裁判所ニ徵收スルコト能ハサル場合ニ於テ裁判所自ラ其物件ノ所在地ニ臨檢シ之カ調書ヲ作成シテ保存スル方法ヲ云フ而シテ此檢證ハ證據調ノ一手段ナリトノ説ハ現今多數學者ノ唱道スル所ナリ事ハ尙ホ後段ニ至リテ之ヲ説明ス可シ第三ニ搜索ハ物件差押及檢證ノ手段タルニ過キスシテ其間主從ノ關係ヲ有スルモノトス以下項ヲ分テ之ヲ説明ス可シ

物件差押

第一項 物件差押

物件差押ハ證據上必要ナルカ又ハ沒收ス可キ物件ヲ集取スル強制手段ノ一ナリ抑モ刑事上ノ證據ト爲ル可キ物件ハ特別ノ場合ヲ除キテハ何人モ之ヲ裁判所ニ差出スノ義務ヲ有シ裁判所ハ又之ヲ差押フルノ權利ヲ有ス是故ニ若シ此義務ニ違背セサルニ於テハ決シテ差押ナル強制處分ノ生ス可キ理由ナシ然ルニ現今此差押ナル文字ノ用法一定セス任意ニ裁判所ニ提出シタル場合及遺失シタル物件或ハ所有主ナキ物件ヲ收取スル場合ヲモ尙ホ差押ト稱スルコトアリ若シ夫レ差押ナル文字ハ斯ノ如キ場合ニモ之ヲ用フルコトヲ得ルトセハ結局第百十三條第百十四條ノ場合ニ於ケル差押ヲ爲シ得サル物件ヲ任意ニ提出シタル場合ニ於テ

モ亦之ヲ差押ト云ハサルヲ得ス是レ豈ニ解釋ノ當ヲ得タルモノト云フコトヲ得ンヤ蓋シ物件差押ノ手續ハ前ニ述ヘタルカ如ク所持者カ事實上又ハ推測上其物ノ提出ヲ拒絕スル場合ニ於テ之ヲ許ス可キモノニシテ所有者カ任意ニ其物件ヲ裁判所ニ提出シ若クハ司法警察官カ往來ニテ危險物ヲ拾ヒ上ケ又ハ犯所ニ於テ兇器ヲ取上ルルカ如キ場合ニ於テハ強制ノ方法タル差押ノ手續ヲ行フ可キモノニ非スシテ此等ノ場合ニ於テハ法律上別ニ其手續ヲ規定セサル可カラズ然ルニ本法上此規定ノ欠缺セル結果差押ノ意義ヲ擴張シテ斯ノ如キ場合ニ適用セントスルハ實ニ不當ノ事ト云ハサルヲ得ス余ハ寧ロ此等ノ場合ニ於テハ別ニ之ヲ押收ト稱セントス以下物件差押ニ付キ詳細ニ分説スル所アル可シ

(第一) 物件ノ差押ヲ爲シ得ル場合 物件差押ハ裁判所カ證據上必要ナリト認ムル物ニ付テハ如何ナル物如何ナル人又ハ如何ナル場所及時ニ於テモ之ヲ執行スルコトヲ得ヘシ然レトモ既ニ勾留狀ニ付テ論述シタルカ如ク我裁判權ニ服セサル人ノ所有スル物又ハ其住居及通常裁判所ノ管轄ニ屬セサル軍艦若クハ兵營内ニ於テ差押ヲ爲スコトヲ得サル外特ニ此差押ニ關シテ制限トナルモノ

刑事訴訟法

訴訟手續 證據物ノ蒐集ニ關スル強制方法  
物件差押、檢證及搜索 物件差押



ハ即チ左ノ如シ

一、人ニ付テノ制限 刑事訴訟法第百十四條ヲ見ルニ證言ヲ拒ムコトヲ得ル者ノ所持スル物件ニシテ其默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルモノハ其承諾アルニ非サレハ之ヲ差押へ及ヒ開披スルコトヲ得、スト規定シ其第百二十五條ニ於テ證言ヲ拒ムコトヲ得ル者ヲ規定セリ即チ官吏、公吏又ハ官吏、公吏ヲリシ者及醫師、藥商、穩婆、辯護士、辯護人、公證人、神職、僧侶是レナリ此等ノ者ハ或一定ノ事項ニ付キ秘密ヲ守ルノ義務アルヲ以テ其事情ニ關スル物件ハ之ヲ裁判所ニ提出スルノ義務ナシ

二、物及場所ニ付テノ制限 差押フルコトヲ得サル物ハ唯ターアルノミ刑事訴訟法第百十三條ノ規定スル所即チ是レナリ同條ニ曰ク豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ驛遞、電信、鐵道ノ官署、諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審事件ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類、電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シト故ニ被告人又ハ豫審事件ニ關係アル者ヨリ發シ又ハ之ニ宛テ發シタル書類、電報

若クハ或物件ハ強テ之ヲ差押ユルコトヲ得ス從テ此等ノ官署又ハ會社カ任意ニ其物件ヲ差出ストキハ格別若シ其交付ヲ拒ムトキハ裁判所ハ強テ之ヲ差押フルコトヲ得サルナリ

三、時ニ付テノ制限 本法ハ物件ノ搜索ニ付テハ特ニ時ノ制限ヲ規定シタレトモ(刑事訴訟法第百四條)差押ニ關シテハ何等ノ制限ヲ設クルコトナシ故ニ搜索ヲ行ハスシテ差押ヲ爲スコトヲ得ル場合ハ日出前ト日没後トヲ論スルノ要ナキモノ、如シ從テ實際上ニ於テモ敢テ時ノ如何ヲ問ハサレトモ余ハ既ニ搜索ニ付テ時ノ制限ヲ設ケタル以上ハ之ト同一ノ趣旨ニ依リ差押ニ付テモ同シク時ノ制限ヲ守ラサル可カラサルモノト信ス

(第二) 差押ノ解除ヲ爲シ得ル場合 物件差押ノ目的ハ訴訟及ヒ裁判ノ執行ニ必要ナル證據ヲ蒐集スルニ在リ故ニ若シ裁判確定シ或ハ豫審免訴トナルトキハ其訴訟茲ニ完結スルモノニシテ證據物件ノ差押ハ全ク其用ヲ了リタルモノナレハ既ニ爲シタル差押ハ當然解除セラル可キモノトス  
訴訟中裁判所ニ於テ其差押物件ヲ不必要トスルトキハ如何ニ處分ス可キ乎此



點ニ付テハ本法中何等ノ規定スル所ナシ故ニ其結果トシテ審理終結ノ場合ノ外物件ノ持主カ重大ナル迷惑ヲ被フルニ拘ハラス尙ホ裁判所ハ此等ノ不必要ナル物件ヲ留置セサル可カラス然レトモ是レ法文ノ不備ニシテ又止ムヲ得サルナリ故ニ余ハ立法者ニ於テ速ニ此規定ヲ修正シ斯ル場合ニ於テモ亦差押ヲ解除シ得ルノ規定ヲ設ケラレシコトヲ切望ス

(第三) 差押ノ効力 證據上必要ナル物件ニシテ差押ヘラレタルトキハ如何ナル効力ヲ生スルヤト云フニ唯々其物件ノ占有ヲ所持主ヨリ裁判所ニ轉移スルニ止マリ其所有權ニ至リテハ毫モ變更スルコトナシ從テ所有主ハ其物件ヲ自由ニ他人ニ賣買贈與スルノ權アリ尤モ犯罪ニ因テ得タル物件ニシテ且ツ被告ノ所有ニ係ルトキハ裁判所ハ特ニ其讓渡ヲ差止ムルコトヲ得蓋シ此等ノ物件ハ刑法第四十四條ニ依リテ之ヲ沒收ス可キモノナルカ故ニ若シ斯ル物件ヲモ尙ホ自由ニ他ニ讓渡スルヲ許ストキハ狡猾ナル被告人ハ其沒收ヲ免カレント欲シ巧ニ沒收言渡前ニ於テ之ヲ他人ニ賣却スルコトアル可ク從テ裁判所ハ遂ニ其目的ヲ達スル能ハサルニ至ル可ケレハナリ

(第四) 差押并ニ解除ノ權利ヲ有スル者 差押并ニ解除ノ權ヲ有スル者ハ裁判所ナリトス茲ニ議論アルハ大審院ハ此權ヲ有スルヤ否ヤノ點是レナリ或ハ大審院ハ法律ノ點ニ付キ審理ヲ爲スモノニシテ事實ノ點ニ付テハ之ヲ審査スルノ權ナキヲ以テ差押并ニ解除モ亦之ヲ爲スコトヲ得スト論スル者アレトモ余ハ之ト反對ノ意見ヲ有スルモノナリ何トナレハ差押及解除ノ手續ハ單ニ證據物件其物ノ上ニ行ハル、ニ過キサレハ縱令之ヲ取捨スルモ事實ノ點ニ付テハ何等ノ關係ヲ有スルモノニ非サレハナリ

現行犯ノ場合ニ於テハ檢事及司法警察官モ亦此物件差押並ニ解除ヲ爲スノ權アリ(刑事訴訟法第四百四十四條、第四百四十七條)

(第五) 差押ノ手續 差押ニ付テハ何等ノ形式ヲ要セス唯々豫審判事ニ於テ證據上必要ナリト思料スル物件ヲ差押ヘタルトキハ認印ヲ爲シ且ツ目錄ヲ調製セサル可カラス而シテ必要ノ場合ニ於テハ其物件ノ監護ヲ命スルコトヲ得(刑事訴訟法第六六條)又其日ニ處分ヲ終テサルトキハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置マコトヲ得(刑事訴訟法第七七條)



物件差押ニ付テハ檢事ノ立會ヲ要スルヤ否公判ニ於テ檢事ノ立會ヲ必要トスルモ差押ニ付テハ何等ノ規定ナシ然レトモ被告人ハ自ラ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルコトヲ得ルモノトス(刑事訴訟法第百八條)

檢證

第二項 檢證

檢證トハ裁判所カ自ラ證據物ヲ審査スルノ方法ニシテ他ノ證據ノ目的物ト毫モ差異ノ存スル所ナシ唯々檢證ノ場合ハ目的物ヲ裁判所ニ運搬シ能ハサルヨリ其所在ニ臨檢シテ之カ調書ヲ作ルノ差アルニ過キスシテ是レ亦證據物蒐集ノ手段タルニ外ナラス而シテ目的物ヲ蒐集スルニハ果シテ檢證ニ依ラサル可カラサルヤ將タ差押又ハ搜索ノ手續ニ依ル可キヤハ判事ノ認定ニ一任ス可キモノトス(刑事訴訟法第百二條)而シテ檢證ノ手續中ニハ證據調ノ事項ニ屬ス可キモノアルヲ以テ余ハ寧ロ此部類ニ入ルバチ穩當ナリト信ス

搜索

第三項 搜索

搜索ハ物件差押并ニ檢證ノ手段ナリ抑モ必要ナル證據物ノ所持者ニシテ裁判所ノ命令ニ從ヒ之ヲ提出シ又ハ被告人カ裁判所ニ出頭スルトキハ何等ノ強制手續

ヲ要セサレトモ時ニ或ハ其物件ヲ藏匿シテ裁判所ノ命令ニ從ハサルコトアリ斯ル場合ニ於テハ則チ此強制方法ヲ必要トス

搜索ニ二種アリ一ハ被告人ヲ搜索スルモノニシテ之ヲ家宅搜索ト云ヒ一ハ物件ヲ搜索スルモノニシテ之ヲ住居搜索ト云フ而シテ前者ニ付テハ既ニ講述シタル所アルヲ以テ茲ニハ唯々住居搜索ニ付キ講述ス可シ

(第一) 搜索ヲ爲ス原因 搜索ヲ爲スニ付テハ左ノ二個ノ原因アルコトヲ要ス

一、 被告人タルト第三者タルトチ間ハス證據上必要ナル物件ヲ所持スルノ疑アルトキ

二、 其物品ヲ隱匿スルノ嫌疑アルトキ 元來搜索ハ前ニ述フルカ如ク證據物ノ所持者ニ於テ之カ提出ヲ拒ムノ消極的行爲アルニ因リテ行フ可キ強制手段ナルカ故ニ所持者ヨリ進ンテ其物品ヲ任意ニ提出スルトキハ搜索ヲ爲スコトヲ得ス

(第二) 搜索ノ目的物 搜索ノ目的物ト爲ルモノハ即チ左ノ如シ

一、 被告人又ハ第三者ノ住居 住居トハ通常吾人ノ住スル家屋ハ勿論其他ノ

刑事訴訟法 訴訟手續 檢證及搜索 檢證 搜索 證據物ニ關スル強制方法 物件差押



建造物庭園ノ如キモ總テ之ヲ包含スルモノナリ(刑事訴訟法第四百四條)

二、被告人又ハ第三者ノ身體ニ蓋シ證據物ヲ衣服中ニ隱匿シ若クハ結髮内ニ挿入スルコトアリ是レ人ノ身體ニ對シテモ尙ホ搜索ヲ許シタル所以ナリ(刑事訴訟法第一百五條)而シテ前ニ一言シタルカ如ク搜索ハ差押ノ手段タルニ過キサルカ故ニ時ニ付キテノ制限ノ外物件差押ニ關スル制限ハ悉ク亦搜索ニ過モ之ヲ適用スルコトヲ得ヘシ唯タ茲ニ疑フ可キハ第一百十三條及第一百四條ニ依レハ物件ノ差押ハ之ヲ許サ、ルモ搜索ヲ爲スハ差支ナキモノ、如シ然レトモ搜索ハ手段ニシテ物件ノ差押ハ目的ナリ既ニ其目的ヲ達スルコトヲ得ザレハ手段モ亦之ヲ行フコトヲ得スト云ハサル可カラズ從テ同條ハ搜索ニモ亦適用シ得ルモノト信スルナリ

(第三) 搜索ノ權利者 搜索ノ權利ヲ有スル者ハ一、裁判所二、現行犯ノ場合ニ限り 檢事及司法警察官(刑事訴訟法第四百四十四條乃至第四百四十七條)三、受命判事若クハ受託判事等ナリ

### 第二節 證人、鑑定人ニ對スル強制方法

證人ニ對スル強制方法

證人ニ對スル強制方法

### 第一款 證人ニ對スル強制方法

證人トハ被告人以外ニ在リテ自ラ實驗シタル事實ニ付キ裁判所ニ對シ正常ニ之ヲ申立ツル者ヲ云フ即チ證人ハ事實ヲ申立ツルモノニシテ意見ヲ申立ツルモノニ非ス裁判所ハ證人ノ實驗シタル事實ヲ聽キテ裁判ヲ下スモノニシテ意見ヲ聞キテ裁判スルモノニ非ス意見ヲ聽カントセハ他ニ鑑定人ナルモノアリ裁判所ハ證人ヨリ意見ヲ聽クノ義務ナク又必要ナシ

(第一) 證人ト爲ルノ義務 證人ト爲ル者ハ裁判所ノ呼出ニ應シテ出頭スルノ義務アリ即チ裁判所ヨリ證人タルコトヲ命セラレタルトキハ何時ニテモ裁判所ニ出頭シテ事實ヲ申立ツルノ義務アリ是レ宛モ物件ヲ所持スル者カ裁判所ノ命令アリタルトキハ之ヲ裁判所ニ提出セサル可カラサルノ義務アルト同シク犯罪又ハ之ト關係アル事實ヲ知ル者ハ裁判所ノ命令ニ因リ裁判所ニ出頭シテ其事實ヲ陳述セサル可カラズ而シテ證人タルノ義務ハ國民タルノ義務ニ非ス裁判權ニ服從スルヨリ發生スル義務ナリ是ヲ以テ外國人ト雖モ我裁判權ニ服從スル者ハ亦證人ト爲ルノ義務ヲ免ル、コト能ハサルナリ斯ク我裁判權ニ服

刑事訴訟法 訴訟手續 證人、鑑定人ニ對スル強制方法



従スル者ハ凡テ證人ト爲ルノ義務アレトモ又茲ニ證人ト爲ルノ義務ナキ者アリ即チ左ノ如シ

一、日本ノ裁判權ニ服從セサル者 内外國ノ主權者、外國公使及其眷屬、日本ニ於テ治外法權ヲ有スル外國人ノ如シ

二、當事者 人ハ自ラ證言スルノ責任ナシトハ羅馬以來ノ格言ナリ從テ被告人ハ自身ノ事件ニ付キ自ラ證人ト爲ルノ義務ナキコト明カナルモ茲ニ疑アルハ共犯者ノ一人ノ陳述ハ他ノ共犯者ニ對シテ證言トナルヤ否ヤ即チ共犯者ハ相互ニ證人タルコトヲ得ルヤ否ヤノ問題是レナリ余ハ此場合ニ於テハ共犯者ノ一人ノ證言ハ他ノ共犯者ニ對シテ證言タルヲ得ヘシト信ス我現行法ニ於テハ此點ニ關シテ何等ノ明文ヲ見サレトモ之ヲ證人トスルニ於テ別ニ支障アラサル可シ尤モ此場合ニ於テハ純然タル證人ト異ナリテ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ得サルモ宣誓ノ有無ハ證人ナルヤ否ヤヲ區別スルノ標準ニハ非サルナリ事ハ尙ホ參考人ノ條下ニ於テ詳論ス可シ

三、判事及書記 判事及書記ノ證人ト爲ルコトヲ得サルハ除斥及忌避ノ規定

ヨリシテ之ヲ窺フコトヲ得ヘシ然レトモ此規定ニ依リテハ未ダ判事タリシ者又ハ書記タリシ者ハ證人トナルヤ否ヤヲ斷定スルコト能ハス然ラハ嘗テ判事タリシ者又ハ書記タリシ者ハ其取扱ヒタル事件ニ付キ證人ト爲スコトヲ得ルヤト云フニ是レ亦證人ト爲スコト得サルコト當然ナル可シ蓋シ書記ハ調書ノ調製ヲ司リ而シテ其調書ハ後日ノ證據ノ爲メニスルモノナレハ其調書ノ偽造タリ若シハ變造タリトノ事件ニ付テハ證人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得ヘシト雖モ其調書ニ記載セル事實ニ付テハ證人トシテ呼出スコトヲ得サル可シ然ラズンハ調書ヲ調製スルノ精神ニ背反ス可ケレハナリ次ニ判事ニ於テモ之ト異ナルコトナシ判事カ裁判所ニ於テ取調ヘタル事實ハ總テ記録シテ調書ニ在リ調書ヲ作成スルハ書記ナレトモ之ヲ作成セシムルハ判事ナリ證人ハ意見ヲ述フルモノニ非ス裁判官ニ於テ若シ事實ヲ知ラント欲セハ調書ニ就テ之ヲ看ル可シ

以上列叙セル者ハ證人タルノ義務ナキモノナリ次ニ證人トシテ證言ヲ拒ムコトヲ得ル者アリ刑事訴訟法ハ之ヲ第二百二十五條ニ掲ケタリ即チ

刑事訴訟法

訴訟手續 豫審 證人、鑑定人ニ對スル強制方法



一、官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

二、醫師、藥商、穩婆、辯護士、辯護人、公證人、神職、僧侶カ其身分、職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ  
是レナリ茲ニ所謂默秘ス可キ事項ハ何人カ之ヲ認定ス可キモノナルヤト云フニ若シ裁判所之ヲ定ムルモノトセハ此規定ハ殆ソト何等ノ効果ナキヲ以テ其人自ラ之ヲ認定スル外ナカル可シ尤モ官吏、公吏ニ至リテハ上長官其默秘ス可キ區域ヲ定メ得ルコト當然ナリ斯ノ如ク此等ノ者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得レトモ是レ唯タ證言ヲ拒ムコトヲ得ル權利ヲ有スルノミニシテ自ラ進ンテ證言ヲ爲ストキハ裁判所ハ之ヲ採用シ得ルコト言ヲ俟タサルナリ  
民事訴訟法ニ依レハ證言ヲ拒ムノ權ヲ有スル者カ其事實ヲ疏明シタルトキハ敢テ裁判所ニ出頭スルヲ要セスト爲セリ(民事訴訟法第三百條)然レトモ刑事訴訟法ハ此規定ニ缺クヲ以テ證言ヲ拒ミ得ル人ト雖モ尙ホ裁判所ニ出頭シ其事實ヲ疏明セサル可カラス然ラサレハ不參ノ制裁ヲ科セラル、コトアル可シ

七〇

次ニ證人ト爲ルノ義務ナキニ非サルモ普通ノ證人ニ比シテ多少ノ例外ヲ爲スモノアリ即チ左ノ如シ

一、皇族 皇族ハ證人タルノ義務アレトモ裁判所ニ出頭スルノ義務ナシ刑事訴訟法第三百十條第一項ニ曰ク皇族證人ナルトキハ豫審判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス可シト即チ皇族ヲ證人トスルノ必要アルトキハ判事ハ其所在ニ就キテ訊問セサル可カラス例ハ東京地方裁判所ニ於テ千葉ニ滞在スル皇族ヲ證人トスルノ必要アルトキハ東京地方裁判所ハ之ヲ千葉地方裁判所ニ囑託セサル可カラサカ如シ

二、大臣 大臣ハ皇族ノ如ク絶對的ニ裁判所ノ呼出ニ應スルノ義務ナキニ非ズ唯其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ訊問セサル可カラサルノミ(刑事訴訟法第三百十條第二項)茲ニ注意ス可キハ所在地ト現在地トノ區別ヲ爲サル可カラサルコト是レナリ一時ノ旅行ノ如キハ現在地ニ非ズ現在地ト云フ以上ハ少ソトモ長ク滞在スルノ土地ナラサル可カラス

刑事訴訟法 訴訟手帳 豫審 證人、鑑定人ニ對スル強制方法



三、帝國議會ノ議員 議員ニ付テハ開會期間其議會所在地ニ滯在中ハ其所在地ノ裁判所ニ於テ訊問ス可キモノトス(刑事訴訟法第三百十條第三項)

以上ハ日本ノ裁判權ニ服從シ又證人ト爲ルノ義務アルモ普通ノ證人ニ比シテ多少ノ例外ヲ成シ或ハ裁判所ノ呼出ニ應スルノ義務ナク又ハ裁判所ノ呼出ニ應スルノ義務アルモ或一定ノ裁判所ノ呼出ニ應スルノ義務ナキ者ナリ此他呼出ノ手續ニ付テ例外トナルハ軍人軍屬是レナリ

四、軍人軍屬 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ハ通常裁判所ノ裁判權ニ服從セサルモノナレハ證人トシテ之ヲ呼出スノ手續モ亦普通ノ證人トハ異ナレリ即チ裁判所ハ證人ト爲ル可キ軍人軍屬所屬ノ長官又ハ隊長ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達スルモノナレハ若シ隊長又ハ長官ニシテ軍人軍屬ノ出頭ヲ許可セサルトキハ裁判所ハ之ヲ證人トシテ出頭セシムルコトヲ得サル可シ(刑事訴訟法第一百七條)

以上列舉セル例外ヲ除ケハ其他ノ人ハ凡テ裁判所ノ命令ニ從ヒ呼出ニ應シ裁判所ニ出頭ス可キ義務アリ若シ此義務ヲ破リテ裁判所ノ呼出ニ應セサルトキ

ハ判事ハ檢事ノ意見ヲ聞キ其不參ニ因リテ生シタル費用ノ賠償及二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡スコトヲ得又判事ハ其罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ發シ或ハ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ヘシ若シ證人尙ホ出頭セサルトキハ費用賠償ノ外ニ倍ノ罰金ヲ言渡シ又勾引狀ヲ發スルコトヲ得然レトモ證人ニ於テ罰金言渡書ノ送達アリタル日ヨリ三日内ニ其出頭セサリシコトヲ正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキハ判事ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及賠償ノ決定ヲ取消スコトアル可シ(刑事訴訟法第一百八條、第一百九條)

斯ノ如ク證人カ裁判所ノ呼出ニ應セサルトキハ不參ニ因リテ生シタル費用ノ賠償及罰金ヲ命スルノミナラス尙ホ勾引狀ヲ發シテ其證人ヲ勾引ス可シト雖モ若シ證人カ疾病其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ説明シタルトキハ判事其所在ニ就テ訊問スルコトアル可シ(刑事訴訟法第一百十六條)

(第二) 裁判所ニ出頭シテ宣誓ヲ爲スノ義務 裁判所ノ命令ニ應シテ出頭シタル證人ハ事實ヲ眞實ニ陳述ス可キコトヲ宣誓スルノ義務アリ此宣誓タル現今ノ法律ニ於テハ甚ク緊要ナリ夫ノ偽證罪ノ成否ハ一ニ證人カ宣誓シタルト否ト

刑事訴訟法 訴訟手續 豫審 證人 鑑定人ニ對スル強制方法



ニ係レリ何トナレハ今日ノ法律ニ於テハ偽證罪ハ宣誓ヲ濫用スルノ犯罪ナレハナリ古代ニ於テハ證人ノ宣誓ハ天神ニ向テ之ヲ爲シタルモノナリ現今ニ於ケル歐洲ノ刑事訴訟法ノ如キハ尙ホ此趣旨ヲ採レリト雖モ我現行法律ニ於テハ證人ヲシテ自ラ其良心ニ誓ハシムルコト、シ事實ヲ陳述スル前ニ之ヲ行ハシムルモノトセリ(刑事訴訟法第二百二十二條)

斯ノ如ク證人ハ宣誓ヲ爲スノ義務アレトモ法律ハ又之ニ例外ヲ設ケタリ即チ本法第二百二十三條及第二百二十四條ニ規定セルモノ是レナリ今其各項ヲ説明スルニ先ダ茲ニ全般ニ通スル一議論ヲ紹介ス可シ第百二十三條第一項ニ曰ク「左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但宣誓ヲ爲サシメスシテ事實參考ノ爲メ其供述ヲ聽クコトヲ得」ト此條文ノ解釋ニ付テハ二說アリ一ハ曰ク法文ニ於テ左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サストアル以上ハ同條ニ規定セラレタル者ハ凡テ證人ト爲ルコトヲ得サルモノナリト他ノ一ハ曰ク證人ト爲ルコトヲ許サストアルハ宜シク之ヲ宣誓ノ不能力ノ意義ニ解ス可シ換言セハ同條ハ事實參考人ハ證人ニ非ストノ義ニ非ス唯々宣誓ノ不能力ヲ規定シ

タルニ止マルヲ以テ事實參考人モ亦證人ニシテ眞實ヲ陳述スルノ義務アリ唯ダ一般ノ證人ト異ナルハ宣誓ヲ爲サ、ル一點ニ在ルノミト二說ノ說ク所單ニ茲ニ止マラハ敢テ異同アル所ナキカ如クナレトモ一步ヲ進メテ其結果ニ論及セシムルトキハ茲ニ一大徑庭ヲ生ス可シ即チ第一說ニ依レハ事實參考人ハ證人ニ非ス其供述ハ證言ニ非ス從テ他ニ證據之ナキ以上ハ單ニ事實參考人ノ供述ノミニ依リテ裁判ヲ下スコトヲ得ス之ニ反シテ第二說ニ依レハ事實參考人ハ宣誓上不能力ノ證人ナリ然レトモ其供述ハ證人ノ供述ナリ從テ他ニ證據之ナシト雖モ單ニ其證言ノミニ依リテ裁判ヲ下スコトヲ得トノ結果ニ於ケル大差異ヲ看ル可シ余ハ第二說ヲ可トス惟フニ刑事訴訟法上廣義ニ於ケル證人ト狹義ニ於ケル證人トヲ區別スルコト最モ正當ナラン廣義ニ於ケル證人トハ宣誓セル證人ト宣誓セサル證人トノ二種ヲ包含シ狹義ニ於ケル證人トハ單ニ宣誓シタル證人ヲ謂フ今ヤ刑事訴訟法ヲ按スルニ證人ノ呼出手續ニ付テハ明文ノ規定アリト雖モ事實參考人ノ呼出手續ヲ規定スルコトナシ又證人ハ出頭ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得ルコトヲ規定スレトモ事實參考人ニ付テハ此規



定ヲ設クルコトナシ若シ夫レ事實參考人即チ宣誓ヲ爲サスシテ唯タ事實參考ノ爲メニ供述スル者ヲシテ證人ニ非スト爲サハ我法律ニ於テハ裁判所ハ事實參考人ノ呼出ニ如何ナル手續ヲ用フル乎又呼出ニ應シテ出頭シ供述ヲ爲シタル事實參考人ハ旅費日當ヲ請求スルコトヲ得ル乎恐ラシハ法律上規定ナシト云ハサルヲ得サル可シ是レ豈ニ不都合ナラスヤ加之一步ヲ進メテ事實參考人ノ供述ハ如何ナル効力アリヤト釋スルニ此場合ニ於テモ尙ホ第九十條ノ原則行ハレサルヲ得ス即チ其供述ノ眞實ナリヤ否ヤハ一ニ判事ノ判斷スル所ニシテ若シ判事ニ於テ眞實ナリトスルトキハ單ニ此供述ノミニ依リテ裁判ヲ下スコトヲ得ヘシ然ルニ第一說ノ論者ハ曰ク判事ハ事實參考人ノ供述ノミニ依リテ裁判ヲ下スコトヲ得スト果シテ然リトセハ是レ自由證據法ヲ採ルニ非スニテ制限證據法ヲ採ルモノナリ苟モ自由證據主義ヲ採ル以上ハ其効力ハ一ニ判事ノ判斷ニ任セサルヲ得ス刑事訴訟法ハ第九十條ニ於テ明カニ自由證據主義ヲ採用シタルコトハ既ニ之ヲ講述セリ若シ事實參考人ノ供述ハ單獨ニテ證據ト爲ラストセハ須ラシ之カ明文上ノ制限ナカル可カラス然ルニ其規定ナキニ

由リテ觀レハ論者ノ說タル未ダ信ヲ置クニ足ラサルナリ知ル可シ事實參考人ノ供述ハ一般證人ノ供述ト異ナルコトナキヲ斯ノ如ク夫レ我法律ハ事實參考人ノ供述ニ付キ別ニ規定ヲ設クルコトナシ又其供述ハ證人ノ供述ト異ナルコトナケレハ之ヲ以テ宣誓ノ不能力者ト爲シ廣義ニ於テ證人ト云フモ亦敢テ失當ノ解釋ニ非サルヲ信ス

以上ノ解釋ニ從ヒ宣誓ノ不能力ヲ擧ケレハ即チ左ノ如シ

第一、民事原告人 民事原告人トハ公訴ニ附帶シテ民事ノ訴ヲ起シタル者ヲ云フ然レトモ實際上困難ナル問題ヲ生スルハ訴訟ノ中途ニ於テ私訴ヲ提起シタルトキ即チ是レナリ例ヘハ公判ニ於テ私訴ノ申立ヲ爲スカ如シ此場合ニ於テハ少シク異様ノ感ナキヲ得サレトモ私訴ノ申立ヲ爲シタルトキヨリ宣誓ノ能力ヲ喪失スルモノニシテ其効力ヲ豫審中ノ證言ニ溯及セシムルコトヲ得サルナリ尤モ一方ヨリ看レハ斯ノ如ク申立ノ前後ニ分割スルコトヲ得ス從テ私訴ノ申立ヲ爲シタルトキハ其以前ニ溯リテ宣誓ヲ爲スノ能力ナシト云フヲ得ヘキニ似タリト雖モ前段ノ解釋ハ法律上止ムヲ得サル結果ト



云フ可シ

- 第二、民事原告人及被告人ノ親屬但姻屬ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ。是レ血縁ノ關係ヨリ宣誓ノ能力ヲ奪フモノナリ余ノ嘗テ述ヘタルカ如ク此中ニ離縁シタル養子ヲ包含スルコトナキハ實ニ法律ノ闕點タリ
- 第三、民事原告人及被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受クル者
- 第四、民事原告人及被告人ノ雇人又ハ同居人。故ニ如何ニ親密ナル朋友、同僚ト雖モ同居セサル者ハ此中ニ包含セシムルコトヲ得ス
- 第五、十六歳未滿ノ幼者。玆ニ十六歳未滿ト謂フハ犯罪ノアリタル當時ヲ云フ乎將テ宣誓ノ當時ヲ云フ乎ト釋スルニ此規定ハ宣誓ノ不能力ヨリ出テタルモノナレハ宣誓當時ノ年齢ト解釋セサル可カラス
- 第六、知覺精神ノ不十分ナル者
- 第七、瘖啞者。此二者ニ付テハ精神發達ノ點ヨリ宣誓ノ能力ヲ奪ヒタルモノナリ
- 第八、公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者。是レ刑法ノ附加刑ヨ

リ來リタル一ノ制裁ナリ

- 第九、重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付テ公判ニ付セラレタル者。此規定ハ之ヲ二様ニ解スルコトヲ得ヘシ即チ其一ハ嘗テ重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者ト解釋シ其二ハ現ニ重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付テ公判ニ付セラレタル者ト解釋スルニ在リ余ハ後段ノ解釋ヲ採ルノ正當ナルコトヲ信ス何トナレハ前者ハ既ニ第八號ニ於テ規定セラレタレハナリ
- 第十、現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者。殺人罪ノ嫌疑ヲ受ケテ公判ニ付セラレタルモ證憑不十分ナルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者ハ其後眞ノ犯罪者現出シ來リテ公判ニ付セラレタルトキハ證人トシテ宣誓ヲ爲スコトヲ得サルハ此規定ニ依リ明瞭ナリト雖モ其事件ニ付キ一旦處分ヲ受ケタル者カ再ヒ其事件ニ關シテ證言ヲ爲ス場合ヲモ包含セシムルカ如ク規定セサリシハ不當ナリ例ヘハ甲乙二人ノ犯罪者アリ甲ハ闕席判決ヲ受ケ乙ハ對席ニテ有罪ノ判決



ヲ受クルニ方リ丙ハ證人ト爲リ事實ヲ隠蔽シタルニ因リ偽證罪ノ處分ヲ受ケタリ本法ニ依ルトキハ甲ハ闕席裁判故障ノ訴訟ニ於テ前ニ偽證罪ヲ以テ處斷セラレシ丙ヲ再ヒ證人ト爲スコトヲ得ヘク即チ一タヒ偽證罪ニ因リ處罰セラレタル者ヲシテ再ヒ同一事件ニ付キ證人タルコトヲ禁スル能ハサルノ不都合アリ

以上列擧シタル者ヲ除キ其他ノ者ハ證人トシテ裁判所ノ呼出ニ應シテ出頭シタルトキハ必スヤ宣誓ヲ爲サ、ル可カラス若シ宣誓ヲ肯セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可キモノトス(刑事訴訟法第百二十六條)

(第三) 眞實ニ事實ヲ陳述スルノ義務 證人ハ宣誓ヲ爲スノ義務ノ外尙ホ一ノ義務アリ即チ眞實ニ事實ヲ陳述スルノ義務是レナリ若シ證人ニシテ裁判所ニ出廷シ宣誓ヲ爲スモ證言ヲ爲サ、ルトキハ刑法第百八十條ニ依リテ處分セラル可シ(刑事訴訟法第百二十六條)

以上講述セル所ヲ約言スレハ證人ハ(一)裁判所ノ呼出ニ應スルノ義務アリ(二)裁判

所ニ出頭シタルトキハ宣誓ヲ爲スノ義務アリ(或場合ヲ除ク)(三)眞實ニ事實ヲ陳述スルノ義務アリ若シ此等ノ義務ニ違背シタルトキハ則チ其制裁トシテ刑事訴訟法并ニ刑法所定ノ刑罰ニ處セラル可シ

(第四) 證人ノ權利 證人ハ出頭ニ付テノ旅費及日當ヲ要ムルノ權アリ(刑事訴訟法第百三十四條)事實參考人モ亦出頭ニ付テノ旅費及日當ヲ要ムルノ權アルコト前キニ一言シタル所ノ如シ

(第五) 證人訊問ノ手續 現行法ハ證人ノ呼出狀ニ付キ別ニ規定スル所ナシ即チ第百十五條ニ依レハ單ニ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クモ二十四時間ノ猶豫アル可キモノトスルニ止マリ其他ニ規定ナキヲ以テ證人ニ付テモ亦被告人ノ呼出狀ヲ用キサルヲ得ス判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ氏名、年齢、職業、住所及第百二十三條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問ハサル可カラス次ニ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事モ黙秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ヲ宣誓セシメサル可カラス裁判所書記ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可キモノタリ(刑事訴訟法第百二十



一條及第二百二十二條

證人ハ他ノ證人及被告人ト各別ニ訊問ス可キモノナリト雖モ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得ヘシ(刑事訴訟法第二百二十七條)

又判事ハ證人ノ供述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得若シ證人同行スルコトヲ肯セサルトキハ第一百八條ノ規定ニ從フ可キモノトス(刑事訴訟法第二百二十八條)

現今ニ於テハ證人ノ對質ニ付テハ敢テ云々スル者ナシト雖モ歐洲ニ於テハ之ヲ以テ拷問ノ一種トセリ夫ノ器械的ノ拷問ハ既ニ廢止セラレタルモ言語上ノ拷問ハ今日モ尙ホ存在セリトハ即チ此意ナリ

證人裁判所所在ノ地ニ住居セサルトキハ其住居ノ地ノ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得若シ管轄地外ニ在ルトキハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ訊問ヲ囑託スルコトヲ得ヘシ(刑事訴訟法第三十二條)

第二款 鑑定人ニ對スル強制方法

鑑定人ニ對スル強制方法

裁判官ハ法律ヲ知ルモノニシテ法律ハ裁判官ノ專有物タリ然レトモ事實ニ至リテハ到底之カ知悉ヲ期ス可カラズ是ニ於テ乎證人ノ必要アリ既ニ事實ノ真相ハ之ヲ知り得タリトスルモ又其事實ノ關係ヲ知り得サルコトアリ是ニ於テ乎鑑定人ノ必要アリ

鑑定人ハ裁判官ノ補助官ナリ即チ學術、技術、職業ノ智識ニ依リテ裁判官ヲ補助スル所ノ人ナリ是ヲ以テ鑑定人ト證人トハ全ク相異ナリテ證人ハ事實ヲ陳述スルモノナルモ鑑定人ハ意見ヲ陳述スルモノナリ故ニ醫師、語學家、法律家、技術師ノ如ク尙モ學藝、技術上ノ智識アル者ハ凡テ鑑定人ト爲ルコトヲ得ヘシ(第三百三十五條)ニ曰ク豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法及結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要ナリトスルトキハ學術、職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得ヘキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シト故ニ鑑定人ト爲ルハ必スシモ學者、技術家ノミニ限ルモノニ非ス例ヘハ紡織ノ方法ヲ知ルノ必要アルトキハ其道ニ通セル通常人ヲシテ鑑定人ト爲スコトヲ得ヘシ鑑定人ノ性質ニ付テハ種々ノ議論アリ或ハ曰ク通常ノ證人ト異ナルコトナシト或ハ曰ク智識ヲ有スル證人ナリト是レ英國學者ノ唱フル所

刑事訴訟法

訴訟手續 豫審 證人、鑑定人ニ對スル強制方法



ナリ然レトモ余ハ鑑定人ト證人トハ大ニ差異アリト信スルナリ前ニモ述ヘタル  
 カ如ク證人ハ唯ク其見聞シタル事實ヲ陳述スルニ止マリテ自己ノ意見ヲ陳述ス  
 ルモノニ非ス之ニ反シテ鑑定人ハ學術上又ハ職業上ヨリ得タル智識ニ因テ自己  
 ノ意見ヲ陳述スルモノナリ即チ鑑定人ハ裁判官ノ智識ノ足ラサル所ヲ補充スル  
 モノニシテ寧ロ裁判事務ノ中ニ入ル可キモノナリ但シ裁判官ハ必スシモ此補助  
 官タル鑑定人ノ意見ニ束縛セラル、モノニ非スシテ如何ニ鑑定人ノ意見ハ正當  
 ナリト雖モ之ヲ取捨スルハ裁判官ノ權内ニ在リ是ヲ以テ論者或ハ鑑定人ハ補助  
 官ニ非スト論スル者ナキニ非スト雖モ余ハ之ニ首肯スルコト能ハサルナリ

(第一) 鑑定人ト爲ルノ義務 鑑定人ト爲ルノ義務ハ日本ノ裁判權ニ服従スルヨ  
 リ來ルニ非ス學術上又ハ職業上ヨリ特別ノ智識ヲ有スルヨリシテ發生スル所  
 ノ義務ナリ此義務ヲ負ハサル者ハ前キニ證人ノ款ニ於テ述ヘタル證人ト爲ル  
 ノ義務ナキモノト異ナルコトナシ

(第二) 鑑定人ノ義務 鑑定ヲ命セラレタル者ハ(一)裁判所ノ呼出ニ應シテ裁判所  
 ニ出頭セサル可カラス(二)呼出ニ應シテ裁判所ニ出頭シタル鑑定人ハ先ツ宣誓

ヲ爲サ、ル可カラズ此宣誓ノ義務ナキ者ハ亦證人ノ場合ト異ナルコトナシ(三)  
 鑑定人ハ其命セラレタル範圍ニ於テ鑑定ヲ爲サ、ル可カラス此等ノ義務ノ違  
 背ハ證人ノ場合ニ於ケル義務ノ違背ト異ナルコトナシ唯ク鑑定人ニ對シテハ  
 勾引狀ヲ發スルコトヲ得サルノミ(刑事訴訟法第三百三十六條)

鑑定人ハ裁判官ノ知識ノ足ラサル所ヲ補助スル者ナリ從テ鑑定人ニ付テハ當  
 事者ヨリ忌避スルコトヲ許サ、ル可カラス現ニ民事訴訟法ハ之ヲ許スト雖モ  
 刑事訴訟法ニ於テハ一モ其規定アルヲ見ス

(第三) 鑑定人ノ權利 鑑定人ノ權利ハ證人ト異ナルコトナシ即チ旅費、日當及立  
 替金ノ辨濟ヲ要ムルコトヲ得(刑事訴訟法第四百一條)

(第四) 鑑定人ノ取調 裁判所ハ鑑定人ヲ呼出シ宣誓ヲ爲サシメ其命シタル範圍  
 内ニ於テ鑑定セシメ鑑定書ヲ作ラシム(刑事訴訟法第三百三十六條乃至第三百三  
 十  
 八條)

(第五) 鑑定人ノ數 此員數ハ全ク裁判所ノ意見ニ因リテ定マルモノトス(刑事訴  
 訟法第三百二十九條)



鑑定ニ關シテ現行法ノ最モ缺點ト爲ス可キコトハ鑑定ハ裁判所内ニ限リ裁判所外ニ於テ之ヲ爲シ得ヘキコトヲ規定セサルノ一事是レナリ惟フニ立法ノ當時ニ於テハ單ニ筆蹟ノ鑑定ヲ爲スカ若クハ其他二三ノ些末ノ事件ノミナ想像シタルモノナラン然レトモ是レ甚ク不當ナリ化學ノ試験特ニ癡狂者ノ鑑定ノ如キニ至リテハ物件並ニ被告人ヲ監獄署ヨリ出シ相當ナル化學室若クハ病院ニ入ラシメ而シテ試験又ハ診察ヲ爲サ、ル可カラス然レトモ裁判所外ニ物件ヲ出シ又ハ被告人ヲ監獄署外ニ勾留スルハ法律ノ許サ、ル所ナルヲ以テ現今ニ於テハ鑑定ノ大ナルモノアルニ方テハ他ニ裁判所ヲ構成セサル可カラス是レ素ヨリ妥當ヲ得タルモノニ非サルナリ又鑑定人ハ被告人ニ對シ自由ニ訊問ヲ爲シ得ヘキ權ヲ許サ、ル可カラス然レトモ現行法ニ依レハ訊問及質問ハ凡テ裁判官ヲ經由セサル可カラス此等ノ點ハ立法者ノ注意ヲ要スル所ナリ

(第六) 呼出狀ノ書式并ニ之カ送達 此事項ニ付テハ證人ノ規定ヲ準用ス

### 第三節 證據調

前二節ニ講述シタル所ハ裁判所ニ於テ證據ヲ蒐集スルノ方法ナリ而シテ裁判所

ハ此等ノ強制方法ニ因リ蒐集シタル證據ヲ審查シ以テ裁判ヲ下サ、ル可カラサルカ故ニ其審查ノ方法ハ事實爭點ノ證明上最モ重要ナリトス之ヲ證據調ト云フ

證據ハ被告人並ニ證人鑑定人ノ供述證據物件檢證調書其他諸般ノ徵憑ヲ云フ(刑事訴訟法第九十條裁判所ハ此等ノ證據ノ材料アルトキハ之ヲ調査シ事實ニ付キ判斷ヲ下サ、ル可カラス而シテ證據方法中證據物件及檢證ニ付テハ既ニ存在セル物件又ハ調書ニ付キ判斷ノ材料トシテ裁判所之ヲ審查スルニ止マリ別ニ何等ノ説明ヲ要スルモノナキヲ以テ之ヲ省略シ爰ニハ唯タ被告人並ニ證人鑑定人ノ訊問ニ付テノミ説明スル所アラントス

### 第一款 被告人ノ訊問

被告人ノ訊問ハ果シテ如何ナル目的ヲ有スルモノナルヤニ付テハ古來三个ノ學說アリテ存ス即チ第一說ハ被告人ノ不利益トシテ自白ヲ求ムル爲メトシ第二說ハ被告人ノ利益トシテ辯解ヲ爲サシムル爲メトシ第三說ハ犯罪事實發見ノ爲メトスルモノ是レナリ第一說ハ古代ニ行ハレタル議論ナリ即チ被告人ハ犯罪ノ本人ナレハ犯罪事實ヲ知ルハ被告人ヨリ長キハナシトノ說ヨリシテ被告人ノ自白



ヲ求ムルコトヲ之レ勉メ遂ニ拷問ノ制ヲ行フニ至レリ然レトモ此說ハ中世以後漸次其勢力ヲ失ヒ今日ニ於テハ本法第九十四條ニ規定スルカ如ク判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ自白セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラスト爲スコ至レリ殊ニ被告ノ自白ハ必要ナル場合ニ於テ之ヲ要ムルモノニシテ必スシモ常ニ不利益ヲ發見センカ爲メニ汲々之ヲ求ムルモノニ非ス是故ニ第一說ハ穩當ヲ得サルモノト信スルナリ次ニ第二說ハ我刑事訴訟法上之ヲ認ムルコトヲ得ス本法ニ依ルトキハ夫ノ密室監禁ノ如キ強制ノ方法ヲ用キ被告人ニ苦痛ヲ與ヘテ被告ノ自白ヲ求ムルハ其趣旨トスル所畢竟被告人ノ不利益ナル證據ヲ提出セシメンガ爲メナリ故ニ此說モ亦其當ヲ得タルモノニ非ス終リニ第三說タル犯罪事實發見說ハ現行法ノ解釋上最モ其當ヲ得タルモノト信ス蓋シ第一說及第二說ハ其論旨皆ナ極端ニ走ルノ弊害ヲ免レス第三說ハ洵ニ肯綮ニ中レルモノニシテ余モ亦此說ニ從ハント欲スナリ以下被告人ノ訊問ニ付キ分說スル所アラントス

(第一) 訊問ノ方法并ニ時期 訊問ノ方法ニ付テハ別ニ何等ノ規定アルコトナシ唯々被告人ノ訊問及供述ハ書記之ヲ錄取シテ讀聞カス可ク豫審判事ハ被告人

ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ問ヒ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記セサル可カラズ被告人其供述ニ付キ變更増減ス可キコトヲ申立テタルトキハ更ニ訊問ヲ爲シ其訊問及供述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ(刑事訴訟法第九十五條第九十六條)

訊問ノ時期如何ト云フニ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出タシタルトキハ即時ニ訊問ス可ク又ハ遅クトモ其出頭ノ時ヨリ二十四時間ヲ過ク可カラズ若シ之ヲ經過シタルトキハ其効力ヲ失フモノトス次ニ勾引狀ヲ以テ勾引シタルトキハ四十八時間内ニ訊問ス可ク(刑事訴訟法第七十三條)又勾留狀ヲ以テ勾留シタルトキハ其訊問ノ期間ニ制限ナキヲ以テ如何ナル時期ニ於テモ之ヲ訊問スルコトヲ得ヘシ(同上第七十五條)

(第二) 訊問ノ手續 判事ハ被告人ノ共犯ナルコト人違ナキコト其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリト認ムルトキハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得ヘシ(刑事訴訟法第九十八條)又被告人若シハ對質人聲ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ、應ナルトキハ書面ヲ以テ答ヘシ



△若シ譯者、啞者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命ス可シ被告人又ハ對質人カ國語ニ通セサルトキ亦同シ通事ハ正實ニ通譯ス可キ宣誓ヲ爲サ、ル可カラス其他第三百三十六條、第三百十七條及第四百十一條ノ規定ハ通事ニモ之ヲ適用ス可キモノナリ(同上第百條、第百一條)

(第三) 訊問ニ付テハ制限 判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ自白セシムル爲メニ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラズ其供述ハ被告人ノ任意ニ出ツルヲ要ス(刑事訴訟法第九十四條)

### 第二款 證人、鑑定人ノ訊問

證人ノ訊問モ被告人ノ訊問ニ異ナルコトナク其目的トスル所ハ犯罪ノ眞實ノ事實ヲ發見スルニ在リ而シテ其訊問ノ方法並ニ時期ニ付テモ亦同様ニシテ其證書ハ之ヲ調書ニ錄取セサル可カラス(刑事訴訟法第三百十一條)又其手續モ被告人ト同シク訊問ノ場合ト同シク格別ニ爲スナ原則ト雖モ必要ナル場合ニ於テハ他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルヲ得ヘキコト既ニ講述シタルカ如シ次ニ證人訊問ノ制限ニ付テハ何等ノ規定スル所ナシ其他ハ被告人ノ訊問ト異ナル所ニアラ

證人ノ訊問

サルナリ

鑑定人ノ鑑定モ亦自由ニ之ヲ爲サシメサルヘカラス

以上證據調ノ概要ヲ講了セリ而シテ既ニ集取シタル證據物ニ付キ其審査ヲ終リタル上ハ之ニ付キ判斷ヲ下サ、ル可カラス故ニ余ハ節ヲ更メテ證據判斷ニ付キ説明ヲ試ミントス

### 第四節 證據判斷

證據判斷

(第一) 證據ノ意義

證據ハ古來種々ノ意義ニ用ヰラレ漠然トシテ一定セス即チ證明ノ方法、證據力ニ意味セラル、カ如シ然レトモ斯ノ如ク一語ニシテ二三ノ意義ニ使用セラル、トキハ管ニ錯雜ヲ招クノミナラス爲ニ誤謬ヲ惹起スルノ虞ナキヲ保セス故ニ其意義ニ付テハ之カ一定ヲ期セサル可カラス余ノ信スル所チ以テスレハ證據トハ證據方法チ意味スルモノニ外ナラス即チ一ノ證明ス可キ事項アルトキハ其之ヲ知ルニ足ルノ材料ナカル可カラス此材料ハ即チ證據方法ナリ而シテ判事ハ此證據方法ニ依リ自己ノ自由ナル判斷ヲ以テ各材料ノ證明力ノ有無大小ヲ定ムルコト



ヲ得ヘシ例ヘハ甲カ乙ヲ殺傷シタル事實アルトキハ是レ證明ス可キ事項ナリ而シテ其現場ニ在リテ之ヲ目撃シ又ハ甲ノ逃走セルヲ望見シタル者ノ證言ハ所謂證據方法ナリ斯ノ如ク證明ス可キ事項定マリ又證據方法ニシテ定マルトキハ判事ハ此二者ノ關係ヲ確定セシムル爲メニ推理ノ力ヲ以テ各證據方法カ其事實ヲ證明スルニ足ルヤ否ノ證據ヲ判斷セサル可カラス之ヲ證據判斷ト云フ以上余ハ證據ノ意義ヲ講了セルヲ以テ進テ證據判斷ニ付キ説明スル所アル可シ

(第二) 證據判斷ノ方法

證明ス可キ事項及之ニ對スル證據方法ニシテ定マルトキハ判事ハ其證據ニ依リ判斷テ下サ、ル可カラス其判斷ノ方法ニ二種アリ第一、直接證據方法第二、間接證據方法は是レナリ

第一、直接證據方法 直接證據方法トハ爭點事實ヲ直接ニ證明ス可キ證據方法

ヲ云フ我刑事訴訟法第九十條ニ依レハ直接ノ證據方法ハ第一、被告人ノ自白第二、官吏ノ檢證調書第三、證據物件第四、證人ノ供述第五、鑑定人ノ供述是レナリ故ニ此等ノ證據方法ニ依ルニ非サレハ以テ爭點事實ヲ直接ニ證明スルコト能ハ

サルモノトス然レトモ此五個ノ證據方法ハ必スシモ常ニ直接證據方法タルモノニ非ス其關係事實ヲ證明スルニ當リテハ復タ間接證據トナルコトアリ例ヘハ殺傷事件ニ付キ甲者乙者ニ怨恨アルカ如キ又ハ甲者不意ニ刀劔ヲ買入レタルカ如キ證人ノ供述アル場合ニ於テハ唯タ關係事實ニ對スル證言ニ過キサリヲ以テ間接證據ト云フコトヲ得ヘシ斯ノ如ク五個ノ直接方法ト雖モ場合ニ因リテハ間接證據方法トシテ證明サル、コトアリ要ハ唯タ其證明事項ノ爭點ナルヤ將タ關係事項ニ止マルヤニ因リ區別サル、モノトス

(第二) 間接證據方法 間接證據方法トハ間接事項ニ依リテ證明事實ヲ證明セラ

ル可キモノヲ云フ即チ刑事訴訟法第九十條ノ末段ニ規定セル諸般ノ徵憑ナルモノハ間接證據方法ナリ徵憑ハ如何ナルモノナルヤ今日未タ一定ノ見解ヲ與ヘタルモノナシ徵憑ハ判事ノ心證ノ材料トナルモノナルヲ以テ如何ナルモノト雖モ徵憑ヲラサルモノナク殆ント無制限ナリト云フ者アリ抑モ此徵憑トハIndicium譯シタルモノニシテ英國證據法ニ於ケル情況證據(Circumstantial Evidence)ナリ故ニ證人ノ供述又ハ鑑定人ノ鑑定モ間接ニ爭點事實ヲ證明スルモノハ凡



テ情況證據タリトス

斯ノ如ク微憑ハ其證據力ニ付テハ直接證據ト同等ノ地位ニ立ツコトアリ然レトモ既ニ間接ノ點ヨリ爭點事實ヲ證明スルモノナルカ故ニ最モ確實ニシテ且爭點事實ニ近接セサル可カラス蓋シ微憑ニシテ最モ確實ニ且ツ爭點事實ニ近接スルニ從ヒ益々判事ノ心證ヲシテ確實ナラシムルコトヲ得ヘシ然レトモ斯ク論述スレハトテ判事ハ一个ノ微憑ノミニ依リテ裁判ヲ下スヲ得スト云フニ非ス既ニ述ヘタルカ如ク證據力ノ判斷ハ判事ニ一任セラレタルモノナレハ決シテ他ヨリ其強弱ヲ爭フコトヲ許サス苟モ判事ニシテ眞實ナリトノ心證ヲ得タルトキハ能ク一个ノ微憑ノミヲ以テ有罪無罪ヲ判斷スルコトヲ得ヘシ

(第三) 證據判斷ノ主義

證據判斷ニ關スル主義ハ左ノ如シ

第一、實際上ノ眞實ヲ求ムル證據法ト形式上ノ眞實ヲ求ムル證據法 凡ソ眞實ヲ求メノストルノ點ニ在リテハ二主義差異アルコトナシト雖モ一ハ形式上ノ眞實ヲ以テ満足スルト一ハ形式上ノ眞實ヲ以テ満足セス自ラ眞實ナリト確認

スルマテ證據ヲ集取スルトノ點ニ於テ區別アリ刑事訴訟ハ多ク實際上ノ眞實ヲ求ムルヲ以テ當事者ノ提出セル證據ノミニ甘セス必要ナリトスルトキハ裁判官職權ヲ以テ自ラ證據ヲ集取ス可シ之ニ反シテ民事訴訟ノ如キハ形式上ノ眞實ヲ求ムルヲ以テ當事者ノ自認ニ重キヲ置キ又裁判所自ラ證據ヲ集取スルコトナク當事者ノ提出シタル證據ニ依リ其範圍内ニ於テ眞實ヲ求ムルヲ例トス同シク刑事訴訟ナレトモ英國法律ハ寧ロ形式上ノ眞實ヲ求ムルノ主義ニ傾ケルモノ、如シ是レ大ニ歐洲大陸ト異ル所ナリ曾テ歴史ノ條下ニ於テ述ヘタル如ク歐洲大陸ニ於テハイノーゼント第三世カ惡風聞ハ天帝ノ言ハシムル所ナリ天帝ノ代理者タル法王ハ其眞實ナリヤ否ヤヲ確ムルノ權アリト主張シテ糾門法ヲ創制シ豫審制度ノ濫觴ヲ開キシヨリ以來此主義ヲ採用シ場合ニ由リテハ當事者ノ提出セル證據ニ満足セス裁判所自ラ満足スル迄證據ヲ集取ス本法第九十一條ニ豫審判事ハ檢事若クハ被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據微憑ヲ集取ス可シトアルハ明カニ實際上ノ眞實ヲ求ムルヲ主義トセルコトヲ表白シタルモノナリ今ニ主義何レヲ可ト



大可キヤト云フニ此問題ハ刑事訴訟ハ義務主義ヲ採ル可キヤ將タ權利主義ヲ採ル可キヤノ問題ニ歸着セサルヲ得ス我法律ハ既ニ義務主義ヲ採用セル以上ハ實體上ノ眞實ヲ求ムル證據法ヲ採ル復タ當然ノコト、謂フ可シ

第九十一條ニ隨ヒ證據ハ豫審判事集取スルモ如何ナル程度マテ證據ヲ集取スヘキヤ豫審判事ニ證據集取ノ權義アレハトテ無制限ニ必要ナキ點マテモ證據ヲ集取ス可キモノニアラス前ニモ述ヘタル如ク證據ニハ必スヤ證明セラル可キ一定ノ目的ナカル可カラズ此一定ノ目的サヘ證明シ得レハ其他ノ點ニ於テハ證據ヲ集ムルニ及ハサルナリ例ヘハ被告事件竊盜罪ナリトスレハ何年何月ニ何人カ何人ノ財産ヲ竊取セルヤノ事實ハ即チ此場合ニ於テ證明セラル可キ一定ノ目的事項ナレハ此事實ヲ證明シ得ル證據方法アレハ足レリ之ヨリ以上ノ證據ハ必要ナシ豫審判事ハ被告事件ヲ公判ニ移スニ足ルノ證據ヲ集取スレハ可ナリ之ヨリ以上ノ證據ヲ集取スルハ豫審ニ必要ナシ一言以テ之ヲ蔽ヘハ又證明事項ハ犯罪事實ナリト雖モ證明スルニ及ハサル事實アリ例ヘハ犯人ノ成年者ナルトキ癩癩ナルヤ否ヤ又ハ火災地震戰爭ノ如キ明確ナル事實ハ反證

ノ出ツルマテ證明スルニ及ハサルカ如キ是レナリ之ヲ要スルニ或例外チ有シ法定犯罪事實又ハ之ヲ打破スル事實ハ必スヤ之ヲ證明セサル可カラサルモ其他ノ點ハ立證ノ必要ナシト謂フ可シ而シテ是等ノ證據ハ豫審ニ於テハ豫審終結ノ決定書ヲ被告人ニ送達スルマテニ集取セサル可カラズ換言スレハ豫審ヲ終結シテ決定書ヲ被告人ニ送達スルマテ必要アレハ判事自カラ證據ヲ集取ス可ク又當事者ノ申立テアレハ之ヲ採用スルコトアルモ一タヒ決定書ヲ被告人ニ送達セル以上ハ判事自ラ下シタル裁判ニ羈束セラル、ニ依リ最早證據ヲ集取スルコト能ハス

第二、自由證據法ト制限證據法 自由證據法ト云ヒ制限證據法ト云フモ何レモ眞實發見チ唯一ノ目的ト爲サ、ルハナシ然レトモ此目的ハ實際ニ於テ容易ニ遂行スルコトヲ得ルヤ否ヤ即チ證據方法ノ證據力ノ有無ヲ判別スルハ實ニ至難ノコト、云フ可シ去レハ古代ノ人民ハ犯罪アレハ神罰アリト爲シ神明ニ訴ヘテ有罪無罪ヲ決シタリ例ヘハ我邦ニ於ケル探湯ノ制ノ如シ邦ノ内外ヲ問ハス人智大ニ進ミテヨリ犯罪ノ事實ヲ知ルモノハ被告人ヨリ善キハナシ從ツテ



被告人ノ自白ヨリ最良ノ證據ハナシト云フヨリ東西共ニ拷問ノ制大ニ行ハレ  
 タリ然ルニ社會一層ノ進歩ヲ爲スニ從ヒ拷問ノ制モ漸次社會ノ信用ヲ失フ歐  
 州ニ於テハ前世紀ノ終ニ於テ全ク其跡ヲ絶テタリ而シテ殘存シタルモノハ自  
 由證據法及制限證據法是レナリ制限證據法トハ證據ノ効力并ニ證據ノ方法ヲ  
 法律ヲ以テ制限スルモノニシテ例ヘハ證人幾人ノ證言アレハ眞實トナスカ如  
 キハ證據ノ効力ヲ制限スルモノナリ又如何ナル證據方法ニアラサレハ眞實ナ  
 リト爲サ、ルカ如キハ證據方法ヲ制限スルモノナリ約言スレハ制限證據法ハ  
 法律ヲ以テ證據ノ許否并ニ之カ證據力ヲ制限スルモノニシテ法定ノ條件ニ合  
 セスンハ如何ナル證據アリト雖モ之ヲ採用スルコトナシ現今此主義ニ傾ケル  
 ハ英國證據法是レナリ英國法ニ於テハ判事ハ爭點事實ナリヤ將タ關係事實ナ  
 リヤヲ決定スルニ止マリ其眞實如何ヲ考覈スルニ及ハス即チ爭點事實ナルコ  
 トヲ決定スレハ其眞實ナルコトハ法律當然ノ効力トシテ判事ハ其間ニ嘴ヲ容  
 ル、コトヲ許サ、ルナリ此主義ニ反スルモノヲ自由證據法ト云フ此主義ニ依  
 レハ唯證據方法ニ制限ヲ置キ之カ證據力ノ判斷ヲ判事ニ放任シ全ク判事ノ自

刑

由ノ心證ヲ以テ判斷セシムルニ在リ案スルニ自由證據法ハ判事ノ專斷ニ流レ  
 易ク大ニ危險ナキヲ保セサルヲ以テ制限證據法ヲ用ヒタルモノナラン然レト  
 モ此主義ハ判事ヲシテ唯タ法律ノ奴隸タラシメ事實ニ適セサル裁判ヲ爲サシ  
 ムルコトアリ例ヘハ法律ニ於テ被告人ノ不利益ノ自白ハ證據タルヘシト爲ス  
 トキ若シ被告人故意ニ自己ニ不利益ナル不實ノ自白ヲ爲シタルトキハ判事ハ  
 其不實ナルコトヲ熟知セルニ拘ハラス尙ホ有罪ノ判決ヲ下サ、ル可カラズ是  
 レ實體上ノ眞實ヲ得ントスル主義ト兩立ス可キモノニアラス是ヲ以テ自由證  
 據法ハ大ニ歐洲大陸ニ行ハル、ニ至リタレトモ此主義ハ判事ニシテ法律ニ明  
 カナルトキハ好結果ヲ奏スヘキモ判事法律ニ不明ナルトキハ却テ恐ル可キノ  
 惡結果ヲ來スヘシ判事ノ人物論ヲ別ニシ制度ノ問題トシテハ自由證據法ヲ稱  
 贊セサルヲ得サルナリ

我刑事訴訟法ハ第九十條ニ被告人ノ自白官吏ノ檢證調書證據物件證人及鑑定  
 人ノ供述其他諸般ノ微憑ハ判事ノ判斷ニ任スト規定シ自由證據主義ヲ採用セ  
 ルコトヲ表明シタリ即チ我法律ニ於テハ苟クモ法定ノ證據方法ニ依ル以上ハ



如何ナル證據ハ爭點事實ニ適スルヤ否ヤ證據方法ノ證據力ノ有無ハ一ニ判事ノ判斷ニ任シタリ然レトモ左ニ述ル所ハ之カ二個ノ制限タルコトヲ得ヘシ

第一ハ判事ハ裁判所ニ提出セラレタル證據方法ニアラサレハ判斷ノ材料ト爲スコトヲ得サルコトニシテ是レ法律カ訴訟ニ口頭辯論主義ヲ採用スルノ結果ニ外ナラス即チ判事ハ裁判所ニ於テ直接ニ被告人ニ面接シ直接ニ證據物ヲ檢案シテ裁判ヲ言渡スノ主義ヲ採ル以上ハ裁判所外ニ於テ自己自カラ犯罪事實ヲ見聞スルモ證人トナルコトナシ是ヲ以テ判斷ノ材料ト爲シ得サルハ當然ナリ

第二ハ證據ノ形式ヲ具備シタルモノニアラサレハ判斷ノ材料ト爲スコトヲ得サルコトニシテ形式ヲ具備セサル證據ハ不法ノ證據方法ナレハ是ヲ以テ判斷ノ材料ト爲スコトヲ得サルハ無論ナル可シ例ヘハ第九十二條ノ如キ其最モ重モナルモノニシテ即チ檢證、搜索、物件差押又ハ證人被告人ノ訊問ニハ判事ト書記ト若シ裁判所外ニ於テ此等ノ處分ヲ爲ストキ書記ノ立會ヲ得サルトキハ二名ノ立會ナカル可カラス此手續ヲ履マスシテ爲シタル處分ハ凡テ無効タルコトヲ規定シタルヲ以テ從テ形式ヲ具備セサルモノヲ證據ト爲スコトヲ得サル

ヤ明カナリ又第二十條、第二十一條ノ規定ニ違背セル證書モ亦無効タル可シ然レトモ第四百四條ニ規定セル夜間ノ搜索ノ如キ必スシモ全然無効ナリトハ云ヒ能ハサル可シ何トナレハ此場合ニ於テハ法律ハ第九十二條ノ如ク處分ノ無効ナルコトヲ規定セス只ク爲シ得サルコトヲ規定シタルニ止マレハナリ之ヲ要スルニ法律カ明カニ効力ナシト規定シタル場合及若シ規定ニ從ハサレハ無効トナス可キコトノ意思顯ハル、場合ニハ判事タルモノハ須ラク其手續ヲ履マサル可カラス然ラスンハ其處分ハ不法ノモノトナリ從テ判斷ノ材料ト爲スコトヲ得サル可シ

夫レ斯ノ如ク口頭辯論主義並ニ形式ニ依ルノ制限ヲ除ク外ハ判事ノ自由ノ天地ニシテ判事ハ自己ノ信スル所ニ由リ自由ニ證據力ヲ判斷スルコトヲ得然レトモ如何ナル場合ニハ如何ナル證據アレハ十分ナリト爲スヘキヤニ就テハ復々學問上多少ノ議論アル可シ蓋シ人事ノ關係ハ必スシモ單純ナルモノニアラス如何ナル小事件ト雖モ複雑ニシテ幾多ノ關係ヲ諸所ニ惹起スルナル可シ況ンヤ法律上ノ證據ナルモノハ他ノ科學ノ如ク歲月ノ經過ヲ顧慮セサルモノニアラサルニ於



テオヤ若シ夫レ他ノ科學ノ研究ニ於ケルカ如ク幾年月ヲ積ムモ絶對的ノ眞實ヲ求メスノハ止マサラシメハ或ハ能ク一點ノ疑惑ナキマテ證據ヲ蒐集シ證據力ヲ調査スルヲ得ヘシト雖モ法律上ノ證據集取證據力ノ判斷ハ必スシモ斯ノ如キモノニアラス成ル可ク速カニ事件ノ處決ヲ望ムモノナレハ或ル限度ニ至ルマテ證據ヲ集取シ之カ證據力ヲ判斷シ得ハ是ヲ以テ満足セサル可カラス夫ノ明晰ニシテ一點ノ疑義ナシト云フカ如キ證據ハ到底法律上ノ證據ニ於テ望ムヘキ所ニアラス然ラハ判事ハ如何ナル限度ヲ以テ證據ヲ集取シ之カ證據力ニ付キ満足スヘキヤ他ナシ自ラ眞實ナリト認メ得ルノ限度即チ是レナリ換言スレハ證據ハ多々之レ有ルヘシト雖モ判事ニシテ集リタル證據ニ依リ犯罪事實ハ眞實ナリトノ感覺ヲ惹起シタルトキハ是レ即チ犯罪事實ノ證明セラレタルモノナレハ證據ノ集取ハ此點ニ達セサル可カラス此點迄達スレハ満足ス可キモノニシテ必スシモ明晰ニシテ何人モ疑念ヲ狹マサルノ點マテ證據ヲ集取スルニ及ハサル可ク又證據ヲ集取スルコト能ハサル可キナリ然レトモ俚諺ニ十八十色ト云ヘルカ如ク甲ノ眞實トスル所ハ乙ノ却ツテ不實トナス所ナル可ク乙ノ眞實トスル所ハ丙ノ却ツ

現行犯ノ豫審  
現行犯ノ意義

テ不實トナス所ナル可ク萬人ニ眞實トスル點ニ一致セシムルハ殆ント不能ノ業タル可シ從テ證據ノ判斷ヲ判事ノ心證ニ一任スルハ大ニ危險ナルノ感ナキ能ハサルナリ是レ或ハ制限證據主義ノ勢力アリシ所以ナル可シ終リニ臨ミ舉證ノ責任ニ付キテ一言ス可シ舉證ノ責任タル民事ニ於テハ甚々重シ而シテ民事ニ於テハ舉證ノ責任當事者ニアルモ刑事ニ於テハ當事者ニハ此責任ナシ即チ法律ハ第九十二條ニ於テ判事ハ凡テ證據ヲ集取スルコトヲ得ルモノト爲シタルヲ以テ舉證ノ責任ハ寧ロ判事ニ在リト云フ可ク被告人又ハ檢事ハ只タ證據ヲ申立ツルノ權アルニ止マリ證據ヲ舉グルノ責任ナシ

第五節 現行犯ノ豫審

第一款 現行犯ノ意義

刑事訴訟法第五十六條及第五十七條ハ現行犯ノ說明ヲ與ヘタリ然レトモ此說明ニ依リテ現行犯ト非現行犯トヲ區別スルハ太甚々難シ被告人ヲ逮捕シ拘引シ又ハ證人ヲ呼出シ又ハ證據物ヲ集取スルニハ以上ニ述ヘタル通常手續ニテハ時機ニ適セサルコトアリ於是乎止ムヲ得ス特別ノ處分ヲ許サ、ル可カラス是即チ現



行犯ノ特別處分ノ場合起ル所以ナリ第五十六條及第五十七條ハ一方ヨリ之ヲ看レハ特別處分ヲ許容スル場合トナルモ又他方ヨリ之ヲ看レハ特別處分ヲ制限シタル場合ト云フヲ得可シ換言スレハ同條ハ特別處分ヲ行ヒ得ル條件ヲ定メタルモノナリ特別處分ヲ行ヒ得ル條件左ニ述フル所ノ如シ

第一、現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發見シタルトキ 惟フニ是レ必要上ヨリ起リタル手續ナラン[現ニ行ヒ]トノ一句ハ之ヲ解スルニ易シト雖モ[現ニ行ヒ終リタル際]ト云フハ果シテ如何ナル場合ヲ云フカ法文上甚々明了ナラサルニ似タリ是ヲ以テ或ハ犯罪後二十四時間マテヲ云フトカ又ハ一週間以内ヲ云フトカ論スルモノアレトモ要スルニ現行犯ノ處分タル法律上止ムヲ得スシテ許容シタル特別處分ナレハ犯罪事實ト被告人トノ關係ヲ認ムルコトヲ得ル場合ニシテ時間ヲ以テ論ス可カラス例へハ被告人カ犯罪ノ場所ヲ去ラサルカ又ハ少シク犯罪ノ場所ヲ去ルモ尙ホ犯罪者ハ被告人ナリトノ斷定ヲ下シ得ル距離ニアルトキノ如シ(第五十六條)

第二、犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、トキ 讀ンテ字ノ如ク殆ント説

明ヲ要セス惟フニ本項ハ極メテ古代ノ思想ニ基ツキタルモノニアラサルナキカ何ソ其吾人ナシテ古代ノ村民カ鐘鼓ヲ鳴ラシ刀槍ヲ振ヒ盜賊ヲ追フノ狀ヲ想見セシムルヤ但シ法文ニ追呼トアルモ必スシモ呼號シテ犯人ヲ追フニハ及ハサル可シ又法律ハ犯人追呼セラル、場合ヲ想像シテ犯人カ被害者ヲ追呼スル場合ニ想ヒ及ハサリシハ缺點ト云フ可シ

第三、兇器、贓物其他ノ物件ヲ携帯シ又ハ身體被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キトキ 茲ニ議論アルハ贓物ナル文字ノ解釋是レナリ或人曰ク贓物トハ強竊盜ニ依リテ得タル物件ヲ云フト然レトモ此說非ナリ何故ニ贓物ハ強竊盜ニ依リテ得タルモノニ限ルカ法律別ニ明定スルコトナシ唯刑法第三百八十九條聊カ此說ヲ強ムルノミ然レトモ贓物ニ關スル罪ト題スル條下ニハ必スシモ強竊盜ニ依リ得タル物ノミヲ規定セス詐僞取財其他ノ犯罪ニ關シ得タル物ヲモ規定シタリ故ニ贓物トハ廣ク犯罪ニ關シタル物件ナリトノ意義ニ解スルヲ至當ト信ス

本項モ亦不完全タルヲ免レス單ニ兇器、贓物等ヲ携帯セル場合ノミヲ規定シテ



是等ノ物ヲ家宅内ニ藏匿スル場合若シハ運搬スル場合ヲ規定スルコトナシ實際家ノ屢々此範圍ヲ擴メントスルノ傾アルハ畢竟規定ノ狹隘ナルノ缺點ニ歸セサルヲ得サルナリ

第四、家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ本項ハ時ニ制限ナシ犯罪後何時間經過スルモ將タ何日間經過スルモ毫モ本項ノ問フ所ニアラス是レ佛國刑事訴訟法ヨリ來ル所ノ規定ナリ(以上第五十七條)

以上ハ即チ現行犯トシテ特別處分ヲ行ヒ得ル條件ナリ是等ノ條件タル甚タ狹キニ失シ大ニ實用ヲ缺クコトアリ例ハ雇人カ主人ノ金錢ヲ消費シ主家ヨリ逃亡シ後主人カ途上ニ於テ其雇人ト邂逅シタルトキノ如キ又ハ雇人自ラ犯罪ヲ行ヒ他ニ犯人アルカ如ク粧ヒタルモ後警察官ノ詰問ニ逢ヒ遂ニ犯罪人タルコトヲ自白シタル場合ニ於テハ特別處分ヲ行フノ必要アルモ現行ノ法律ニ於テハ是ヲ以テ特別處分ノ條件ト爲サ、ルヲ以テ勢ヒ非現行犯ノ處分ニ依ラサル可カラス斯ク我法律ノ規定ノ狹クシテ實用ヲ缺クコトアルハ職トシテ時ノ點ノミヲ顧ミテ

他ノ點ヲ顧ミサルニ由ラスンハアラス近來ノ法律ヲ參照スルニ概ネ時ヲ以テ標準ト爲サス必要ノ場合ニハ特別處分ヲ行ヒ得ルモノト爲セリ抑モ特別處分タル通常手續ニ對スル一ノ例外ナレハ極メテ止ムヲ得サル場合ニ用ユルハ至當ナレトモ我法律ノ如ク例示的ノ規定ヲ設クルハ立法ノ當ヲ得タルモノニアラサルナリ法律ハ須ラフ抽象的タル可シ教科書ノ如ク講義録ノ如ク例示的ノ文字ヲ排列スルハ徒ラニ後日ノ紛擾ヲ招クニ過キサルナリ後ノ立法者タルモノ一顧ノ勞ヲ採リテ可ナリ

英國法ヲ案スルニ判事ノ令狀ナクシテ警察官カ直チニ被告人ト認ム可キ者ヲ逮捕シ得ルハ(一)目前ニテ平和ヲ破リタル者(二)反逆罪又ハ重罪ヲ犯シタリト認ム可キ相當ノ嫌疑アル者(三)往來ニ於テ他人ノ身體財產ニ對シ危害ヲ加フルノ恐アリ又ハ加ヘタリト認ム可キ相當ノ嫌疑アル者(四)ロンドン並ニ其近傍ニ於テ日没後ヨリ日出前ノ間ニ於テ往來ヲ彷徨シ又ハ地上ニ横臥セル者ニシテ警察官ヨリ訊問ヲ受ケ而シテ相當ノ辯解ヲ爲シ能ハサル者は是レナリ

佛國刑事訴訟法ハ之ヲ其第十一條及第十三條ニ規定シ特ニ第十三條ハ範圍ヲ擴



メテ往來ニ於テ屍體ヲ發見シタルトキハ之ヲ現行犯トシテ處分スルモノト爲セ  
リ然リトモ大體ニ於テ現行法ト異ナルコトナシ  
獨國刑事訴訟法ニハ現行犯ノ規定ナシ只ク緊急ナル場合ニハ特別處分ヲ行ヒ得  
ルモノト爲セリ

我刑事訴訟法ハ佛國法ニ倣ヒ而シテ其範圍ナ一層狹隘ニ爲シタルモノト云フ可  
シ

### 第二款 現行犯ノ特別處分

現行犯ノ  
特別處分

第一、現行犯ノ特別處分法ヲ行ヒ得ル人ハ左ノ如シ

一、豫審判事 刑事訴訟ノ手續ヲ看ルニ人ヲ逮捕シ證據ヲ集ムルハ一ニ豫審  
判事ナリ故ニ豫審判事カ現行犯ノ場合ニ特別處分ヲ爲シ得ルハ素ヨリ其所  
ニシテ特別ト云フ可キモノニアラス特別ト稱ス可キハ當ニ以下ノ人々ナル  
可シ

二、地方裁判所ノ檢事及區裁判所ノ檢事(第四百四十四條及第四百四十五條)

三、司法警察官(第四十七條及第五十八條)

### 四、巡查憲兵卒(第五十九條)

### 五、通常人(第六十條)

第二、現行犯ノ特別處分ノ手續及特別處分ノ區域ハ以上ニ述ヘタル五個ノ人ニ  
由リテ差異アルヲ以テ余ハ各別ニ各個ノ人ノ爲シ得ル特別處分ニ付テ分説セ  
ントス

#### 一、通常人

通常人カ爲シ得ル特別處分ハ先ツ犯罪ノ種類ヨリ云ヘハ重罪又ハ禁錮以上  
ノ刑ニ該ル輕罪ノ現行犯ナラサル可カラス故ニ罰金ノ刑又ハ違警罪ニ該ル  
現行犯者アリトモ之レニ對シテ特別處分ヲ行フコトヲ得ス(第六十條)

重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルトキハ直チニ被告人ヲ逮捕  
スルコトヲ得之ヲ逮捕シタルトキハ司法警察官ニ引致セサル可カラス若シ  
引致スルコトヲ得サルトキハ自己ノ氏名、職業、住所及其逮捕ノ事由ヲ陳述シ  
假リコ之ヲ巡查憲兵卒ニ引渡スコトヲ得此場合ニハ速ニ告訴告發ヲ爲サ、  
ル可カラス(第六十一條第一項及第二項)



此場合ニ於テ被告人又ハ巡查憲兵卒カ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求メタルトキ逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求メテ拒ムコト得ス(第六十一條第三項)

通常人ハ逮捕シタル被告人ヲ直ニ檢事又ハ豫審判事ニ引渡スコトヲ得ルヤ否ヤニ付テ法律ハ規定スル所ナシ然レトモ規定ナシトテ之ヲ引渡スハ別ニ差支ナカル可シ特ニ檢事ニ引渡スニ至リテハ一層其然ルヲ見ル

二、 巡查憲兵卒

巡查憲兵卒ハ其職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ令狀ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

(第五十八條第一項)

罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ即決ヲ爲ス可キ官署ニ告發シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢事若クハ官署ニ引致スルコトヲ得(第五十八條第二項)

第五十八條及第百十九條ニ依ルニ罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯ノ場合ニハ檢事又ハ即決官署ニ告發ヲ爲ス可シトシ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯者ヲ逮捕シタルトキハ速カニ之ヲ司法警察官ニ引致シ其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シトアルヲ以テ巡查憲兵卒ハ司法警察官ニ告發ヲ爲サ、ル可カラス

三、 司法警察官

司法警察官カ現行犯罪アルコトヲ知リタルトキハ其手續ハ巡查憲兵卒カ現行犯アルコトヲ知リタルトキノ手續ト異ナルコトナキモ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯者ヲ逮捕シタルトキ告發ス可キカ事件ヲ何レニ移送ス可キカヲ規定セス告發ニ付キテハ既ニ之ヲ論シタリ事件ハ何レニカ移送セサル可カラス即チ第百四十七條ノ手續ニ依ラサルヲ得サル可シ  
刑事訴訟法第百四十七條ヲ看ルニ第百四十四條第百四十六條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假リニ之ヲ行フコトヲ得但拘留狀ヲ發スルコトヲ得ス司法警察官ハ證據書類ニ意見書ヲ添へ速ニ之ヲ管轄裁判所ノ檢



事ニ送致シ且ツ被告人ヲ逮捕シタルトキハ共ニ之ヲ送致ス可シトアリ而シテ第四百四十四條ニ

地方裁判所検事及區裁判所検事ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得云々

トアリ又第四百四十六條ヲ看ルニ

區裁判所ノ檢事其裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ第四百四十四條ニ規定シタル處分ヲ爲スコトヲ得若シ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發シタルトキハ三日内ニ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

トアリ更ニ第五十八條ヲ看ルニ

司法警察官其職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ令狀ヲ待スシテ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢事違警罪ニ付テハ即決ヲ爲スヘキ官署ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢事若クハ官署ニ引致スルコトヲ得

トアリ以上ノ三ヶ條ヲ合スルトキハ司法警察官ハ如何ナル種類ノ現行犯ニ付キ如何ナル處分ヲ爲シ得ルヤヲ知ルヲ得ヘシ即チ地方裁判所并ニ區裁判所ノ檢事ノ爲シ得ル凡テノ手續ヲ爲スヲ得而シテ地方裁判所并區裁判所ノ檢事ハ豫審判事ノ爲シ得ル凡テノ手續ヲ爲シ得ルカ故ニ司法警察官ハ豫審判事ノ爲シ得ル凡テノ手續ヲ爲スヲ得可シ但下ニ舉クル手續ハ爲スヲ得ス  
(一)罰金及費用賠償ノ言渡(二)證人及鑑定人ヲシテ宣誓セシムルコト(三)勾留狀ヲ發スルコト是レナリ是故ニ勾留狀證人鑑定人ノ宣誓ト罰金及費用賠償ノ言渡ノ三訴訟手續ヲ除ケハ其他ハ豫審判事ノ爲シ得ル手續ハ凡テ司法警察官之ヲ爲スコトヲ得

司法警察官ハ勾留狀ヲ發シ得サルコト右述フル所ノ如シ然ルニ呼出狀又ハ



勾引狀ハ之ヲ發スルコトヲ得ルヤ否ヤニ關シテ積極消極ノ二説アリ今一步  
 ナ積極説ニ讓リ司法警察官ハ呼出狀又ハ勾引狀ヲ發シ得トスルモ司法警察  
 官ハ如何ナル呼出狀又ハ勾引狀ヲ發セントスルカ呼出狀又ハ勾引狀ニハ一  
 定ノ形式アリ法定ノ形式ヲ履マサレハ合狀タルノ効力ナシ現行犯ノ場合ニ  
 於テ果シテ能ク是等ノ形式ヲ具備セル合狀ヲ發スルコトヲ得ルカ疑ヒナキ  
 ナ得サルナリ之ヲ要スルニ司法警察官ハ呼出狀又ハ勾引狀ヲ發スルコトヲ  
 得ストスルヲ正當ナリトス

法律ノ缺點ハ被告人ノ逮捕及物件搜索ノ手續ニ於テ見ルコトヲ得ヘシ例ヘ  
 ハ司法警察官カ被告人ヲ往來ニ於テ逮捕セントシ之ヲ追行セシモ被告人ハ  
 家宅内ニ逃レ入りタルトキノ如シ日出後日没前ナレハ司法警察官ハ容赦ナ  
 ク家宅内ニ闖入シテ被告人ヲ逮捕シ得レトモ若シ日出前日没後即チ夜間ナ  
 ルトキハ司法警察官ハ最早闖内ニ入ルコトヲ得サル可シ現行犯ノ場合ニ於  
 テハ特別ノ處分ヲ許サ、ル可カラサルニ法律ハ通常人カ人ヲ逮捕スル場合  
 ト司法警察官カ人ヲ逮捕スル場合トヲ區別セサルヲ以テ右ノ如キ不都合ヲ

刑

生スルナリ物件搜索ニ付キテモ亦是レト異ナルコトナシ  
 上來論述セル如ク司法警察官ハ二三ノ例外ヲ除キ他ハ豫審判事ニ屬スル凡  
 テノ處分ヲ爲スコトヲ得ルモ猶ホ茲ニ二三ノ問題アリ

第一ハ第四百四十二條第二項ノ規定是レナリ該條ニ曰ク豫審判事ハ犯所ニ臨  
 檢シ合狀ヲ發シ其他此章ノ規定ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得ト是ヲ以  
 テ現行犯ノ搜查ト豫審處分トヲ區別セントスルノ説起レリ而シテ此説ヲ主  
 張スル者ハ豫審判事ハ犯所ニ臨檢スルニアラサレハ豫審處分ヲ爲スヲ得ス  
 ト論スレトモ犯所ニ臨檢スルハ必スシモ必要ナル手續ニアラス例ヘハ被告  
 人カ犯所ヲ離レテ裁判所ノ方向ニ進ミ來リタルトキノ如キハ判事ハ必スシ  
 モ犯所ニ臨檢セサル可カラサルノ必要ナカル可シ只夫レ現行犯ノ場合タル  
 事機切迫スルモノアルヲ以テ多クハ犯所ニ臨檢スルノミ之ヲ以テ判事カ現  
 行犯ニ於ケル特別處分ノ一條件ト爲スハ余其可ナルヲ知ラサルナリ第二ハ  
 司法警察官カ通常人又ハ巡查憲兵卒ヨリ現行犯ノ被告人ヲ受取りタルトキ  
 ハ尙ホ之ヲ現行犯人トシテ現行犯ノ手續ヲ續行スルヲ得ルヤ否ヤノ問題は



レナリ或控訴院ノ裁判例ハ之ヲ非現行犯ト爲シタルモ是レ恐クハ誤謬ナラ  
 ン刑事訴訟法第四百十二條以下ノ規定ニ依レハ特別處分ヲ爲シ得ルハ豫審  
 判事、檢事及司法警察官ノ三者アルノミ通常人又ハ巡查憲兵卒ハ唯第五十八  
 條第六十條ノ處分ヲ爲スコトヲ得ルノミ故ニ其他ノ處分ヲ必要トスルトキ  
 ハ此等ノ者ハ司法警察官ニ依テナル可カラス司法警察官カ特別處分ヲ爲ス  
 ニ當リ人ニ因リ知リタルト自カラ知リタルトニ由リ區別ス可キ理由ナク巡  
 査憲兵卒ハ現行犯ノ被告人ヲ逮捕シ司法警察官ノ面前ニ引致スルト現場ニ  
 拘留シ一面司法警察官ニ現行犯アルコトヲ通知シ司法警察官現場ニ出張シ  
 被告人ヲ逮捕シタルトニ依リ其後ノ手續ニ區別アル可キ理由ナケレハ此等  
 ノ場合ヲ非現行犯ト爲スノ非理タルヲ認ム第三ハ共犯人數名アルトキ一人  
 ニ對シテ現行犯ノ處分ヲ爲シタルトキハ尙ホ其他ノ共犯人ニ對シテモ現行  
 犯ノ處分ヲ爲スヲ得ルヤ否ヤノ問題はレナリ余ハ爲シ得ヘシト信ス其事件  
 ニ付キ如何ナル程度迄證人鑑定人ヲ呼出ス乎ハ全ク司法警察官ノ見込ナリ  
 如何ナル物件ヲ搜索差押ユ可キ乎ハ全ク司法警察官ノ判斷ナリ獨リ共犯人

ニ對シテノミ處分ヲ爲スヲ得サル理由ナケレハ既ニ一人ニ對シ現行犯處分  
 ヲ着手シタル以上ハ他ノ共犯人ニ對シテモ特別處分ヲ爲スコトヲ得ト信ス  
 司法警察官被告人ヲ逮捕シタルト否トニ關セズ事件ノ取調ヲ終リタルトキ  
 ハ他人ヨリ事件ヲ受取ルト自己自カラ取調ヲ爲シタルトヲ問ハス法文上儼  
 點アルモ第五十八條、第四百十七條第二項ニ依リ相當ノ官署ニ事件ヲ移送セ  
 サル可カラス

四、區裁判所檢事

區裁判所ノ檢事ハ現行犯罪アルコトヲ知リタルトキハ其事件地方裁判所ノ  
 管轄ニ屬スルト區裁判所ノ管轄ニ屬スルトヲ問ハス現行犯トシテ特別處分  
 ナ行フコトヲ得但罰金以下ノ刑ニ該ル可キ現行犯罪ニ付テハ司法警察官ノ  
 處分ト異ナルコトヲキテ信ス  
 斯ク區裁判所ノ檢事ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルト將テ區裁判所ノ管轄ニ  
 屬スルトヲ問ハス特別處分ヲ行フヲ得ルモ(一)證人鑑定人ノ宣誓(二)罰金費用  
 賠償ノ言渡ハ之ヲ爲スヲ得ス其他ハ豫審判事ノ職權ト異ナルコトナシ(第百



四十四條

區裁判所ノ檢事自ラ手續ヲ爲ストキハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ニ付テハ第四百十五條ノ規定ニ依リ速ニ之ヲ地方裁判所ノ檢事ニ送致セサル可カラス又區裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ニ付テハ第四百十四條ニ規定シタル處分ヲ爲シ若シ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發シタルトキハ三日内ニ起訴ノ手續ヲ爲サ、ル可カラス(第四百十六條)

地方裁判所ノ事件ト區裁判所ノ事件トヲ問ハス區裁判所ノ檢事ハ特別處分ヲ行ヒ得ルモ司法警察官カ現行犯ノ特別處分ヲ爲シタルトキハ如何ナル手續ニ依リテ自己ノ管轄ニ屬スル事件ノ移送ヲ受ク可キヤ法律此點ニ於テ缺如セリ

地方裁判所ノ檢事カ區裁判所ノ檢事又ハ司法警察官ヨリ事件ノ移送ヲ受クルノ手續ハ(第四十八條)區裁判所ノ檢事カ其裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ヲ司法警察官ヨリ受クル手續ニ準用スルヲ得ヘシ或ハ法律ニ明文ナシ故ニ準用スルヲ得スト爲ス者アレトモ余ハ止ムヲ得サル結果ナリト信ス

五、地方裁判所ノ檢事

地方裁判所ノ檢事ハ其裁判所ノ管轄ニ屬スル重罪又ハ輕罪ノ現行犯ニ限リ特別處分ヲ爲スコトヲ得(第四百十四條ノ裏面ヨリ來ル)

地方裁判所ノ檢事ハ右ノ犯罪アルコトヲ知リタルトキハ其事件急速ヲ要スルトキハ豫審判事ニ通知シテ犯罪ニ臨檢スルコトヲ得但此通知ヲ爲サ、リシトテ必スシモ不法ノ處分トハナラサル可シ

地方裁判所ノ檢事ハ凡テ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得ルモ(一)證人鑑定人ノ宣誓(二)罰金又ハ費用賠償ノ言渡ハ之ヲ爲スヲ得ス

地方裁判所ノ檢事ハ區裁判所檢事又ハ司法警察官ヨリ事件ノ送致ヲ受ケタルトキハ一切ノ書類ニ請求書ヲ添へ豫審判事ニ送致セサル可カラス若シ同時ニ被告人ヲ受取リタルトキハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ或ハ勾留狀ヲ發ス可ク或ハ勾留狀ヲ發セスシテ豫審判事ニ送致ノ手續ヲ爲サ、ル可カラス(第四百十八條)

斯ク區裁判所檢事、司法警察官ヨリ被告人ノ送致ヲ受ケタルトキハ二十四時



内ニ之ヲ訊問ス可キモ自ラ現行犯ノ處分ヲ爲シタルトキハ如何余ハ第四百十八條ノ準用ヲ主張セサルヲ得ス

特別處分ヲ爲シタルカ爲メ訴訟起リタルモノト認ムルヲ得サルカ故ニ地方裁判所ノ檢事ハ何レノ場合ニ於テモ事件罪トナル可キモノト認メタルトキハ重罪ナレハ必ス豫審ヲ求メ輕罪ト認メタルトキハ其見込ニヨリ豫審ヲ求メ若シ豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタルトキハ直チニ其裁判所ニ起訴シ若シ被告事件罪トナラス又ハ公訴受理スヘカラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス(第四百四十九條)

### 六、豫審判事

豫審判事ハ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯ニ付キ特別處分ヲ行フコトヲ得故ニ禁錮以上ノ刑ニ該ルトキハ現行犯罪ノ外特別處分ヲ爲シ得サルコト明カナリ

豫審判事カ特別處分ヲ行フ場合ニ於テ通常ノ場合ト異ナルハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノト爲スコト

是レナリ是レ一例外ト云フ可シ此手續タル治罪法ノ時代ニ於テハ理論ノ間然スヘキ所ナシ何トナレハ舊法ニ於テハ豫審判事ヲ以テ檢事ト同シ司法警察官ノ一トナシタレハナリ然レトモ現行ノ構成法及刑事訴訟法ハ判事ト檢事ノ職務トナ劃然區別シ檢事ヲ以テ起訴者トナシ判事ヲ以テ純然タル裁判官ト爲シタルヲ以テ豫審判事ノ檢證調書ノ調製ヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノト爲スハ稍々其理由ナクニ至レリ(第四百四十三條)  
右ノ例外ヲ除ケハ通常豫審手續ト異ナルコトナシ(第四百四十三條第二項)

### 第六節 豫審終結

豫審終結

以上ヲ以テ余ハ所謂豫審處分即チ證據集取ノ處分ヲ講了セルカ故ニ以下豫審判事カ豫審ノ終結ヲ爲ス可キ手續ヲ講セサル可カラズ即チ事件ヲ公判ニ付スルカ又ハ被告人ヲ免訴スルカノ決定ヲ爲ス可キ手續ヲ論セサル可カラズ  
豫審ヲ終結スルノ手續ニアリ第六十三條及第三百十五條ノ手續是レナリ詳言スレハ豫審判事一人ニテ從來取調ヘタル事件ニ付キ決定ヲ與フルト豫審判事ハ只タ證據物ヲ集取スルノ手續ヲ爲スニ止マリ自ラ之ヲ終結スルコトナク裁判所



カ之ヲ終結スルノ手續トノ二アリ前者ハ普通ノ場合ニ用サラル、手續ニシテ後者ハ大審院ノ特別權限ニ屬スル事件ニ限リ用サラル、手續ナリ何故ニ普通事件特別事件トノ間ニ斯ノ如キ手續ノ差異アルヤ其理由及ヒ沿革ナクンハアラス先ツ沿革ヨリ言ヘハ是レ佛獨法律ヨリ來レリ英國法律ニ於テハ嘗テ述ヘタル如ク二十四名ノ陪審官カ重罪事件トシテ公判ニ付スヘキヤ否ヲ決定スルモ右ハ同國固有ノ法律ニシテ以テ我法律ノ參照トナスニ足ラス唯タ茲ニ關係ナ有スルハ佛獨ノ刑事訴訟法ナリ佛國ニ於テハ一千八百五十六年マテ事件ノ重輕罪ヲ問ハス豫審判事ハ證據ヲ集取スルニ止マリ合議ノ裁判所之カ終結ノ決定ヲ爲シタリシモ同年ニ及ヒテ此手續ヲ一變シ輕罪事件ニ付テハ豫審判事一人ヲシテ證據ヲ集取シ及終結ノ決定ヲ爲サシメタリ我治罪法ハ此法律ニ倣ヒタルヲ以テ同一轍ニ出テタリ獨逸ニ於テハ佛國ニ於テ法律ヲ一變シタルノ先例アルニ拘ハラス一千八百七十九年ノ實施法律ニ於テ猶ホ合議體ノ裁判所ヲシテ終結ノ決定ヲ爲サシム我現行法ハ佛獨二法ヲ採リ普通ノ事件ニ付テハ佛國法ニ倣ヒ單獨ノ判事豫審終結ノ決定ヲ爲シ大審院ノ特別事件ニ付テハ獨國法ニ倣ヒ合議體裁判所カ豫審終

刑

結ノ決定ヲ爲スコトヲ規定セリ最モ第三百十五條ニハ大審院ニ於テハ檢事總長ノ意見ヲ聽キ先ツ其事件ヲ公判ニ付ス可キヤ否ヤヲ決定スヘシトアリテ終結ノ文字ナシト雖モ是ヲ以テ豫審ノ終結ノ決定ニアラスト看做スコトヲ得サル可シ沿革上ノ理由ハ右ニ述フル所ノ如シ何故ニ斯ノ如キ區別ヲ採リタルカト釋スルニ鄭重ヲ要スルト迅速ヲ重ニスルノ理由ニ出テサル可シ重大ナル事件ニ付テハ輕々ニ一人一己ノ意見ヲ以テ事件ヲ左右セシメス合議ノ府ヲシテ之ヲ商議セシムルヲ可トス是レ大審院ノ特別事件ニ付キ特ニ判事一人ヲシテ終結セシメス裁判所ヲシテ終結ヲ爲サシムル所以ナラン然レトモ事件ノ稍輕微ナルモノニ至リテハ必スシモ合議ノ如キ鄭重ナル手續ヲ履ムヲ要セス單獨判事ヲシテ終結セシムル方寧ロ迅速ニ事件ノ落着ヲ看ルヲ得シ是レ普通事件ニ付キ一人ノ豫審判事ヲシテ豫審ノ終結ヲ爲サシムル所以ナラン之ヲ一片ノ理論トシテ聽クトキハ我現行法ノ規定タル甚タ理由アルモノ、如シト雖モ之ヲ實際ニ照ラシテ果シテ如何アル可キカ單獨判事ヲシテ豫審ヲ終結セシムルハ便ハ即チ便ナリ迅速ハ即チ迅速ナリト雖モ尙ホ重大事件ノ豫審ヲ一人ニテ終結セシムル果シテ如何余輩敢



テ判事ノ能否ヲ論スルニアラスト雖モ豫審ノ終結ハ名ハ決定タリト雖モ其實ハ中間判決ト異ナルコトナシ特ニ佛國ノ先例ヲ看並ヒニ獨國ノ制度ヲ看ルモ少トモ重罪事件ニ付テハ單獨判事ニ一任セス裁判所ヲシテ之レカ決定ヲ與ヘシムル方妥當ヲ得ルニ非サルナキカ諸君ハ須ラク其利害ニ付テ研究セラル可シ立法上ノ議論ハ措テ論セス我法律ニ於テハ普通ノ事件ニ付テハ輕罪タルト重罪タルトヲ問ハス豫審判事一人ニテ豫審ヲ終結ス可キモノトス豫審判事ハ豫審ニ着手シタルヨリ終結ニ至ルマテ終始同一ナルヲ要スルヤト云フニ公判判事ニ付キテハ同一ノ判事出席ヲ要スルコトハ第二百九條ニ規定アルモ豫審判事ニ付テハ斯ル規定ナシ從ツテ豫審判事ハ必スシモ終始同一人ナルヲ要セス訴訟進行中何度變更スルモ差支ナシ豫審判事ハ一回モ被告人ヲ訊問スルコトナシテ豫審ヲ終結スルコトヲ得ルヤ書面主義ヨリ云ヘハ或ハ之ヲ得ヘシ然レトモ口頭辯論主義ニ於テハ亦被告人ノ防衛權ヲ認メサル可カラズ故ニ一回モ被告人ヲ訊問スルコトナシテ豫審ヲ終結スルコトヲ得ス從テ訴訟進行中判事ニ變更アリタルトキハ更ニ新クニ取調ヲ爲サ、ル可カラズト信ス

借從來取調ヘタル證據物并ヒニ事實ニ付キ豫審判事ハ如何ナル區域マテ決定ヲ與フルコトヲ得ルヤ又如何ナル人ニ對シテ決定ヲ與フルコトヲ得ルヤニ付テ述ヘン

先ツ人ヨリ云ヘハ檢事ノ起訴シタル人ニ對シテ爲サ、ル可カラズ或ハ事件論者ノ如ク或ハ一人ニ對スル豫審ハ共犯者ニ對スル豫審ナリトノ說ノ如ク一人ニ對シテ豫審ヲ爲シタリトテ他ノ共犯者マテモ豫審ノ終結ヲ爲シ得ルモノニアラス訴ハ人ニ對スルモノナルコトハ最早論ナカル可シ豫審ハ一ノ訴ナリ治罪法ニ於ケルカ如ク司法警察官ノ行フモノニアラス現行法ニ於テハ純然タル獨立ノ裁判官カ裁判ス可キ一ノ訴ナリ其目的ハ公判ノ準備ヲ爲スニ在リ故ニ檢事ヨリ起訴シタル人ニ對スルニ非サレハ豫審ヲ終結スルコトヲ得サルハ理ノ最モ賅易キ所ナリ但シ訴ナクシテハ其共犯人ヲ取調フルヲ得スト云フニアラス訴ナクシトモ其共犯人ヲ取調フルハ素ヨリ裁判官ノ自由ナリ即チ判事ハ訴ヲ受ケタル人ノ犯罪ヲ明白ナラシムル爲メ其共犯人ヲ取調フルコトヲ得ルモ其共犯人ノ犯罪ノ事實ハ如何ニ明白ニシテ疑ナシト雖モ檢事ノ起訴アルニ非サレハ其人ニ對シテ豫審終結



ノ決定ヲ爲スヲ得サルナリ

豫審判事カ決定ヲ爲ス可キ區域ハ檢事ノ起訴シタル範圍ニ止マラサル可カラス  
只タ此レカ例外トナルハ現行犯ニ付キ豫審判事直チニ豫審ニ着手シタルトキニ  
限リ其他ノ場合ニ在リテハ決定ノ範圍ハ檢事ノ起訴ノ範圍ニ止マリ其以外ニ出  
テ、決定ヲ與フルコトヲ得ス然レトモ裁判所ノ慣例ニ依レハ檢事ハ如何ナル區  
域マテ起訴シタリヤ甚ダ曖昧ナリト云ハサルヘカラス例ヘハ被告人某ハ強盜罪  
ヲ犯シタリ因ツテ豫審ヲ求ムト云フカ如キ簡短曖昧ナル請求ナレハ如何ナル區  
域マテ檢事ハ起訴シタルモノナルヤ誠ニ判別ニ苦マサルヲ得サルナリ此點ニ關  
スル詳細ノコトハ前ニ講述シタル公訴ト裁判トノ關係ヲ參照セラル可シ余ハ茲  
ニ反覆スルノ勞ヲ採ラサルナリ

豫審判事其事件ニ付キ決定ヲ爲スヘキ範圍ハ右ニ陳フル所ノ如シ而シテ判事ノ  
決定ヲ下スニ當リテ第一ニ注意スル可キハ公訴ハ受理ス可キモノナリヤ否ヤノ  
點ニシテ(第六十九條)第二ニ注意ス可キハ管轄違ニ非サルヤノ點ナリ即チ事物  
并ニ土地ノ點ニ付テ管轄ナリヤ將タ管轄違ナルヤ否ヤヲ調査セサル可カラス事

物ノ點ニ付キ管轄違即チ大審院ニ屬ス可キ事件ニアラサルヤ否ヤ又ハ區裁判所  
ニ屬ス可キ違警罪事件ニアラサルヤ否ヤヲ調査セサル可カラス然レトモ此際事  
件ノ併合ニモ亦注意セサル可カラス即チ大審院ノ特別權限ニ屬スル事件ト通常  
事件ト并ヒ起リタルトキハ大審院ハ之ヲ合セテ管轄スルコトヲ得又違警罪ト重  
罪事件ト並ヒ起リタルトキハ共ニ豫審ノ終結ヲ爲サ、ル可カラサルカ如シ次ニ  
土地ノ管轄違ニ付テハ別ニ茲ニ例示スルニ及ハサル可シ斯ノ事物并ニ土地ノ點  
ニ於テ管轄違ニアラスト認メタルトキハ第三ニ初メテ免訴スルカ又ハ公判ニ移  
送ス可キカノ問題ヲ生ス此問題ハ事實並ヒニ法律ノ二點ニ別ル

一、事實ノ點ニ付テハ裁判官十分ニ取調ヘサル可カラス元來裁判官ハ訴ヲ裁  
判スルモノナレハ原告官タル檢事ニ舉證ノ責任アルモ實體ノ眞實ヲ主トスル  
公訴ノ證據集取ハ人ノ自由ニ關係スルヲ以テ我法律ハ檢事ニ之ヲ爲サシメス  
裁判官ニ一任セリ是ヲ以テ檢事ノ起訴ハ無證據ナリ極端ニ云ヘハ檢事ハ一ノ  
證據ヲ舉グルコトナシ自己ノ意見ノミヲ以テ裁判所ニ公訴ヲ提起スルモノト  
云フコトヲ得可シ是故ニ裁判官自ラ進メテ訴訟ニ付キ諸般ノ證據ヲ集取セサ



ル可カラス檢察官ノ起訴ニシテ無證據ナルカ故ニ免訴スト云ハ、天下ノ犯罪殆  
 ノト免訴トナラサルモノナカラン然レトモ斯ノ如キハ裁判官ノ職務ヲ忘却シ  
 タルモノト云ハサル可カラス裁判官ハ起訴ノ事實ニ付キ證據ヲ集取シタル上  
 檢事ノ起訴ハ果シテ事實ト符合スルヤ否ヲ調査セサル可カラス檢事ノ起訴ニ  
 シテ一タヒ裁判官受理シタル以上ハ裁判官ノ自由ナル判斷ニアルヲ以  
 テ裁判官ハ檢事ノ請求アルト否トニ拘ハラズ訴ヘラレタル範圍内ニ於テ凡テ  
 ノ點ニ付キ證據ヲ集取シ其集取シタル證據ニ由リ凡テノ點ヨリ罪ト爲ルヘキ  
 ヤ否ヲ調査セサル可カラス而シテ何レノ點ヨリモ事實上證據ナキトキ始テ證  
 據不十分ナリト云フ可ク若シ證據アルトキハ之ヲ公判ニ移送セサル可カラス」  
 二、法律ノ點 事實ノ點ニ於テハ十分ニ犯罪ノ證據アリトスルモ法律ノ點ニ於  
 テ果シテ犯罪トナルヤ否ヤヲ調査セサル可カラス即チ第六十五條ノ第二號  
 以下ノ項目ニ付テ取調ヘサル可カラス

斯ノ如ク豫審判事ハ事實并ヒニ法律ノ點ヨリ調査シ來リ第六十五條ノ各項ノ  
 一ニ當ルトキハ之ヲ免訴放免シ若クハ犯罪ノ證據十分ニシテ法律上罪トナルモ

ノト認ルトキハ公判ニ移送スルノ手續ヲ爲サ、ル可カラス即チ

- 一、 被告事件違警罪ナリト思料シタルトキハ之ヲ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲サ  
 サル可カラス(第六十六條)
- 二、 構成法第十六條第二號ニ記載シタル輕罪ナリト思料シタルトキハ區裁判  
 所ニ移ス言渡ヲ爲シ其他ノ輕罪ナリト思料シタルトキハ其裁判所ノ輕罪公  
 判ニ付スル言渡ヲ爲サ、ル可カラス(第六十七條)
- 三、 重罪ナリト思料シタルトキハ其裁判所ノ重罪公判ニ付スル言渡ヲ爲サ、  
 ル可カラス(第六十八條)
- 四、 大審院ノ特別權限ニ屬スルトキハ大審院ニ於テ其裁判所ニ移スヘキヤ否  
 ヤヲ決シ若シ普通事件ナリト思料シタルトキハ其裁判所ヲ指定ス(第三百十  
 五條)

右ノ決定ヲ爲スニ付キ裁判官ハ違警罪又ハ罰金ノ刑ニ該ル者ト思料シタルトキ  
 被告人拘留ヲ受ケタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲シ禁錮ノ刑ニ該ル可キモノト思料  
 シタルトキハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得若シ被告人未ダ拘留ヲ受ケサ



ルトキハ令狀ヲ發スルコトヲ得(第六十七條)重罪ナリト思料シタルトキハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタルトキハ其言渡ヲ取消シ被告人未ダ拘留ヲ受ケサルトキハ令狀ヲ發セサル可カラズ(第六十八條)

是レヨリ決定ヲ爲ス手續ヲ述ヘンニ裁判官ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ訴訟記録ヲ送致シ檢事ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ之ヲ三日内ニ還付シ(第六十一條)檢事ハ豫審十分ナラスト思料シタルトキハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事之レヲ肯セサルトキハ檢事ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ之ヲ還付シ(第六十二條)裁判官ハ檢事ノ意見如何ヲ問ハス豫審ノ終結ヲ爲ス可シ(第六十三條)豫審終結ノ決定書ニハ事實及法律ニ依リ其理由ヲ付シ管轄違ノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ拘留ス可キトキハ其理由ヲ明示ス可シ免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪トナラサルコト、公訴ノ受理スヘカラサルコト及ヒ其理由又犯罪ノ證據十分ナラサルトキハ其旨ヲ明示シ區裁判所ニ移ス言渡又ハ公判ニ付スル言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質、模様、證據ノ十分ナル

コト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ(第六十九條)重罪公判ニ付スル場合ニ於テ被告人ニ送達スヘキ決定書ニハ決定ニ對シ抗告ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載セサル可カラズ若シ其記載ナキトキハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ決定ノ送達アルマテ抗告期間ノ經過ヲ停止ス(第七十三條)豫審終結ノ決定ノ正本ハ速カニ檢事及被告人ニ送達ス可キモノトス(第七十一條)

右ノ外抗告ニ付キテハ上訴ノ部ニ免訴ノ言渡確定シタル後再ヒ訴ヘラル、コトアルカノ問案ニ付テハ之ヲ再審ノ部ニ讓ル可シ唯タ茲ニ研究スヘキ一問題アリ他ナラズ被告人最初ヨリ闕席ノマ、ニテ豫審進行セルトキハ如何ニ局ヲ結フヘキヤ換言スレハ豫審ニ闕席終結ノ決定ナルモノアリヤ否ヤノ問題はナリ

治罪法第二百三十一條ニ被告人ヲ逮捕スルコト能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタルトキハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シト規定シテ明ニ闕席ノ終結アルコトヲ指示シタリ然ルニ現行法ニ於テハ此法文ヲ削リタルヲ以テ此點ニ關シテハ我現行法ハ更ニ規定スル所ナシ實際ノ慣例素ヨリ區々ニ出テ未ク一定セスト雖モ闕席ノマ、ニテ



豫審ヲ終結スルノ例往々アルカ如シ其理由ハ治罪法ニ規定アリテ現行法ニ之レナキモ條理上之ヲ爲スコトヲ得ヘシトスルモノナリ(若シ夫レ治罪法ニ規定アリテ現行法ニ之ナキヲ知ラサルモノハ茲ニ論スルヲ要セス)然レトモ此論モ亦採ルニ足ラス今其論旨ヲ聞クニ曰ク元來豫審ハ書類主義ヲ原則トス故ニ終結決定書ハ言渡ヲ爲サス送達ヲ爲ス既ニ書類主義ニ基カンカ裁判所ハ一回モ被告人ヲ訊問スルコトナク豫審ヲ終結スルモ復タ何ソ妨ケンヤ是レ豫審ノ欠席終結ノ決定アル所以ナリト此說タル一應理アルカ如シ送達ヨリ之ヲ看レハ或ハ欠席ニテ終結スルコトヲ得ヘシ然レトモ一回モ被告人ヲ訊問スルコトナクシテ終結スルハ正當ノ手續ニハアラス何ヲ以テ之ヲ言フカ被告人ハ一方ヨリ云ヘハ證據發見ノ一器械ナルモ又一方ヨリ見レハ當事者ナリ豫審判事ハ證據ヲ集取スルモ一面ニ於テハ公平ナル裁判官ナリ裁判官一方ノミヲ聞キ他ノ一方ヲ聞カスシテ公平ナル裁判ヲ爲シ得ルカ余ハ明文ナケレハ如斯事ヲ爲スヲ得スト信ス又假リニ論者ニ一步ヲ讓リ欠席ニテ豫審ヲ終結セントセハ如何ナル手續ニテ之ヲ終結セントスルカ公示送達ヲ用ユルヤ否ヤ余ノ聞カント欲スル所ナリ最後ニ欠席裁判ニハ

故障アリ豫審ノ欠席終結ニ對シテ故障ヲ許スヤ否蓋シ欠席裁判ハ被告人ノ欠席ニ對スル一ノ刑罰ニ外ナラサレハ被告人出頭シタル時ハ之ヲ取消シ事件ヲ常體ニ復サ、ル可カラス然ルニ豫審中ニハ此手續ナシ佛國法ニ依レハ豫審終結ノ決定ニ對シ故障アリ控訴アリ上告アルモ抗告ノ外是等ノ手續ハ一モ我法律中ニハ規定ナシ以上ノ三點ハ以テ豫審ニ欠席終結ナキコトヲ明カニスルニ足ラン

第十二編 公判  
第一章 總說

公判ハ當事者口頭辯論ノ結果ニ由リ終局判決ヲ以テ訴訟ノ關係ヲ消滅セシムル訴訟ノ一段階ヲ云フ夫ノ上告ノ如キ又ハ欠席裁判ノ如キハ公判ノ例外タルコト勿論ナリ通常公判ニハ口頭辯論主義ヲ用シ其結果ニ因リ終局判決ヲ爲シ以テ訴訟ヲ消滅セシム從テ曾テ講述セル口頭辯論主義公開主義及權利義務主義特ニ權利主義ハ是ニ至リテ初メテ勢力ヲ有スト謂ツ可シ口頭辯論主義公開主義及義務主義ニ付キ既ニ論シタルヲ以テ茲ニハ公判ニ於ケル權利主義ノ行ハル、場合ヲ列舉スレハ凡ソ左ノ如シ



第七十七條ハ此主義ノ結果ナリ曰ク被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシト即チ被告人ニ身體ノ自由ヲ與ヘ形式上檢事ト被告人トノ不權衡ヲ避ケタリ被告人公廷ニ出席シ攻撃防禦ノ方法ヲ用ユルハ是レ被告人カ訴訟上ニ有スル權利ナリ(第九十八條、第二百二十條)

以上ニ察ケタル數條ノ規定ニ由リテ看レハ裁判所ニ出席スルハ被告人ノ義務ナルモ復タ被告人ノ訴訟上ニ於ケル權利ナリト云フコトヲ得ヘシ而シテ此例外トナルハ第一、闕席判決(第二百二十六條)第二、被告人出頭シテ辯論スルコトヲ肯セサル場合又ハ被告人審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲シ裁判長ヨリ退廷又ハ拘留ヲ命セラレタル場合(第八十二條)第三、證人ヲ取調フルトキ被告人ノ現在ヲ不可トスルトキ一時被告人ヲ退廷セシムル場合(第九十七條)是レナリ此三個ノ例外ヲ除ケハ被告人期日ニ出席シテ攻撃防禦ノ方法ヲ用ユルハ之カ權利ナリ(第二百二十六條)ハ被告人カ權利ヲ拋棄シ得テ他人ヲシテ代行セシムルヲ得ルノミニ過キスシテ權利主義ノ例外トナル可キモノニアラス故ニ以上ノ三場合ヲ除ケハ被告人ハ公廷ニ出席スルノ權利アリ從ツテ證據ヲ提出シ並ニ辯論ニ參與スルノ權利

アリ公判ノ主義ハ右ニ述フル所ノ如シ豫審ト其主義ヲ異ニセルコト殆ント辯チ俟タサルモノアリ即チ豫審ニ於テハ裁判官被告人ヲ逮捕シ證據ヲ集取スルモ公判ニ於テハ檢事ノ立會ヲ要シ被告人訴訟ニ出席ノ權利ト義務トアリ斯ク檢事ト被告人ト兩々相對シ裁判官ハ其中間ニ立チテ其辯論ヲ聞キ證據ニ因リ公平ニ裁判ヲ下ス是レ公判ニ於ケル訴訟手續ナリ從ツテ判決ヲ下スニ至ル迄ノ手續法文上明瞭ナラサル可カラズ然ルニ我刑事訴訟法ノ公判ノ規定ハ甚ク不完全ニシテ殆ント豫審ノ手續ヲ用ユルヲ得ルカ如ク又ハ用ユルヲ得サルカ如ク曖昧不明ニシテ法意ノ所在ヲ知ルニ苦マサルヲ得サルナリ今其豫審ノ手續ヲ準用スルヲ得ル方ヨリ云ヘハ第九十條ノ規定是ナリ曰ク第十五條以下ノ規定ハ公判ノ證人ニ第三百三十五條以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準用スト試ミニ問ハシテ其他ノ手續ハ如何ト證據ヲ集取スルハ何人ナリヤ若シ豫審ニ於ケルカ如ク判事ナリトセハ判事ハ自由證據主義ニ依ル可キヤ將テ制限證據主義ニ依リテ判斷ス可キヤ一モ公判ニ於テ明文ヲ看ルコトナシ不完全モ亦甚シト謂ツ可シ若シ夫レ此不完全ノ儘ニ放置センカ公判ニ於テハ到底裁判ヲ爲スコト能ハサル可シ然ラ



ハ豫審ハ全部ヲ公判ニ準用ス可キカ豫審ト公判トハ其性質ヲ異ニセリ安ソ豫審  
手續ヲ以テ公判ヲ律スルコトヲ得ンヤ其不可ナル殆ント言フテ俟タス然ラハ如  
何ニ爲スヘキカ思フニ刑事訴訟法ハ一ノ手續法ナリ刑法ノ如ク實體法ニアラス  
從ツテ刑法ノ如ク必スシモ嚴格ニ解釋スルヲ要セス出來得ル丈ハ有効ニ解釋シ  
以テ法律ヲシテ死文徒法ニ終ラシム可カラス因ツテ余ハ出來得ル丈豫審ノ規定  
ヲ公判ニ準用シ以テ公判ノ規定ノ足ラサル所ヲ補足スルヲ以テ解釋家並ニ執法  
者ノ妥當ヲ得タルモノト爲サン以下此精神ニ基キ公判ノ規定ヲ講述スヘシ

### 第二章 公判ノ訴訟手續

#### 第二節 判決前ノ訴訟手續

事件ノ公判ニ移ル可キ方法ニ四アリ即チ左ノ如シ

- 一、豫審判事ヨリ事件ヲ送付シタルトキ
- 二、檢事ヨリ直接ニ起訴アリタルトキ若クハ即決處分ニ付キ被告人ヨリ正式  
裁判ノ求メアリタルトキ
- 三、上級裁判所ヨリ事件ヲ移送シタルトキ

公判ノ訴訟  
手續ノ  
判決前ノ  
訴訟手續

四、大審院ノ特別事件ニ付キ自ラ決定シテ公判ニ付スルトキ  
是等ノ方法ノ一ニヨリ裁判所事件ヲ受理シタルトキハ開廷日ヲ定メ檢事及被告  
人ニハ少クトモ二日前(第二百十四條第二項、第二百五條)并ニ辯護人アルトキハ  
辯護人ニ通知セサル可カラス

第七十八條ニ曰ク裁判所ニ於テハ何時ニモ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人  
ニ對シ拘留狀又ハ拘留狀ヲ發スルコトヲ得ト普通手續(第二百十四條)ニ依リテ被  
告人ヲ呼出スコトヲ得ル場合ハ別ニ問題トナルコトナシト雖モ若シ被告人呼出  
ニ應シ出席セサルトキハ如何豫審ノ手續ヲ準用ス可キヤ否ヤ一ノ疑問ナリ豫審  
ニ於テハ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノト思料シタルトキニアラサレハ拘留狀ヲ  
發スルコトヲ得ス(第七十五條)又拘留狀ヲ發スルニ付テモ幾多ノ條件ヲ要ス(第七  
十二條)今豫審ノ規定ヲ公判ニ準用シ呼出ヲ受ケテ公判ニ出席セサル被告人ニ對  
シ勾引狀勾留狀ヲ發スルニハ尙ホ是等幾多ノ條件ヲ要スルカ將テ第七十八條  
ノ法文ニ何時ニテモトアルニ依リ公判ニ於テハ全然是等ノ條件ヲ要セサルヤ否  
ヤ是レ疑問ノ要點ナリ此點ニ對シ二説アリ一ハ條件ヲ要スト爲シ一ハ條件ヲ要



セスト爲スモノ是ナリ現行ノ慣例ニ於テハ「何時ニテモ」ノ一句ニ重キ置キ豫審ニ於ケルカ如キ條件ヲ要スルコトナシ何時ニテモ勾引狀勾留狀ヲ發スルコトヲ得ト爲スモノ、如シ試ミニ一步ヲ譲リ慣例ノ解釋ヲ以テ是ト爲スモ法文ニ所謂禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ト云フハ何人カ之ヲ決定スルモノナルカ裁判所カ將テ裁判長カ法文ノ如シ裁判所ナリトセハ實際上不便ナリ且ツ何時ニテモ「トハ實際ノ慣例ノ如シ解釋スルヲ得スト信ス治罪法ニ於テハ公判ニ勾留狀收監狀ヲ發スルコトナシ隨テ豫審ニ於テ被告人ニ對シ拘留狀ヲ發シ其儘ニテ公判ニ付シタルトキ期間ノ經過ニヨリテ當然被告人ヲ釋放セサル可カラサルノ不都合アルニヨリ刑事訴訟法ニ於テハ此不都合ヲ避クル爲メ何時ニテモ被告人ニ對シ勾引狀又ハ勾留狀ヲ發スルコトヲ得ト規定シタルモノナラン「何時ニテモ」ハ令狀ノ性質ニ影響ヲ及ホスモノニ非ス唯必要ナル時之ヲ發スルヲ得ト解釋シ其他ノ手續ハ豫審ニ讓ルトスル方穩當ナラン

右ニ述フル如シ判事ハ被告人ニ對シテ呼出狀ヲ發シ若シ必要アルトキハ勾引狀又ハ勾留狀ヲ發スルコトヲ得ルモ是等令狀ノ執行、制限及ヒ性質ハ豫審ニ於テ述

刑

ヘタル所ト異ナルコトナシ即チ其形式、効力、制限モ皆ナ豫審ニ於テ述ヘタルモノヲ準用セサル可カラズ

保釋ハ公判ノ規定中一言ノ此ニ及フモノナシ於是乎公判ニ於テ保釋ヲ許スヤ否ヤノ議論ヲ生セリ之ヲ否トスル者ハ曰ク保釋ノ規定ハ第五十條ニ「豫審中」云々トアリ從テ保釋ハ豫審ニ限ルモノニシテ公判ニハ之ヲ許スコトナク責付モ亦之レト異ナルコトナシト然レトモ他ノ點ヨリ論シ來ラハ容易ニ其然ラサルヲ知ラシ又ハ責付ヲ爲スヲ得重罪ニ該ルモノト思料シタルトキハ必ス之ヲ取消ス可シトセリ然ラハ重輕罪事件ニ付キ豫審中許容セル保釋繼續シテ其効力公判ニ及ホスコトアル可シ必スシモ論者ノ言ヘルカ如シ保釋ハ豫審中ニ限ルモノニアラサルコトヲ知ラン次ニ一步ヲ進メテ豫審中許容セル保釋ヲ繼續シテ其効力公判ニ及ホストキ被告人裁判官ノ呼出ヲ受ケ相當ノ理由ナク出頭セザリントキ如何ニスヘキヤ公判ニ規定ナシトテ之ヲ放置スヘキモノニアラス必スヤ豫審ノ第五十條ヲ假リ來リテ保釋ノ條件ニ違背シタルモノトシテ之ヲ取消サ、ル可カラサ



ル可シ斯ノ如ク豫審中許容セル保釋其効力ヲ公判ニ繼續スルコトアリ又公判ニ於テ保釋ヲ取消スニ豫審ノ手續ヲ準用シ得ルモノトセハ公判ニ於テ新ニ豫審手續ニヨリテ保釋ヲ許シ亦之ヲ取消スモ何等ノ支障スル所ナカル可シ從ツテ余ハ明文ナキニ拘ハラズ公判ニ於テモ尙ホ保釋アリト斷言セシトモ者ナリ尤モ或ハ公判ニ於テ保釋ヲ許シ又ハ取消シ得ルハ單ニ豫審ヨリ繼續シタル場合ニ限ルト論スルモノナキニアラスト雖モ余輩ハ之ニ從フコト能ハサルナリ又責付ニ於ケルモ是レト異ナルコトナシ

臨檢搜查ノ手續モ亦公判ニ至リ其規定ハ甚タ不完全ナリ即チ唯々第二百十六條及第二百三十八條ノ二條アルノミ此等ノ規定ニ依レハ單ニ臨檢ト檢證トヲ規定シタルニ止マリ特ニ區裁判所ニ於テハ豫審ヲ經サル事件ニシテ急速ヲ要スルトキ公判前ニ檢證處分ヲ爲スヲ得地方裁判所ニ於テハ受命判事ヲシテ臨檢ノ報告ヲ爲サシムルニ過キス其他ノ證據物集取ノ手續ハ一モ規定スル所ナシ故ニ臨檢檢證等ノ手續ハ凡テ豫審ニ於ケルモノヲ準用セサル可カラス從ツテ其條件及制限ハ皆豫審ニ於ケルモノヲ遵守セサル可カラス

證人鑑定人ノ呼出ハ既ニ豫審ノ部ニ於テ述ヘタル手續ヲ準用スルヲ以テ茲ニ再說セス唯々公判ニ於テハ調書ヲ作りタル司法警察官(第八十八條)豫審ニ於テ訊問シタル證人鑑定人ヲ證人鑑定人ト爲スヲ得(第八十九條)檢事被告人ヨリ證人ノ請求ヲ爲ストキハ證人ノ氏名目錄ヲ開廷前一日前ニ相手方ニ送達シ(第九十二條)證人ニ對スル呼出狀ハ送達ト出頭ノ間少クモ二十四時ノ猶豫ヲ與ヘサル可カラス然レトモ證人ニシテ異議ナキ以上ハ直チニ證人ト爲スヲ得(第二百十七條)呼出狀ノ書式ハ豫審ニ依ル(第九十條)鑑定人ニ對シテモ亦然リ(第九十條)

### 第二節 公判

公判ハ裁判長之ヲ開始シ又ハ終結シ訴訟上ノ指揮ヲ爲シ凡テ自ラ訊問ヲ爲ス裁判長ノ手續ニ付キ異論アルトキハ裁判所之ヲ決ス(第九十四條)及第九十九條構成法(第四百四條)

裁判長公判ヲ開始シタル後先ツ被告人ノ氏名、年齢、身分、職業、住所、出生地ヲ問ヒ檢事ハ被告事件ヲ陳述スソレヨリ裁判長ハ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問ス(第二百十八條)及第二百十九條第一項)被告人ヲ訊問シタル後始メテ證據調ヲ爲ス證據調



ニ付キ證人ヲ呼出シタルトキ互ニ言語ヲ接セシム可カラス(第九十三條)必要ナ  
リトスルトキハ裁判所ニ於テ被告人ヲ退延セシメ證人ノ供述ヲ聞テ後被告人ヲ  
入延セシメ其供述ヲ告知セサル可カラス(第九十七條)必要ナル場合ニハ共同被  
告人ニモ此手續ヲ用ユ(第九十七條)第二項鑑定人ニ付キ是等ノ規定ナキハ不完  
全ナリト云フ可シ

第二百十九條第二項ニ依レハ必要ナル調書其他ノ證據書類ハ書記ヲシテ朗讀セ  
シムルコトヲ規定スルモ第八十九條第二項ニ依レハ豫審ニ取調ヘタル證人ノ  
供述、鑑定人ノ鑑定書ハ更ニ證人鑑定人ヲ呼出サ、ルトキ證人鑑定人呼出テ受ケ  
出頭セサルトキ又ハ豫審及公判ニ於ケル供述鑑定ヲ比較ス可キトキハ訴訟關係  
人ノ請求ニヨリ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ朗讀セシムルコトヲ得ルカ故ニ是等ノ  
書類ハ必スシモ朗讀セシム可キモノニアラス第二百十九條第二項ハ是等書類ニ  
付キテモ書記ヲシテ朗讀セシムルコトヲ規定シタルモノト云ハサル可カラス其  
他證據物件ハ之ヲ被告人ニ示サ、ル可カラス  
裁判長ハ證人鑑定人ノ供述、鑑定書又ハ書類ノ朗讀物件ノ指示後一々被告人ニ意

見アリヤ否ヲ問ヒ利益トナル可キ反證ヲ提出シ得ヘキコトヲ告知ス可シ(第九  
十八條)

證據調終結シタル後檢事ハ事實並ニ法律ニ付キ意見ヲ陳述シ被告人及辯護人ハ  
答辯ヲ爲スコトヲ得檢事、被告人及辯護人ハ互ニ辯論ヲ爲スコトヲ得ルモ最終ノ  
辯論ハ被告人又ハ辯護人ノ特權ナリトス

### 第三節 判決

現行刑事訴訟法ニ依レハ判決ニ左ノ四種アリ

- 一、管轄ニ付テノ判決(第二百二十二條)
  - 二、有罪ノ判決(第二百二十三條)
  - 三、無罪免訴ノ判決(第二百二十四條)
  - 四、缺席判決(第二百二十六條)
- 以上ハ主タル判決ナリ從タル判決ハ左ノ如シ
- 一、訴訟費用ノ言渡(第二百一一條)
  - 二、沒收ノ言渡(第二百二條)



三、還付ノ言渡(第二百二條)

第一、管轄ニ付テノ判決 管轄ニ付テノ言渡ハ裁判所カ管轄違ノ言渡ヲ爲ス場合(第二百二十二條)ト當事者ヨリ管轄違ノ申立ヲ爲シ裁判所之ヲ却下スル場合(第百八十七條)ナリ後者ノ場合ニ於テモ上訴ニ關シテハ主タル判決ト見做ス、管轄ニハ事物ノミナラス土地ノ管轄ヲモ其中ニ包含スルカ故ニ上級裁判所ニ於テ審理シタル事件ノ下級裁判所ノ管轄ニ屬ス可キモノナルコトヲ發見シタルトキハ管轄違ヲ言渡スコトナシ自カラ裁判セサル可カラス(第二百四十條)

第二、有罪ノ判決 裁判所ハ訴ヲ受ケ其事實ヲ取調ヘ犯罪ノ證據十分ナリトスルトキニ法律ヲ適用シ有罪ノ判決ヲ爲ス

第三、無罪又ハ免訴ノ判決 無罪ノ判決ト云ヒ免訴ノ判決ト云フモ殆ント區別シ難キモノアリ第二百十四條ヲ看ルニ曰ク犯罪ノ證據十分ナラス又ハ被告事件罪ト爲ラサルトキハ判決ヲ以テ無罪ノ言渡ヲ爲シ又第百六十五條第三號以下ノ場合ニ於テハ判決ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シト試ニ問ハシテ區別ヲ爲シテ何ノ得ル所カアル其再ヒ起訴セラル、コトナキニ至リテハ兩者ノ間ニ區別アリ

ルコトナシ蓋シ判決ヲ無罪ト免訴トノ二ニ區別シタルハ遠ク歐洲ノ中世紀ニ起レリ其故ハ他ナラス當時ノ法律ハ制限證據主義ヲ採リタルヲ以テ罪證ノ確實ナラサルモ未ダ必スシモ明白ニ罪證ナシト云フ可カラサル場合ニハ免訴ノ判決ヲ下シ而シテ犯罪ナキコト明白ニシテ疑ヲ容ル、能ハサル場合ニハ無罪ノ判決ヲ受ケタル者ハ然ラス只證據十分ナラスト云フニ在レハ新證據アルトキハ再ヒ起訴セラル、コトアル可ク宛モ現行法ニ於ケル豫審ノ免訴ノ言渡カ其種類ニ因リ効力ニ大ナル差異アルカ如シ以上ハ歐洲ノ中古ニ於テ無罪ト免訴トノ二判決ヲ區別シタル所以ナリ然ルニ現行法ハ判決ニ斯ノ如キ區別ヲ設クルコトナシ徒ラニ訴訟上ノ手續ヲシテ煩雜ナラシムルノミ

告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付キ告訴ナキコト又ハ告訴ノ放棄ハ罪ノ成立ニ關係アルヲ以テ事件罪トナラサルモノトシ無罪ノ言渡ヲ爲ス可キモノト信ス

判決ハ何レノ判決タルヲ問ハス理由ヲ附セサル可カラス並ニ事實上ヨリ判決ノ理由ヲ附セサル可カラス(第二百三條)判決ニハ言渡ノ年月日裁判所及